

景樹の説
の問題

而して、調即ち歌なりと。これ景樹の思想なること、前に述べし如くなるが、更に進んで考ふれば、かくの如き聲音そのものが歌なりや、その聲音によりて言ひ表はされたる意味の如何は問ふ所にあらざるか、との問題、當然おこり來るべし。

景樹自らの思想が、第一説に傾きしは、明らかなり。彼によれば、嗟嘆の聲そのものが已に歌にして、鶯蛙の聲もまた歌と異ならざるなり。斯くの如きは、蓋し巧緻を排して自然を貴ぶの餘り、歌に理想あることを忘れたるものなり。景樹が、歌に理屈を避け、技巧の弊を斥けしはよし。玄かも、これとともに、理想を理屈と混同して考へしは、誤謬なり。否、景樹に於いては、未だこの混同を、殆ど全く氣付かざりしなり。彼はその間に、疑を挿むにいたらざりしなり。

然るに、彼の門下にいたりては、さすがに此點に疑問を抱くにいたりしなり。直好知紀の説は、此點に於いて、師説に比して稍深く論じ入りしものあり。

直好の解

直好、また古今集序註追考によりて窺へば、歌には理想ありて、鳥蟲の聲とは自らに異なることを考へしもの、如くなれど、彼に於いては、此點なほいまだ明瞭に考へられざりきと見えて、他の古今集正義總論補註に於いては、彼は、歌は唯聲の調のみありて、詞にあづからざるものなりと爲し、古今集序の言をさながらに解して、感情の聲即ち歌にして、花に鳴く鶯、水にすむ蛙の聲と、吾人が歌と、その性質少しも異ならずとし、古今集の言をさながら文字通りに解せむしたり。然るに知紀は、之に反して、ひたふるに自然を貴びて、歌を以て禽獸の物に感ずる聲と少しも異ならずとなすは、謬見にして、また實に、貫之の眞意にあらず。貫之が、花に鳴く鶯、水にすむ蛙云々の言も、譬喩と解すべきものなり。而して人の歌とうたひ出づるものは、嬉しとか、悲しとか、詞に述べ、様々に其心を言ひわくるものにて、禽獸の物に感じて鳴き出づるとは、更に混すべからざるもの。凡そ、歌となりて感爲す所は、その心と詞の調と相貫きて、天賦に背かぬ上にこそあるべけれ。さるを、たゞにその聲にのみ妙用ありて、禽獸の鳴き出づる所

知紀の解

と、少しも變る事なしと言ふは、正しからず。神代の歌といへども、無思直言ならむには、いかで神もあはれみ給ふ事あらむ。その心その詞、相協ひて、誠に美はしきに到らぬ限は、人といへども、感ずる事あるべからず」と。知紀が見解は、よく桂園派の調への説の誤を正し得たるものなり。

兩者の説と
其他の差

その他、知紀直好の説は、二三の點に於いて、やゝ別あり。即ち、直好が、あくまで古今集の歌風を以て理想とし、歌の藝術美を尊とべるに對して、知紀は、寧ろ、景樹よりは、眞淵派の理想と同じく、萬葉もしくはその以前の、作爲の跡なき自然の美を尊とび、技巧の美を斥けたり。まかも兩者が實際の詠歌そのものに就いて見れば、直好は言ふに及ばず、知紀もまた、純然たる桂園風にして、萬葉風にあらず、古今風なり。また和歌と治道との關係について、直好が、歌に治道上の効果を認めむと傾けるに對して、知紀は、兩者の關係を去ひて認めざらむとし、又歌と學習とに就いては、直好が、その自然無思慮の思想より、師匠につきて學ぶてふことの、全然歌の本義に違ひ、又不必要なることをいへるに對して、知紀は、實際上より、なほその必要

を認めむとせる等、兩者説の異なる所なり。

三宅意誠

知紀直好に關聯して、擧ぐべき一二の説あり。第一は、同じく桂園門下の三宅意誠の説とす。意誠天保八年二月は、言葉の直路辨の中に、音と語との差別を論じて、一首の調は、語にあらずして音にありとし、音の響即ち性情の響にして、己が性情の喜愛を音韻にかけて詠する時、語これとともに活きて、そこに調の妙ある由を云へり。

山田泰平

又、同門下なる千秋館のあるじ山田泰平は、知紀の千代の古道を論じ、知紀が景樹の説をうけて、文法の詠歌に益なく、寧ろ害あることを云ひしを駁して、文法又調と同じく、自然の理なり。されば、調の理とともに、てにをはの則を重んずべく、調を魂とし、法則を手足として、活用すべきよしを云へり。泰平に歌學論といへる著ありといへど未だ見ず

木下幸文

桂園門下第一の歌才と稱すべき木下幸文文政四年二四は、學問に於いてもまた同門中最も勝れたりき。彼の隨筆亮々草子には、彼の學殖識見

のあと、うかいはるゝ文字多く、三山歌の説の如きは、事小なりと雖も、千古の卓見にして、定説を立てたるものあり。その外、彼が萬葉以下中世文學に就きても造詣深かりしことは、その文中にあらはる。

櫛のりか
宣長を

亮々草子の第三卷は、櫛のあかと題して、宣長の玉の小櫛中の歌論の、一節を批評せるもの、以て彼が歌論を察するを得。

宣長が説ける所は、源氏物語全篇の主意、即ちその情趣たる「物のあはれ」こそ、やがて歌の心にはあれ。歌よまむとするものは、よくこの心を學び、この心を旨とし、この物語の心を心として詠むべきなりといふにある。なるが、幸文は、これに對して、かくの如きは、即ち人間の情に古今雅俗の別をなして、歌の心を以て、眞の人情そのまゝ、即ち現在まことに感ずる情より離れて考へたるものとなし、これ實に眞情の聲を生命とする和歌の本旨に違へる説なりとなし、宣長の論は、歌を以て遊戯的に考へたるものなりとして、攻撃せるなり。即ち彼の眞情説の思想を以て、宣長が物のあはれの思想の根本を衝きしものなり。その論旨は、これに盡きたれど、更に彼

宣長の説と
彼の説

が説きし所に就きて見れば、宣長が、あくまで研究的に、中世文學の研究より、歌の本意を説き來れる學問的態度に對して、幸文が、自己の偽らざる感情と、その感情の要求に基づきて、その説を建てたる歌人的態度とは、好箇の對照をなせり。宣長の説の、説いて精しく、和歌の本旨を明らかにしたるあるは、素より認めらるれども、彼幸文が、歌人としての實際の經驗より、宣長の説を難せしも、亦當れり。歌は、粗野自然の情を詠むものにあらずとして、中世文學の物のあはれの情趣を重んぜし宣長の説は、歌の意義を説きしものとして動かすべからず。それに對して、中世の人情にならば、むとするは、やがて偽ならずやと難するは、宣長が「凡て歌は、神にも人にもきかして、あはれを見するわざにしあれば、よく詠まむと構ふるも、もとの眞心にして、後の偽にはあらざるを」といへる思想を解せざるものなり。その爲、彼は「歌にはたゞ古へ人のこと、深く思ふさまに詠めと言はれたるは、例の偽を教へたるなり。さるは、情あさきが情ふかきに劣れる事は論なけれど、それ今日の人情の限ならば、いかゞはせむ。よし淺き心もて

まひて深げに思はぬ事をたくみなしたりとも、おのづから偽のほころびて、淺き心のまゝならむよりは、中々あはれ淺かるべしとの極端に陥れり。まかも又「いま物に當りて、あはれとも悲しとも思へらむ時、それをやがて言ひはるけむとせすして、これをば、古人のいかゞ思ひけむ、源氏などにさる心ばへありやなしやと尋ねて、もし其趣なる事なき時は、いはでやまむとするか。又事にふれて、大方なげきの心おこらぬ時も、その事の様を、例の思ひめぐらして、かゝるをば、古人は悲しとよみたるからに、今も詠むべしとて言ひ出でよとや」といへるは、尙極端なれど、次いで、「凡そ人情嬉しかるべきは嬉しく、悲しかるべきは悲しく、あはれに面白きは面白き大むねの定まりはさる事ながら、其日其時の心ありて、さばかりならぬ事もあやに悲しく、いみじく悲しかるべきにも涙こぼれぬ類ひ、凡てあやしく取とめがたきぞ情といふものゝ常なりける。されば、古へのとまれ、人のいかにまれ、その感のすゝみたらむまゝをいふぞ歌の旨なるべき。先これは情の上につきていへるなり。……また物は古へ今同じくて、それをめづる心さ

まの古へ今異なるものは、唯今日の日の情に従ふべしなどいへるは、さすがに歌人歌を解せるものなり。

門下にさと
したる文詞

その他、同草子に、或は眞淵の歌風を論じたる、或は年山紀聞を駁して、歌は教誡を旨とせずと説けるなどあり。又彼の家集さや〜遺稿の終に門下にさとしたる文詞あり。その一つの中に、「いとけなくおはせし程より、今日の日まで、見あつめ聞きあつめ給へる古言の葉草にて、まこと新らしき一葉の雨露のうるほひ帯びたるものは侍らす。この古言の葉、一葉、残らず拂ひ盡くし、散らし盡くし給ひて、後、月に向ひ花にむかへる間、たゞ一言のいふべきものなき境にいたりて、その月より花よりおのづから我、まらずいひ出でらるゝこそは、かの古今集の人の心を種としてなれりといふ言の葉にて、天地のあらむきはみ、いかに摘みても盡くまじきとこしへものにては侍れ。」とあり。名匠の教として、味ふべきものなり。

高橋殘夢

なほ、言靈の説を稱へ、古歌に關する類纂の著多き高橋殘夢、嘉永四年二五

内山眞弓

に和歌六體考一卷あり。殘夢につきては、日本歌選上古之卷にまゐり、同書参照。こは、古今序の六義を、詩の六義に對へて、強ひて説かむとするは誤なりと論じ、自らの解釋を述べたるにて、かの室鳩巢が駿臺雜話中の説と共に、六義論の參考に資すべし。其外、内山眞弓嘉永五年二五は、師説を輯して、歌學提要天保十年刊東鳩亭塾中間書五卷天保十年を編せり。歌學提要は、前章景樹を論せし所にも屢々引用せしが、よく要領を傳へたる編述の功は、眞弓に偉とすべき點なり。

辨難

鈴屋桂園の門下に出でし重なる歌人の説に就いては、以上を以て述べたりぬ。ついで、こゝに附記すべきは、上記の各派殊に眞淵門下の一派對蘆庵景樹の一派の間になされたる辨難とす。そも、蘆庵に始まり、景樹に大成せし歌論及び歌風は、當時の歌壇を動かしたるもの大なりしかば、随つて、多く古學派の方面より批評を蒙りぬ。まかもその争や、いづれも好むところの歌風の差について説くにあらざらんば、極めて枝葉の論にして、所説の根本を究むれば、歸する所殆ど同じき

の争のさが

が多し。これその所説の畢竟單純なるに基づく。即ち争ふにも及ばざること、異を樹て、争ひし觀なきにしもあらずといへども、當時の歌壇の狀況を知るにたよりあれば、次にその大體について、説明せむ。その第一に舉ぐべきは、景樹の歌風が漸う世に知られ來し頃に當りて、江戸派の千陰、春海が、京師なる眞乘院雪岡雪岡は、かの京都にては蘆庵、蒲蹊、景樹等に月次會の歌を召し、江戸に下りては千陰、春海等を引見せられし妙法院宮眞仁法親王文化二年二四に親昵したりき。の囑により、景樹の歌十一首を批評攻撃し、それに對してまた蘆庵門下の小川布淑、桑門昇道、及び伴蒿蹊等の争へる筆のさがの件なり。千陰春海の評は、一首一首の歌の評にて、歌論の争ともいひがたけれども、その終にまゐりし、雅俗説に對して、布淑が書ける雅俗辨、ついで蒿蹊の讀雅俗辨、説昇道の雅俗再辨出既の争は、江戸派が情には雅情と俗情とあり、歌に詠するは雅情ならざるべからず、眞情を尙んで俗情に陥るべからずといへるを、布淑昇道がたゞこと歌の立場より辨じ、蒿蹊またこれに言ひ及べるなり。之に加ふるに、京都なる佐々

木眞足天保十年二四が、東さとしに於いて、布淑と同じ見地よりして、景樹に同情を寄せたるあり。八田知紀の桂園入門以前文政十三年秋に書き添へし批評もあり。所詮これ京都派對江戸派の争なり。

小林斐成の辨ふるの中道

次にまた、春海派の系統をひきて、清水濱臣の門に出でたる小林斐成は、文政十年に、ふるの中道辨を著し、眞淵派の側に立ちて、蘆庵の説を駁せり。歌論として注意すべきふしなしといへども、蘆庵が記紀より引用せる歌句の杜撰、語釋の誤等を指摘して、その古學に疎かりしことを非難せるは、さすがに當れり。(中に名所について、古來の定めに拘むべからざることをいへる言は、味はふべし。)これ、京都派對眞淵學統の争の第二なり。

業合大枝の新學異見辨

次に又は、はじめ高尙に學び、後篤胤の門に入りし業合大枝嘉永四年六一に、新學異見辨文政十二年稿の著あり。景樹が新學異見の所説を駁したるにて、大體に於いて、眞淵の原説を辨護せるものなるが、また實に師高尙の説を承けたるものあり。即ち、その萬葉の古風を主張したるところは、眞淵と同じけれども、彼は單に、古歌の自然を尊ぶといふに止まらず、第一

山平伴鹿の新學異見辨

に、歌の、景樹のいふが如く、實情を自然に述べたるものにあらず、技術たる制約のもとに、歌詞を以て、格によりて歌ひ出でたるものなるをいひ、この見地より、古歌を學ぶことの必要、古語を用ゐることの當然なるを論じたり。彼が景樹の自然説を主張したる言、若これを似せたらむは、やがて飾れる偽のみを批評して、よき人の教によりてよく成りたる人も、やがて飾れる偽と言ふべきか。此説の如きは、人もあしき人は、あしきにてあるが、やがてよき人なり。歌も、生れ得てあしき歌よむものは、悪しきにておくがまこと、よき歌なり、といはむが如し。」といへるは、よく景樹の説の缺點を攻撃せるものと云ふべし。又、同じく文政十一年に、山平伴鹿が著はせる新學異見辨一卷あり。こは、そもく翁茂は、後世の弊を正して、復古をもはらに説をたて、香川氏は、たゞ翁の左につかん事を嫌ひて、殊更に邪説を設くとなして、逐條景樹の説を難じて、眞淵をたゞへたるものなり。これ京都派對眞淵派の争の第三なり。

また景樹が百人一首の註釋百首異見に對して、はじめ野之口隆正の門

に入り、後、鈴屋の學風を慕ひし、萩原廣道文久三年二五は、百首異見稿評を著したり。廣道未だ二十六歳、藤原濱雄といひし天保十一年の作なるが、さすがに、景樹が異見をたてむとする餘り、強辨に流れし點を批評して、公正の見をたてたり。こは景樹が學風に對する批評なり。(廣道には、他に、心の種二卷、葉山のまをり一卷あれど、零碎なる作歌法の断片なり。彼がその名著源氏評釋に述べし意見について見れば、彼が歌について抱きし意見は、宜長が玉の小櫛の説を祖述せしものなり。彼が評釋に試みし卓見達識を以て、萬葉の評釋など物したらましかばと思はる。)

以上は、とにかく歌論上の争なるが、他に、作歌についての辨難攻撃またなされき。

その一つに、蘆庵に、當時の京都歌人の和歌を評せし難藏山集天明二あれば、これに對して、大平の門人なる遠江人小栗廣伴に、難藏山集辨安政五年あり。

景樹の歌について、筆のさかの辨難ありし後、三十餘年を経て、彼が晩年

大ぬさの
争

に出だし、家集桂園一枝に就いて、春海の門人秋山光彪天保三年二四これを評して、桂園一枝の書入を物せしに、天保四年に、景樹門下の中川自休天保十二年二五〇一大ぬさを著して、それを辨駁せり。こは自休の名をおへりといへども、その實景樹の筆になりしもの、如し。まかも文中、光彪の歿後なるに係はらず、かくいふを更いかに答ふるなどあるをもて、光彪の門人丹羽氏暉、天保八年に、大ぬさ辨を著して、自休を駁せしを始め、大ぬさ辨に四田直養の評及び中島廣足安政二年二が後に附記せし評あり又江戸なる石橋眞國安政二年二は、大幣聞書を著し、會津人樸亭のあるじ相川功垂は、天保七年にぬさのよる瀬をものして江戸なる井上文雄、清水光房に評を請ひて、そが加評を添へし一卷あり。又蘆庵の流を汲める海野遊翁の門なる駿府の醫師花井有年慶應元年二七は、大ぬさ評判を著し、に、近江人孝季は、大ぬさ評判辨を物し、更に駿河人松木直秀慶應元年二五ひくてあまたを著したりき。また、碩鼠漫筆、墨水抄等の著者にして、考證學に精しき黒川春村慶應二年二五は、天保六年に、燒鎌一卷を著して、大ぬさの誤を指摘し、三十餘項にわたりて論じたり。

桂園一枝拾遺評とその

また別に、信田稻麿は、文政十三年七月に、桂園難歌撰を著して、桂園一枝の歌六十九首を評し、かつたことにひとしき歌の多きを難じたり。そを更に、同年十月、座田太氏が、古歌の例を擧げて駁せるものあり。

又春海の門なる小林歌城出は、嘉永六年に桂園一枝拾遺評を著はし、に、遊翁の門に學びて景樹を慕ひ、彼の桂の落葉を出だし、仲田顯忠萬延元、二五二〇之に對して、辨解の態度をとりたる桂園一枝拾遺評の再評あり。

これらの諸書、その間に、多少の歌論上の意見の差なきにあらざりきといへども、主として一首／＼の上に於ける小争にして、記すべきほどのもの無し。

第九章 富士谷成章同御杖

獨立の學風

近世諸歌學の主なる學派、及びその代表者の學說の歴史は、既に述べしが、次に吾人は、本章に於いて、是等の歌學の流派以外に、立ちて、異彩ある學風をなし、富士谷成章安永八年二四同御杖文政六年二四に就いて述べざるべからず。時代よりいへば、成章は宣長と同時代八年おそく生れて、去れ、御杖は景樹と同時代同年早く世を去れりに屬すれども、こゝに叙する所以は、全くその學說の、他の學派に交渉なくして、獨立せる故なり。

富士谷成章

成章は、堂上歌學の系統を承けて、有栖川職仁親王出の點を請ひしかど、成章家舊派歌學の糟粕に甘んずる如きは、決してその古語古典に關する深遠なる學識の許す所ならざりしもの、如し。されど、堂上歌學に學びしだけに、中世歌學に對する知識は、遂かりしが、もと成章は、語學に、専らにして、歌學はその傍の業なりき。随つて、歌學に關する彼の著書は、少なし。

即ち

六、運圖略并辨 一卷

五、級三差 一卷

外に

歌袋 六卷 寛政五年刊

あり。歌袋は、御杖によりて完成せられ、公にせられつれど、その説多くは成章のいだし所によれるもの、如くなれば、姑く成章の説と認めて説くべし。なほこの書は成章の弟、小河成均寛政八年二四五六歿五〇も與かりしもの、如し。

歌袋に就いて見るに、その語學に關する説は之を省く。その主なる説は、中世歌學を祖述して、和歌の修辭論を詳述せるものと、歌體の變遷を説けるものとに、大別せらる。まづ前者より述べむ。

彼は、歌の要素として、心、聲、詞、姿、旨、趣の六つを擧げぬ。彼曰く、「歌の重んずる所は、内にありては、志なり。外にありては、聲なり。聲の綾を詞と云ふ。皆

歌袋

修辭的論

歌の要素

六則論

心

心の幸御魂なり。詞の様を、姿といふ。理りを、旨と言ふ。旨の様を、趣といふ。まかもその荒御魂は、皆心にて、心の様もまた趣といふ。趣の荒御魂外にありては見る物聞く物これなり」と。彼の意を考ふるに、歌は人心の發表なり。中心の思、聲音となりて現はれ、その聲音の内容あるものが、詞なり。その詞の用ゐざるうちに、姿あり。又詞の意味が旨にして、その旨のうちに、趣存す。而して姿といひ、旨といひ、趣といふも、所詮内なる心の發表にして、歌の要素をなすにあり。而して彼の六則論は、即ち根本なる心とその發表なる詞、姿、趣の三つよりして、歌を論せるものなり。

心については、彼は、古への歌の旨とする所は、たゞ志を述ぶるに過ぎずとして、真情をもととして詠み出づべきを云ひ、題詠の弊として、歌を虚偽ならしむるを難じぬ。まかも彼は、又一方に、題詠の稽古の上の功を認むるを忘れず、その必要なるを説けり。彼曰く、「されば題詠を翫ぶ事は、古への道にあらずといへども、今にして歌の趣を知り、詞をいひ馴れむに、之よりよきは無し」と。更に進んで、「たゞたくみならむ」とする程に、おの

趣

づからそゝるなる風情を思ひめぐらす程に、終におのが眞心を述ぶるに至るなるべし」と言へり。次に、趣、即ち情趣、もしくは趣向に就いては、彼はその歌に重んずべきものなるよしを説き、まかも、餘りに新奇に流れて、眞心を離れたるは、歌らしき風情を離れたるものにて、よからずとなし、餘りにおいらかなる事、卑しく今めかしきけはひ、あはつかに心いられたるさまなどは、歌に異なる趣なれば、好み詠むべからず。たち入るべき趣は、大方古へに詠みふるされて、更に珍らしき事もあらぬやうに思はるれど、世の中のことわざは、降る雨よりも、繁く行く雲のやうに移りて、かはれる趣、盡くる事あらむや。況んや、人の心は、面の如く、均しからざるをもて、珍らしきを求めむに、なほ詠み残せる趣なからむや。「折節の眺めも、物事の有様も、よく其まことを尋ねて、心を一筋にあらはすべし。深くあはれと思ふ所だに、詠みはづさずば、いかばかりの景色有様も、一つにこもりて聞ゆべし」といへり。陳腐を避くると共に、新奇に走るを斥けし彼の考は、これらに伺ふべし。第三に、詞に就いては、彼は、その一言一句歌に輕んずべからざるこ

詞

姿

とを言ひ、古歌の純正を模範として、野卑の詞の避くべきを言へり。まかも、なほ主とすべきは心にて、詞は末なれば、詞に使はるべからざることを注意せり。彼の言に、「歌の三十一字、幾程もなき内に、思ふ事言ひ極めむには、空しき詞をば、一文字なりとも増すべくもあらず。」また、「詠歌大概に、詞を先にせよとあるをもて、詞の花を飾り、心の實をおろかにする人あり。もとを忘るといふべし。かの詞を先にせよとは、心たしかなるも、それにかけあふ詞なきは、よき歌と言ひ難きをもて、まかのたまふなり。されば、清輔朝臣は、心詞は、鳥の左右の翼の如し、とのたまへり。此二つの法は、歌の巧拙を知らしむる爲、かくいろくにして論し給ふなれど、歌の本意とする所は、心を本とし、詞を末とすべきなり」と。第四に、姿に就いては、彼は、或は古人の説を祖述して、餘韻といふことを説き、或は詩學の思想を受けて、含蓄を説き、優雅幽玄にして、華に流れざる姿を理想とせり。かくの如き彼の説は、別に創見は無しといへども、その説精細、中世歌學の諸書が、よく讀破せられ、消化せられ、而して、また、多少組織だてられたり。彼が堂上歌學の薰陶

を受けて、中世歌學にも深き知識を有せりしことは、以上歌袋に論ずる所にて明らかなり。

五體

よせ歌

むかへ歌

まもらへ歌

かさね歌

のばへ歌

第二に、彼の五體の説は、貫之が六義によれる分類を斥け、彼自らの見地より、和歌を分類せるもの、即ち、のばへ歌、よせ歌、むかへ歌、まもらへ歌、及び重ね歌の五つなり。よせ歌とは、詞の縁にすがりて詠みしもの、「立別れいなばの山の峯に生ふるまつとし聞かば今歸りこむ」の類。序歌も、此うちに屬す。むかへ歌とは、「明けたてば蟬のをりはへなき暮らし夜は螢のもえこそ渡れ」の、晝の蟬、夜の螢を對照せるが如く、對照を以て一首をあやなしもの。「まもらへ歌」とは、古事本説に據りて詠めるもの。「夢にだに見えずといかで告げやらむうつ山路は逢ふ人もなし」の類。重ね歌とは、本文本歌、或は詩の心を思ひ、又詞を取りて詠みし、所謂本歌取のたぐひなり。而してこの四つに屬せざる普通の歌をおしなべて第一ののばへ歌とす。「貫之の、六くさにわかてる歌ども、今は此一かたのうちに入るべし。見聞く事をも言ひ、思ふ事をも言ひ、物にも喩へ、人にも詠みかく。皆のばへ歌なり」

六運

和歌變遷
六期

と言ひ、此ののばへ歌こそ、五體中の重なるものにて、好み詠むべきものなることを言へり。彼の五體の分類は、要するに修辭上のものにして、その分類も勿論不完全なるものなり。

更に注意すべきは、第二の六運の説とす。こは言語の時代的變遷を論せるがもとにて、歌にも及ぼしものなり。彼が語學の著あゆみ抄のはじめに、已に六運の時代別見えたり。

その説によれば、彼は、古今の和歌の變遷を六期に分ちて論せり。即ち、上つ世、中昔、中頃、近昔、おとつ世、今の世の六期とす。その各に就いていはむか。第一の上つ世は、開闢より光仁の世までを押なべて含む。後代の歌の道の祖なる時代なり。第二は、中昔にして、光仁後、花山に至る二百五年間。後代の歌の模範時代なり。そを更に三期にわかす。清和までを初つ方として、歌風質實なり。その後醍醐村上までを中期とし、歌風優美にして、自然を失はず。其後を後期とす。歌風技巧に傾けり。第三は、中頃にして、花山後、後白河まで百七十二年のほどを含む。今の世の歌の心

の親なる時代にて、前後二期にわかち得べし。前期の歌は、之を中昔のもの
 と比較するに、「花と錦の様にて、彼はまことしく、是はめでたき勝れたる
 が、おのづから世變りて見ゆ」。後期の歌風は、「殊に物あきらかに、晴やかな
 る姿に成果て、心も詞も滞りなく、理も姿も求むるに心たらひて、泉の湧
 くやうに、唯いで來にけむ頃なり。第四は、近昔にして、後白河後四條まで、
 八十四年がほどなり。こは今の世の歌の詞の親なる時代、即ち歌風燦爛
 たる新古今時代なり。第五は、おとつ代にして、その後、後花園まで二百二
 十二年の間なり。「凡そ此きは、繪にかける女の顔の色あひ、つらつき、ま
 み、髮際、眉びき、鼻筋、あかぬ所なくかゝむとて、かきたるが如し。まことの
 人の顔のそれには、少し劣りたるも、物言ひ打笑は、多く勝りぬべきを、是ぞ
 あかぬ事なきうち、あかぬ事なるべき」と評せり。第六は、今の世にして
 その以後の時代なり。彼が六運の説は、議すべき點なきにあらねど、和歌
 變遷の大勢にわたりて論じたる、見解と學識とは、大に推奨すべきものな
 り。素より和歌の歴史にわたりて、その變遷を論せしもの、古くは俊成が

北邊七體七
百首

古來風體抄に、「文體三變」を引きて説きし以來、近世諸學者にいたりて、多少
 の見解を述べしが、いづれも、或は上代中世等の一時代にかぎられ、或は單
 に漠然と叙したるにて、この六運の説の如く、和歌史全況にわたりて、比較
 的明確なる區劃を定めしものは、未だ之あらざりしなり。
 なほ彼は、この六運の諸體にならへるものに、自己の一體を加へ、北邊七
 體、七百首、一卷をもつて、安永二年以前北邊歌抄に作れり。寛政九年刊
 行せらる。

富士谷御
杖 修辭的歌學

御杖に至りては、成章と面目を異にして、彼特殊の神道の歌學説を成せ
 り。彼の修辭的、歌學説としては、その隨筆、北邊隨筆中に、或は冠辭は序の
 短きものなりと説けるもの、或は「近江より朝立ちくればうねの野にたづ
 ぞ鳴くなる明けぬ此夜は」の如きよみつめの格、見ぬ人の形見がてらは折
 らざりき身になすらへる花にしあらねば」の如きかへりつめの格等、所謂
 轉倒の例の一格として存することを注意せる如き、又歴史的見解として

歴史的見解

は、同じく北邊隨筆に、紀記の歌の時代を論じて、雄略朝ごろのものと推定したる、又神樂催馬樂燈大旨に、神樂催馬樂制作の時代を論じて、恭仁京の頃としたる、いづれも卓見と稱すべし。まかも彼の歌學說の主なるものは、他にあり。

成章との關係

彼が父成章との學說上の關係は、その修辭的學說に於いては、成章の暗示をうけしもの多かるべきも、元來彼は、成章三十一歳の時に生れ、十二歳にして父に別れたり。幼少未だ父の教を受くるにいたらざるうちに、父を喪へるをもて、父に就きて深く學ぶ機會は無かりしなり。彼自ら記せる文に、

「我が父成章は、いと早く喪ひて、何の心ばへも口づからは聞かざりしに、をぢなりし成均たゞ大やうに聞き置かれたりしは、歌に道あり、題詠へ、ただその階梯なりと言はれつるよしを語られしかば、それより實にと思ひなりて、古歌どもをも深く見いれ、自らも詠み試みて、この道いたどりあた

百一首燈序

りしなり。百人一首燈序

とあり。又他に、若年にして、言靈の説を自發せるよし記せる文古事記燈に出あり。彼の學說の主要なる點に於いては、その獨創に、出でしこと疑ふべからず。(御杖が、安永九年十三歳にして廣橋兼胤天明元年二四一號六七に詠草の點竄をこひし事、八槐記にあり。當時の慣例により、公家の門に入りしなるべし。)彼が歌學に關する著には、

彼の歌學書

- 百人一首燈 二卷 文化元年(三十七歲)刊
- 古事記燈大旨 二卷 文化四年(四十歲)成
- 神樂催馬樂燈大旨 一卷 文化十二年(四十八歲)成
- 萬葉集燈 五卷 文政五年(五十五歲)刊
- 神明憑談 一卷 文政五年(五十五歲)成
- 五級三差辨 一卷
- 歌道非唯抄 一卷
- 眞言辨 二卷

著作年月考

等あり。非唯抄以下の著は、著作年月を審かにするを得ずといへども、非唯抄は、寛政五年、二十六歳の時刊行せし歌袋、同七年二十八歳の時刊行せし和歌いれひもの終に、その名見えたと、本文中に、百人一首燈の名を引用せるとにより推して、夙く著述の志ありて、百人一首燈成りし後遠からぬうちに筆をとりしもの、如し。而して此書は、成元の名を負へるなるが、其他の二著も、此名を負へり。此點よりして、北邊隨筆の著はされたる文化十三年^{四十}九歳以前の著なること、即ち、萬葉集燈に先だつことはなる著なること著るし。(吾人がかくいふ所以は、彼の改名の時代より推定するものなり。蓋し彼は、二度改名したり。第一の名は成壽にして、二十七歳の冬、藩侯の諱を仰りて、成元と改む。而して文化八年、四十四歳にして、更に御杖と改めたり。)この三著の時代を精密に考へむことは困難なりといへども、非唯抄が他の二書に先だてる事は、疑ふべからず。また眞言辨は、神樂催馬樂燈にその大意を載せたるを見れば、文化十二年前の著なることは明らかなり。

彼の學風と吾人が論述の用意

彼の歌學説の、歌學史上に於ける特色は、その彼が獨特の神道の立場より論じたることにありとす。即ち、彼の歌學説は、むしろ彼の神道の一面といふべけれども、その理論の一種深邃なるものありて、わが國の歌學史上、異彩を放てり。かつ在來、彼は、單に父成章が、語學者としての盛名につれて記憶せられしにとゞまり、未だ彼に斯くの如く注意すべき學説あることの如きは、説きし人無かりし故に、吾人は、煩を厭はず、特に彼に就いて、比較的詳細に論ずる所あらむとす。但しこは、後にも論じ及ぶべきなるが、彼の學風は、伯父淇園及び父成章をうけて、深邃精到、殊に分析に細やかにして、空漠ならず。而して斯くの如き學風を以て、學問上の概念術語精確ならざりし時代に、その説を發表せることとて、往々にして難解に陥れるは已むを得ざる事とす。又、上記の諸書、各その叙述の立脚點を異にせるより、所説必ずしも一致せざるものあり。かるが故に、吾人が彼の説の紹介また、著書のうちの一つに就いて、單にその説を縮撮し、要をとるを以て已むべからず。まづ通觀して、その説の主要を捕へ、諸書にわたりて、更

にその委細を考へ來り、以て構成せざるべからず。以下述ぶる所は、さながらに彼が自己の叙述にあらずといへども、彼が懷抱せしところを明瞭に究め來らば、思ふに吾人が叙述する如きものなるべし。

歌は教誡の
道

歌を以て、風流の餘技にあらず、教誡の道なりとなすは、彼の根本の思想なり。彼はその著書に於いて、玄ばく貫之が新撰和歌の序なる「非唯春霞秋月潤艶流於言泉、花色鳥聲鮮浮藻於詞露、皆是以動天地、感神祇、厚人倫、成孝敬、上以風化、下以諷刺、上雖誠文假於綺靡、下然復取義於教誡之中者也」の一節を引きて、自己の意を得たるものとせり。非唯抄の名は此はじめの二字よりとれるなり而して斯くの如き彼の説は、その根本、彼の神道説に由來す。吾人は迺りて彼の神道説より説き來らざるべからず。

彼の神道
説

神
物欲

彼の神道説は、まづ萬有を通じて活らく靈妙なるものありとし、之を神となし、而して世界を統一する理法といひ、慈悲といひ、又人間に於ける良心といひ、いづれもこの神の活らけるなりとなしぬ。然るに之に對して、人性に、はかに、物欲の活らくあり。凡そ人心を深く究め來らむか。そ

爲に四あり

の活らき一様ならず。これを大別するに、現心（知識）と情意の活らきとなる。後者は即ち意欲にして、飽くことなきを性とす。一つには偏心（私心）なり。即ち彼が「理に拘はらず、たゞわが料簡ばかりをおしたて、わがまなる心」といふものこれなり。二つには、一向心なり。即ち偏心の更に切なるものにして、彼が「中にも人の思はくをも厭はず、わが勝手ばかりに強く一途なる」となすもの、これなり。而して更にこの「私心より奥に、我も知らずありて、私心に任せては何となく心がかりに氣のすまぬ事に思ふ心」あり。これ彼が「公心と呼ぶものにして、いはば良心なり。而して、その公心の起因を、即ち神となしぬ。さてこの意欲は、自ら外に現はれで、かなはぬ性質を有するものにして、その現はれたるが言行にして、彼が「爲」とよぶものなり。この爲に四つあり。第一は「空爲」にして、彼が「偏心」にもよらずしてなす爲」といひ、「猿樂のたぐひをいふ」となせるものなり。第二は、私爲にして、即ち偏心一向心等の所欲のまゝになす爲なり。第三は「公爲」にして、又「道理の上よりまめくしくなす爲」なり。而して第四は「眞爲」にし

て、彼は「一向心を抑へて、公私によらぬをいふ」といひ、又「一向心を慰めわびて、不得已なす爲」といへり。彼が眞といへる思想は後に説く所にて明らかなるべし。

さて人間には、斯くの如き所欲所思ありて、その所欲所思は、絶えず人心に生じ、發して言行とならば、已まぬものなるが、一方にこの人生ありて、神と相對する所に、彼の所謂神道は、あるなり。神道とは何ぞ。彼の言のうち、「萬事神慮に任せて、自己の爲めにいたさざるべきが、神道の旨なり」といへるなるが、この自己の爲めにいたさざるといふは、精しくいへば、言行を慎しむ、ことにて、所欲所思を慎しみて、みだりに言行にいたさざることとなり。彼はこれをまた、隱身と云へり。而してこの慎しむとは、何を以て慎しむかと云へば、畏愛の二つを以てするなり。畏とは、身に禍の來るべき事をかねておそるゝなり。愛とは、身に福の來るべきことを樂しむなり。凡そ所思所欲を、言行に現はすは、禍福の分るゝ所なり。元來言行にも現はさずみ、否、所思所欲なくて濟まば、それにこす事はあらざれど、

言行を慎しむ

畏愛

時宜

も、人性本來の要求として無爲にとゞまるを得ざれば、こゝに慎の必要はあるなり。さらばその慎は何に根據せりや。その言行のひたふるなるを制御する掟は何處にもとむべきぞといはゞ、そのやがて神にあり。萬事神慮に任せてやむべきなり。まかも、この神とは、こゝに現はれて彼が時宜の思想となる。時宜とは、彼に於いては、最も重要な思想なるが、やゝ複雑にして、説明を要するものあり。おほらかにいへば、人をしてその言行を慎しみて、禍を避け、福を得しむる爲に、よりて守るべき掟ともいふべく、それは神慮に基づけるものにて、よく人性幸福の源となる。まかも彼は、それを以て、きびしく嚴かなる態度をもて、人性にのぞむ掟とせしめて、幾分、人性の所欲に同情して、それを適宜ならしむる道と説けり。この點よりいへば、時宜といふは、適宜といふことにて、時宜を全うすとは、所欲をして、過ぎて禍に陥らず、よく福を保ち得べき程度に活らかしむるといふほどのこととなる。彼はこの時宜を、また時といへるが、更に中といひ、進んで「神道のよきあしきの中を言行とせよとの御教なり」といひ、「よきにか

歌

たよる言も、悪しきにかたよる言もともに罪あるが故に、善祓惡祓は教へ給へるにて」と説けり。

所欲を時宜によりて全うすといふ彼の神道の思想は、上述の如くなるが、さてこれより歌に論じ入るなり。彼曰く、凡そ人間の所欲のうち、偏心は、なほ前述の如き慎しみにによりて時宜を全うし得といへども、偏心の更に強くして切なる一向心にいたりては、神道によりてこれを慎しむこといとくかたし。即ち時宜を破りて、言行にいで、その結果、禍を招かざればやまざらむとす。この時にあたりて、その發せざればやまざる鬱情を發して、その一向心をなだめ、まかも言行の禍を避け、時宜を全うするもの、即ち詠歌なり。まかも歌は、言語と根本的に異なり。言語は彼我の情を通はずを目的として、直接の結果を豫想す。即ち直言にして、爲なり。彼又これを言舉と呼びぬ。そは爲なるが故に、元來慎を以て旨とする神道の主意とたがひ、發しては禍を受く。古來「神ながら言舉せぬ國」と言ひて、直言を戒しめしは、此故なり。之に反して、詠歌はたゞ鬱情をはるくるを

歌は言語と根本的に異なり

歌は倒語なり

目的とす。かるが故に、そは爲とならずして、よく時宜を全うするを得るなり。故に、歌にあくまでも重んずべきところは、その直言にならざる所なり。果して和歌は、その始めに於いては、倒語なりき。これ即ち和歌の本義にてはあるなり。神武紀の、「以諷歌倒語、掃蕩妖氣、倒語之用、始起乎茲」の語は、彼がこの説の根據とせる所なり。蓋し諷歌倒語とは、所欲を直接に言ひ表はさずして、間接に隠して述ぶるなり。

眞

而して歌が斯くの如く、所欲を時宜によりて制する場合にいたりて、そこに歌に眞はあらはるゝなり。彼が眞といふ思想は、やゝ混雜して、明瞭を缺くものあり。そは彼は、制しがたき内なる所欲を制して、時宜を破らじとするところに眞現はるゝとなせども、なほ詳しく彼の説く所に考へ來れば、彼は、その制しても制しきれざる所欲の切なさを眞といふか、或は時宜を破らじとなすその克己心を眞といふか、不明瞭なり。彼は、この兩者を混雜せるものゝ如し。されば彼は、一方には、眞心とは外に時宜あり、内に欲情ありて、已むことを得ず思ひなれる心を云ひ、眞言とは、眞心となり

かねたる時、已むを得ず歌ひすつる歌を云ふ」と述べ來りて、最後に「眞言をもて慰むれども、なほ眞心となりがたき時、まことに已むことを得ずふるまふ言行」てふものを擧げて、眞爲といへり。されどなほ、大體より考へ來れば、彼の言はむとせし所は、寧ろ時宜といふ點に重きをおきしもの、如く、要するに、所欲と時宜とを對せしめて、時宜によりて、所欲を制すると、ころを眞とせしもの、如し。されば彼の言に「もし時宜を犯して振舞はば、理はありとも、必ず眞は得難き事なり。時宜を破らじがために、思ふ心、詠む歌、ふるまふ爲は、私欲のすぢなれども、眞物なり。然らば、眞は私にそへる名かといふに、所欲のまゝの心言爲に、かはりて、其用、公なり。さては又、公にそへる名かといふに、公なるは、皆智の爲す所にて、理の上なり。眞は公理にもよらず、私欲にも拘はらず、たい時宜を重んずるよりの事なり。されば、私心、私言、私爲は、論の外なり。公心、公言、公爲は、理ありても、時にたがふ事あるものなれば、神これを貴び給はず。眞心、眞言、眞爲は、理なき事も、時宜を思ふ心のあはれさに、神必ず之を貴び給ふなり」とせり。要するに、時宜と眞と

眞と時宜

言靈

は、彼に於いては、同一事物を別に名づけたるものなり。

次に吾人は、彼の言靈の説に就いて説かざるべからず。元來萬物に靈妙なる神の魂活けりとなす彼の思想は、徳川時代の言語學者の一般にいだきし、言語の活用の靈妙にして、一定の理法あることを、言靈の活らきとなすと同じ意味にて、言靈説を成せるなるが、この普通の説以上に出でて、彼に特殊の言靈説あり。そは蓋し、前に述べ來りし彼の倒語、眞、時宜等の思想に基づけるもの。これらの思想が、或は眞言せずして思をかくといひ、時宜を以て所欲を制して、そこに眞のあらはるゝありといふ所に、直言以上の活らきを含ましめて考へられたることは、明らかなるが、その活らきに、彼は歌の靈妙を認めて、特殊なる言靈説をなせるなり。されば彼曰く、「靈となるは如何なる物ぞ。……言のうち、その時已むことを得ざると、一向心の已むことを得ざる様、自らといまりて、靈といなるにて候。されば所欲を達せむが爲によむ歌は、同日の論にあらず。その靈の言に有ると無きとは、歌よむ志の時宜を全うせむが爲にすると、所欲の爲にするとの

表裏境

寓意
古歌の解
釋

けちめ」と。然るにかくの如き言靈の説は、更に進んで、彼の父成章が説きし、言語に表、(表面の意味)裏境、(裏境と差別して説きたれど、要するに表の意味に伴ひて生ずる傍の意味、もしくは裏のこゝろ)の三ありとの修辭説をとりいれて、こゝに古歌古文には、凡て表面文字通りの意味の外に、寓したる意ありとし、その裏面の意につきては、彼が所欲時宜の説明を以て、作者の心裡にたちいりたる心理的説明を試み、かくの如くにして、始めて古歌古文の意を完全に解し得べしとなしたり。彼が古事記燈、萬葉燈、百人一首燈、神樂催馬樂燈、土佐日記燈等の著、いづれもこの立場より解釋せるものなり。その一例を擧ぐれば、百人一首燈に、

あしひきの山鳥の尾のまたり尾の長々し夜をひとりかもねむ
を解して、「かく明し兼ねべき夜とは思ひも知るべきに、さる心まらひもせて、人の訪ひ來ねば、苦しくとも一人ねんより外なくなれるが、いとわびしさの餘りに、詠まれたる歌なり。其時その侘しさの一向なるに任せられなば、もとその人をあらはに恨むべし。まかあらはに恨みて疎み果られた

表裏言靈

らむはたいと心苦しかるべきが故に、かくこの歌と詠み出でて、その侘しさの一向なるを慰め、あらはにも恨みでやまれたるなり。

おほよそ、おしなべたるつらさにこそ、はしたなかるべけれ。かく長き夜をも心まらひせぬは、恨みむもひが言なるまじき理なれば、誰もくと思ひまどふべきに、此ぬしの、まか侘しさは一向ながら、猶あらはにも恨まれざりけむ、いとく懐かしき心わざなりかし。

更に後年に及びては、表の意を言とい、うらの心を靈とい、二つに分ちて解釋せり。例へば、萬葉燈に、

秋の野のみ草かりふき宿れりし宇治の都の借庵し思ほゆ
の歌を解して、まづ言として、語釋をあげ、次に靈として、「この御歌、うはべは、たいその行宮のみ草刈ふき事そぎたりし様の、所から中々様かはりて、をかしかりしかば、忘れ難きよしに詠みふせ給へるなり。やごとなき御身には、かく事そぎたる事は、御心につく習とは言へども、大旨に言へるが如く、たい此行宮の忘れ難きまでの事ならば、御歌によみ出ださせ給ふ

べきばかりの御歎とおぼえぬ事なり。此女王もと天智天皇、天武天皇の御思ひ人なれば、もし此行幸の時、この二帝のうち、御從駕せさせ給ひ、共に御宿りまして、此夜逢ひ初めまし、事を思ひ給へるにや。其折の忘れぬよしを詠みて、人は忘るゝやを試み給ひしか。又は、つれなかりしを恨み給へるなるべし。行幸の御供にて、さるたはれごとあるまじき事なれば、憚かりて倒話し給ひしにこそ。又は、餘人にや。さだかに知られぬは、倒語の所以ぞかし。

と云へる如し。而してかくの如き作者の思ひの寓せられたる所に、靈はあるなり。(彼が解釋には、凡てかく寓意を求めて説かむとせるより、曲解におちて、牽強のもの少なからざれど、中にはまゝ穿ち得て面白きあり。)

歌の感應

かくの如き言靈の妙用はたらくところ、そこに歌の感應はあり。感應即ち感通、感動にして、和歌の究極、彼が上記の歌學説の歸趨なり。時宜によるまごころ、その真心にもとづく眞言、即ち歌、而してその歌に含まるゝ言靈、これ即ち彼が神の現はれしものにして、萬物に活らき、萬人の心に活

感通は自然に得べし

らけるものなり。歌にしてまことなる時、その鬼神を感せしめ、人を動かすは、實にこの妙用あればなり。吾人が古歌を讀むに於いても、その作者の靈に感ずるなり。直言は理を説く故に、人を屈服せしむとも、感服せしめず。歌が人を感服せしむるは、その理を説かずして、詞に隠れて、靈の妙用にまつ故なり。されどこゝに注意すべきは、感通は求むべからず。自然に得つべきことなり。求むべきは言靈にして、感通にあらず。求めて感通を得むとすれば、時宜を貴ぶ心うすくなり、所欲を達せむの心主となり、爲にまことの歌よまれざるなり。

以上にて、彼の歌學説の要領は述べたるが、終にのぞみて一言すべきは、彼が修行、稽古の説、及びそれに伴なへる大歌の説なり。上述の如く、神道の立場にたてる彼の説の、當然の結果として、彼が詠歌學習の上に重んぜる所は、實に精神的修養にありとす。これ、彼が修行とよべるものにして、即ち時宜によりて所欲を抑へ、慎を全うせんとする神道的修養なり。彼はこれを更に深く論じて、神を知り、萬物を畏敬して、つねに良心の聲にき

修行

稽古

く修養とまでいへり。されど詠歌に於いては、なほ他に必要なるものあり。これ所謂稽古なり。而して彼が稽古とは、前に述べし表裏境の活用を辨まへて、そを詠歌に應用し來ることに外ならず。即ち彼が詞の道とよびしものにして、「詞の表を正し、裏境をいたすことなり。而して散文的説明的のいひざまを避けて、情趣を含蓄せしむべしとの思想の此うちに含まれしこと、彼の詞によりて明らかなり。この稽古修行の兩者、いづれも歌に重んずべけれども、根本をなすものは修行なり。而して修行の極まりたる歌、即ち彼が呼びて、大歌となすものなり。これ修行の結果、自然になり出でて、神人の感應至妙なる歌なり。稽古の極は、彼の成章が五級三差とわけたる和歌の品等の第一位のもの、即ち、その時の様をすくよかに詠みて、外破るべからず、内抑ふべからぬ情言外にあふれたるもの」に至り得。

大歌

御杖の説の
批評

以上を以て、御杖が歌學の叙述を畢りたるが、一言批評を試みむに、彼の歌論は、極めたる特殊のものにして、そは歌論としては、神道的見解にとら

皆川淇園の
學風の影響

はれて、和歌そのもの、理を説くを得ざりし點に於いて、甚しく重んずべきものといひ難し。素より、宣長が説の純粹なるに如かずといへども、彼が學風の、いかに理論的にして、又その思索の、當時に於いて精到、——よしや往々にして、牽強の弊に陥りつゝも——彼が分類と推理とは、實に文法學者として、一時代を劃せる、かざし抄、あゆひ抄の著者が家學の風を傳へたるは、注意せざるべからざるものありといふべし。因に云ふ。富士谷父子の學風は、元來成章には、兄、御杖には、伯父に當れる、儒者皆川淇園が、字書に意を潜めて、聲音を易理の根本に溯りきはめし、精緻深遠の學風に負ふ所多かりしなるべし。(御杖が廿三四歳にして、倒語の説を發明して淇園に語り、淇園を評せしよしは、彼自ら神明憑談に記せり。)殊に言靈の説の如きは、實に淇園が聲音の理を易理に求めし説に基づけるものなること明らかなり。淇園の説の一端は、御杖が、俳諧和歌性質を同じうして、決して互に輕しむべからずとの見識より、俳諧のてにをはを論せし俳諧手爾乎波抄の序に、玄るせる所にて察し得べければ、其一節を引きおかむ。曰く、

「夫聲者皆其物形理之所相靡而生者也、形理之所相靡故又有物與生焉、聲物是也、民之言語者物感于心而意萌焉、意所結者亦物也、是以借聲物之所類、以貌其意、是其言語之所由發也。」¹⁾ 彼が斯くの如き學風は、實に宣長が實際を重んじ、あくまで事實について、穩健なる學風と相並べて、好箇の對照と稱すべし。彼が歌の道德的神道的解釋の如き、素より歌論としては議すべき點ありといへども、かの中世歌學に見る如き、たゞ漠然たる歌道尊崇思想に基づきて、或は儒佛に、或は神道に附會せる說などは、全然撰を異にして、その說一層精しきものあり。彼が歌を以て、實情をはるけむ爲に出づと説ける點の如きは、少くとも一面の眞理を道破したるものといふべし。(彼が當時めづらしき思索家なりしことは、以上彼の學説を明らかに來りて知り得る所なるが、それにつきて、彼が、研究心の如何に強く、その腦力の如何に卓絶せし、かを伺ふべき逸話、彼の門弟五十嵐篤好^後が記せる傳に見えたり。即ち彼は、琴をよくせしが、ある時、歌法師等、玉川といふたひ物の琴の手つけなやみしを、三十日あまり、日夜研究して考へ出だし

彼に關する
逸話

しこと、又さる老女に就きて、世に絶えなむとする箏の曲を學び、終に箏の手の法を定め、譜を作りしこと、また、法華經にくすしき文なりと人のいへるによりて、直に研究にかゝり、潜心六年餘にわたりつること、などこれなり。篤好は、何事にもあれ、思ひよりたる事は、至り極めずでは、已み給はざりける性なりければ、餘り惜きまで物考へ出で給へり、けりとぞと記せり。世に知られざる逸話なれば、記しておく。

彼の門流

斯くの如き歌論を説きし御杖は固より、父成章も、純粹の理論家にして、實際作歌には得意ならざりき。かつその門下に、——源氏麻袋の著者なる榎並隆璉 弘化元年二五、俳諧手耐乎波抄の筆者浦井有國、神樂催馬樂燈の序を物せし福田美栞 嘉永三年二五、騰文史備能可解二卷をものして、中に北邊世家に就いてゑるし、通俗辯を著して師説と景樹の説に就きて論せし並河基廣 天保十二年二の如きを出だし、も、——歌人として勝れたる人出でざりしかば、その歌學は、(彼の音韻説の思想は、多少の論議をおこし

し事ありしにしかばらす、孤立して一般歌壇には多くの影響を與へざりき。(成章父子の共に短命にして晩年を有せざりしも、惜しむべし。)たゞ一人、その學を繼承して、數種の著述をなし、もの、五十嵐篤好あり。

五十嵐篤好

篤好萬延元年二五は、越中館野の人。算數に達し、新器測量法二卷の著あり。歌文は、御杖に就いて學び、いたく御杖を信じ、文政七年御杖の歿年御杖の歌文を輯録し、その傳を記し添へたる、富士谷御杖大人歌文三卷を撰べり。彼が歌學に關する著に、

歌學初訓 一卷 天保十年五月成

歌學二訓 一卷 同 十一月成

歌學三訓 一卷 同 十二年十月成

湯津爪櫛 二卷 安政四年刊

あり。このうち、最後に擧げし湯津爪櫛は、御杖の言靈説を繼承し、祖述せるものにして、平易化して説かれたり。その終に、當時作られて、未だ梓行せられざりし橘守部が短歌撰格、萬葉緊要の説を紹介し、批評せり。そ

言外の餘情

れに就いては、後章、守部に附して述べむ。他の三訓は、作歌法につきて記せり。作歌の用意より、文法論にわたりて、一般に論せしもの、懇切丁寧なり。その説断片的なれど、中に注意すべきものなきにあらず。二三をあげて、一端を示さむ。

まづ、詩趣を説き、言外の餘情といふことを重んじたるものとして見べき一節に、

「歌は、情事柄、言葉、三つともにみやびなるべし。賤しき時は、感少なし。みやびなるは、感深し」とし、古今集の、「白雲にはね打かはし飛ぶ雁の數さへ見ゆる秋の夜の月の歌につき、之を、月の明らかなさをいはむとて、草の葉の上に出で居て鳴く虫の聾さへ見ゆる秋の夜の月」と詠みかへむには、原歌の風情と趣とを失ふべきことをいひ、只、月の明らかなる事をのみ甚く言へば、月を賞する情深くなると心得ては、かゝるひが言も出で來るぞかし。今少し行届かずと思ふ所にうま味あり。行届かずと見るは、此方の眼の至らざるにて、行届かざるが、行届きたるなり。行届きたりと思ふは、却て行届か

ざるなり。白雲にはねうちかはし雁の飛び渡るといへるにて、一天晴れ渡り、月中空に澄み渡りたる様、見るが如くに思はれ、數さへ見ゆると言へる穩かなる詞に、月を賞する情深く思はれ、その人柄の雅びなることまでも思ひ知られ、いとくめでたき歌なり。是行届かざるが、行届きたるなり。……いかに、情詞事柄、風流に美はしく詠むべきなり。然らざれば、人心に徹し、感ずる事あるべからず。」

と。又、

「とかく、理屈になりて、本末にて理を言ひつめむとするものなり。甚いやしく、聞ゆ。理を七つ八つまで言ひて、今二つ三つは、言はずにおくがよし。併し、言ひたらぬとは違へり。混すべからず。たゞ理をつめざることなり。……彼も是もいひ盡くさむとする故、言ひたらぬやうになるなり。唯一つを言ひて、其かたへの事は、言外に知らるゝやうにあるべきなり。詞に力ありと云ふは、是等の事なり。」

次に和歌の用語につきて説ける條に、

川語

「俗言は、眼前用をなす事ゆゑ、いきいきとしたるものにて、その活らき、限なく面白きものなり。能く心をつけて見るべし。」とて、俗語の語法の學ぶべきをいひて、「歌はいかに雅びに美しき詞を用ゆべき事なれば、此さといひたる平言を、さながら用ゐよと言ふにはあらず。只此活用の味ひをよく、心得て、活々したる詞を用ゆべし」といふなり。」

といへり。想の上には言外の餘情を重んじて、説明的に流るゝを斥け、用語の上には、印象の明瞭を、費びて、活々したる言葉を用ゐよといふ、卓見と云ふべし。

第十章 德川末期の諸歌人

以上述べしところを以て、吾人は、近世歌學の主なる流派の學說の歴史
 的敘述を畢りぬ。而してこれらの學說は、各々その學統を引き、それらの
 學統以外に、また歌人歌學者なしといふ觀を呈せしもの、これ近世末期の
 歌學界の大勢なりき。まかもその間に、各派の學說の祖述以外、繼承以外
 に、或は一派の立場より他派の說を折衷し、或は多少自己の創見を交へて
 所説上、もしくは學統上、これまで述べ來りし學派中に叙するにふさはし
 からぬ地位を占めたる歌人少からず。それらの歌人の說を合せて、一括
 して、德川末期の諸歌人として述べむとす。而してこゝに叙する所、一二
 を除きては、特に從來の諸學派の說に拮抗すべきほどの價值あるものな
 く、その或ものに至りては、わづかに歌論の斷片を有するのみなるあり、
 その主なるものより述べむ。

前田利保

まづ擧ぐべきは、富山の藩主前田利保安政六年二五とす。利保は、語學
 本草學に精しく、蘭學、悉曇にも涉れりし學者にして、諸學に關する著書數
 十種に及べり。語學は、主として富士谷及び其師なる海野遊翁出より承
 け、又本居義門等の學をも引きたり。彼の歌學は、その語學の立場より論
 じたるものなるが、歌學に關する特殊の著書、また二十種に及ぶ。重なる
 ものを擧ぐれば、

利保の歌學書

- 歌道秘事十五箇條 一卷 嘉永六年成
- 詠歌之大事七箇條 一卷 同上
- 歌道天地解 一節 同上
- 活用雅俗風調の辨 一篇 安政四年成
- ちかどなり 一篇 同五年成
- 國頌専門露々 一卷 同上
- 和歌本義 一篇
- 玩辭象 一篇

むかへこと道ゆきぶり 一篇
等、これなり。

彼の歌學は、主として師遊翁の系統を引き、蘆庵の説を傳へ、また富士谷の説をも承けたり。而してその間に、多少の自説なきにあらず。次に、その要領を述べむ。

まづ、當時の歌壇に對する態度を見るに、京都宗匠家に對しては、「舊弊に纏はれ、發達の見識なし」といひ、古學派に對しては、歌は心を辭にかけて、人耳に通せしむるを則とす。句々言々註解を俟つものにあらず。此風無用の陋言といふべし」となし、ひとり古今派に對しては、「正風に厚き、近く耳に聞ゆる歌風、極致を得たり」といひ、又蘆庵といふ人、思ひ立ちて、歌のさま、昔の延喜のほどにかへさまくほりし、ひたすら古今集の姿を慕ひ、貫之が風調を戀ひ、此頃より一きは詠み改めて、古今六帖をあかしとし、おのが家集をも六帖詠草と名づけ、世の廢風になづまで、けざやかに、おしたちたる、いとく、雄々しきわざなりけり。貫之をめぐめて、古今集のまらべまねふは、

當時の歌壇
に對する態度

歌の根本

近頃これが始めなり」といへり。以てその大體を伺ふべし。

彼の歌學は、歌論を主として、その語學的立脚地より論じたる修辭論にわかる。歌論に於いては、歌の根本を説きて、

「歌は心を辭にかくるを云ふ。其心は、私に探り求めぬ天然の眞心を得、それを口の調べに應じて、剛柔舌にさはらぬやうに、辭にかくるを云ふ。」

「和歌は、詞にあらず、てにをはにもあらず、趣向にもあらず、雲上にもあらず、地下にもあらず、舊古にもあらず、新今にもあらず、唯心のおもむく所のまへ時のうつりに、またがひ、思ふにまかせてよみ出づるものなり。」

といへる、明らかに蘆庵の思想を見るべく、更に又、

「凡そ歌は心より發し、まづ我意に通達し、之を人に語つて、貴賤上下、皆會得させん事を要用とす。たとへば、人と言語するに、其詞前後する時は、通達する事おそし。或は齟齬して間違となる。これ物のいひやう、調子緩急といのはざればなり。歌もまた然り。」

と言へるを見れば、以てその語學、説的立場を知るを得べし。まかして

彼の歌論中、注意すべきは「さま調べの事」の説と、「雅俗時言のこと」との二點とす。

彼は、遊翁の説をうけて、桂園派の調べの思想を繼承し、それを解して、大體に於いて、古今序に見えたる貫之の「さま」の思想、これに同じと云たるが、なほ其間の差別を認めて、

「さまとは、歌なりて、おのづから、高くも、卑しくも、かたくも、やはらかくも、心に聞えうかいはるゝをいふ。調べとは、詞の續けがら口にさはらで、強くも、弱くも、すぐにも、いかめにも、聞きなざるゝをいふ。然あれば、さまとは、歌のなりたる形なり。調べとは、口に整ふるひゞきなり。三十一文字、一つ一つ、口に唱ふる調べと、のひゆきて、其さまよき歌となれるものにしあれば、調べは山口にして、さまは奥なりといふべし。」

と言へり。而して古來の歴史上に、其さま、風體のうつろへることを述べ、三代集、殊に、古今集を、重んずべきを言へり。

次に雅俗時言に就いては、彼は、一般に雅言俗言の別をなしつゝ、も、俗言

雅俗時言

さま調べのこと

はた、雅言とひとしく、筋にかゝりて通はるゝ詞、換言すれば文法の掟に従へる詞なるが、これに對して、平言時言といふべきものあり。これ實際流用の詞とす。時言とは、たらしき、定まれる俗言とは、別なり。活らき、定まれる、俗言は雅言に交へて、歌によみて、可なり。随つて詞に雅俗なく、雅俗もと單に、時勢にあるなればなりといへり。要するに、一種の文法論よりして、蘆庵一派が、歌詞無雅俗説に、根據を與へむとしたるものといふべし。

斯かる立場よりして、彼は古學派萬葉派一般の、或は神道と歌道を混同し、古歌の風を摸するを斥けて、

「今は神道物がたりすなるはふりと、歌よみと等しきやうになりて、神代の事知らねば、歌は詠まれぬ事と思へるもあらむかし。いたくまつはれるものかな。神代の物語は、わが國よりの始めなれば、説きもし、さとしもすべし。歌は、人なりいで、ものいふとは、や歌あらはるゝ理りにて、物學びて、後心を求むるは、唐國のならば、しなり。この境あやしく妙なる事は、天地開けておのづから風雲あるが如し。」

古學派を排す

歌は人に委
ぬるものに
あらず

又曰く

「歌は人に委ぬるものにあらず。皆人々おのれがもの言ひて、人と興を通はする詞をつらぬるなれば、世の習はしにまたがひ、今の世、今年、今日の只今ならで、よるべき時なく、先達古人も、歌のほかなり。歌は、われ一人の思ひを述ぶるものなればなり。故に、よき例として昔にならへば、今の世にあはず。我がものにあらず。よそ事なり。古今集、聖代の様なりとも、その古今集貫之が如く、まねて詠むは、千年さきの歌にて、わが歌にあらず。これ誠の貫之が歌の様にはあらざるべし。よき歌、よきためしは、いくらも見おきて、むかひては、今日、只今の我が心詞を詠むべし。御家風と言ふ歌ある事なく、貫之風古學、萬葉風などいふ歌は無き理なり。さきに説く如く、詞は三千世界に住みと住む人の言端にて、心も調へも變る事なし。詞は國により様々わかれあり。古今流行し、雅俗行きかひす。歌は海内海外かはる事なきものと思ふべし。」

との卓見を爲せり。是に至つて、蘆庵一派の思想が、彼に於いて益々徹

修辭說

對語

底せられたるを見るべし。

以上を歌論の主なるものとす。その他、題詠の必ずしも斥くべからざること、を説ける、歌道天地といへる一種の理論を説けるなどあり。

他の一つなる修辭的方面の説には、縁語（よそへこと）秀句（くさりこと）句去、洒落、重疊、謎々等に就いて述べたり。殊に對語をあけて、

「對語は、むかへことなり。對語を以て、一首は成就す。これに六種あり。正對、反對、語對、意對、合對、餘意對なり。むかへざるは、無下なり。」

と説けり。こは、長歌及び文章の構成を始中終の三段にわけて説きたるもの（大和ことば道）と共に、後章に説くべき歌格論の一片と見なすべけれども、彼に於いては、その説語學説の一部として存したり。

以上の諸説を以て見れば、彼の歌學、甚しく推獎すべき創見ありとは、あらねど、その學識、優に當時の専門學者に伍して、決して劣らざるものありと言ふべく、又歌學史上、看却すべからざる一人たること、言ふを俟たず。終りに言ふ。彼に、詞よせの書、詞、大綱、五卷の著あり。季節の順序に従ひて歌

詞の大綱

題をあげ、歌句讀合を載せたること、一般の類著と體裁同じけれど、たゞ、その每巻の終りに、精巧なる繪畫して、其季に屬する花鳥草木等を圖解したるは、讀者をして、自然の事物に對する印象を明らかならしめむとせし川意見えて、本草學者たる彼の著として、ふさはしき企といふべし。固より他の著に見ざるところ、特に記す價あり。

黒澤翁滿
獨學綱

次に黒澤翁滿、安政六年二五あり。翁滿は、鈴屋の學派を慕ひし學者なり。彼に獨學綱の著あり。其うちに、歌學編數卷あるなるが、今傳はれるは、風體の卷のみなり。その説ける所は、歌の體につきて、中世歌學書の説ける所を、一々比較し、その互に矛盾して一致なきをいひ、八體十體等の分類を取るに足らざるものとし、古今序六義の分類の牽強なることをいひ、さて自己の分類としては、長歌、短歌、旋頭、混本、連歌、片歌、俳諧、物名、折句、廻文の十種をあげ、修辭上より、別に、譬へ歌、直言歌の二類を分てり。次にまた、古來諸歌風の別をたて、一を勝れたりとし、一を劣りたりとする事につ

きても、その謂れなきを言ひ、今古を通じて、一貫する彼が所謂活氣ある歌の一體こそ、和歌の根本たることをいへり。而して和歌の人を感せしむるは、一にこの活氣あるによる。「活氣を離れては、感通なし。感通なければ、死物に等しきにあらずや」となし、而して、この活氣を得る所以は、一に規矩の末になづまざるにあることを源氏玉かづらの卷なる源氏の詞を引き、て論せり。この書は、更に二十一代集中より萬葉は別に大成せりと云ふ、彼が所謂活氣ある歌を抄出して、小註を加へたり。彼の歌論の要點、以上の如くなるが、まゝうへなひがたきふし、その分類の如きも交れ、と、中世以來の歌學書の説を普く比較し引用して論じたる、その學識の選きこと知らる。(風體の卷以外の書を見るを得ざること、惜しむべし。)

井上文雄

次に擧ぐべきは、春海の門なる岸本由豆流に學びし井上文雄、明治四年、二五三一とす。彼は、江戸派歌人の殿として、その歌才異彩を放てり。殊に徳川幕府の運命に同情せる歌を詠じて、爲に當路の忌諱に觸れ、入牢したる

一種氣概ありし江戸兒氣質の歌人なりき。而して彼の歌論又注意すべきものあり。その歌論を含める書は、

摘英集 二卷 安政三年成

伊勢の家づと 三卷 安政五年—元治元年成

道のさきはひ 一卷 文久四年成

の三つなり。摘英集はもはら彼の柯堂門下の作を選べるものにて、その附言に彼の歌論を述べたり。伊勢の家づとは隨筆にして、道のさきはひは歌につきて記せる小冊子なり。

學問の主旨

彼その學問の主旨を述べて曰く「和學は漢學にわかち言へる名目にて、唐詩に分ちて大和歌といへるが如し。賀茂翁和漢前後をとかくいはれしは、いと頑なり。いでや學問は博くして頑ならず、眼識氣概を心として、今古の時勢人情を比べ見て、手近き筋より初學を導くべし。學者たゞ博きをたけき事に思ひて、考證引書に日を送り、珍書異本の校合に暇を費やし、生涯白衣魚の住所に同居して、氣概の見解なく、徒らに書箱のそしり

諷歌倒語

を招くは、いとく口惜しからずや。……學者大和魂を振ひ起して、人間有用の學問に後進を導くなむ、報國赤心の片端とも言ふべかりける」と。まづ彼が學問の精神を見るべし。彼はこの立場よりして、富士谷の如く、諷歌倒語といふ語をとり出で、以て歌道を天下有用の道とし、それよりして、和歌に最も重んずべきは、氣概てふことにありとの説を導き來れり。ここに彼の歌論にかへらむ。

雅情説

彼はまづ歌に雅情と俗情とありとせる一派の見解を非難し、「別に雅情と言ふものある事なし。凡て人々生れつきたる性情を有のまゝに言ひ出づるなむ歌といふもの、本意なりける。」といひ、「天地を動かし、鬼神をあは

調べは自然なり

れと思はするも、性情の誠を言ひ出づるからなり」とて、真情説を説きしは、當時一般の説と同じ。殊に「歌はうたふもの故に、調べを専ら心すべしと言へるは、ひが言なり。香川景樹の調べは天地のなしのまに、くにて、歌ひいづる則なるものぞといへるなむ、よろしかりける」とて、自然てふことを極めて重んじたるは、景樹と同じきものから、彼は又決して、歌の藝術たる

歌の修辭

性質を無視せしにはあらざりき。されば、歌は心に打思ふことを物によそへ言葉にあやなして言ひ出づるわざなり。上古の歌の譬喩多く枕詞おほきは、此故ぞかし。まか打思ふことをやがていひ出づる故に、自然に喜怒哀樂の語勢備はりて、感情餘情極りなし。感情餘情は語勢によるものなり」として、修辭を重んじたり。

歌と個人性

而して彼の説に注意すべきは、これらの立脚地に立ちて、眞淵派が古風に拘み、景樹派が所謂桂園一派の型に陥りて、自由なるべき和歌の本質を制せむとする弊を見、歌のまさに作者それらの個人的性格の自由の發表なるべきことを言ひ、歌に人々本性の口つきありといふは、予はじめて心づきたることなりといひて、當時むしろ排斥せられし俳諧歌の如きをも推奨し、「歌は、折に觸れ事につけて、優にも洒落ても詠むべき事、言ふまでもなし。古人の家集どもをよく見えてさとりべし」といひ、平弱なる歌風を難じては、「そも、歌の姿様々なり。強く雄々しく、優になだらかに、巧にこまやかに、洒落て口ときなど、すべて各心を種としていひ出づるわざな

俳諧歌

平弱なる歌
風を難す

歌詞の説

れば、勇ある人はおのづから雄々しく、才ある人は自然に巧なり。優なるもされたるも、其人々の本性によりて、各其顔の同じからぬが如し。……然るに、後の世の宗匠たち、歌は唯幼くなだらかに詠むべき物ぞと言ひ來れるより、今の世の人々、強く雄々しき様をばこち、しと言ひ、巧にこまやかなるをば作り物なりとそしり、洒落て口ときをばいやくさどびたりといひくたして、……たま、氣象ある歌など、初學の人の詠み出でたるをば、生宗匠たち己が口つきにのみ引き直して、各志を述ぶる道をふさぐのみかは、一ふしあるをば歌にあらずとさへ言ふめるほどに、大方十、二十、三十、四十と取ならべ見るにも、凡て一つ口より出でたらむやうにて、新たに詠みいでたるいたづきなく、唯ふる歌を打誦したるにも劣れりと言へり。所謂調へのなだらかなるを重んずる餘り、平凡陳腐に赴ける桂園派の弊を道破し得たるものと言ふべし。次に彼に注意すべきは、歌詞の説なり。景樹が歌詞に雅俗なしとの説は、彼に於いて、一層明瞭に、一層徹底して述べられたり。即ち、古來のたゞこと歌と言ふを解して、そは平語を用ひた

るものなりとし、歌に平語の決して厭ふべからざる事を言ひたり。否、更に進んで、歌はわるき詞も取なしからにて、かへりて一かたの句ひとなり、よき詞も言ひなしわろければ、一歌をそこなへり」といひたり。さりとして修辭の無視すべきを言ふにはあらず。「……さるを世には、有のまゝにつぶく」と詞を飾らぬを平語歌と言ふとのみ思ひとりて、終には、歌は詞を飾るべからず、などさへ言ふ人あるは、味氣なし。」

家集を重んず

かゝる歌學説を有せし彼が理想とし、標準とせし所は、如何なる歌集ぞといふに、萬葉にもあらず、古今新古今の勅撰集にもあらず、彼の喜びしは、古今よりやゝおくれし時代の家集なり。撰集の一形式のうちに入りし風は、彼の喜ばざりし所、家集の作者それくの手ぶりを存したるを採りたり。曰く、「抑も、天曆より寛弘の頃までの人々の家集を見るに、當座の贈答おほく、方言平語をうまくあやなし續けられたる、専ら古意古義にかなひて、まかも氣慨ある歌多し。今も學ぶべきは此頃の姿なり」と。

道のさきは

而して、この氣慨の歌てふことに就いては、更に道のさきはひの終に記

氣慨の歌

せる所に詳し。曰く、「世には、耳なれぬ詞、また氣慨ある歌をば、達磨宗、下町歌など誹るめれど、そは詞花言葉を翫ぶ遊びの道とのみ心得しひがことなり。氣慨の歌は、人々生れ得たる本性より出づれば、自然語勢具して、點つゝいべき所なきものなり。本性より出づる歌にあらざれば、人心を感動する事あたはず。譬へば、今俗の狂歌、俳諧、落首、前句などいふもの、よく人を笑はかし、人を諷諫して、人口に傳はり、婦女子も暗誦せる事を思ふべし。これ言靈のさきはひならずや」と。彼の歌論は、その詠歌と共に、當時の流派以外、たしかに異彩あるものなり。

歌學論叢近世歌人雜話參照

鈴木雅之

下總香取郡の人に、鈴木雅之、明治五年二五あり。彼は、かの田園歌人神山魚貫明治十五年二五に和歌を學び、同門の先輩伊能穎則明治十年二五の指導を受けたるが、和漢の學に通じ、殊に古道に於いて、夙く一家を爲したり。その學は、多く自得に出づといへども、古道説の立場は、平田派にありしものゝ如し。その重なる著には、撞賢木、大學辨、孟子辨、民政要論等あり。

歌學の著には、

歌學正言

歌學正言 一卷

歌學新語 一卷

あり。其著書いづれも、慶應二年より四年にかけての述作にかゝる。正言を主著とす。新語を参照しつゝ、正言に就いて彼の歌學説を伺はむ。彼はその始めに、内外本末の別をたて、歌に至情の重んずべきをいひ、歌は情をもととすといふ根本思想に立ちて、その説を述べたり。所謂情の思想は、明らかに之を宣長の物のあはれの説に承けたるものなるが、その叙述簡明にして、よく一家の説を爲せり。

情と歌

情と歌

詞

彼の論は、情言調及び體の説に分る。歌は情を述ぶるものにして、情は歌の根本なり。情は心の感にして、意にあらず。これ詩の志をいふと異なり。まかも歌は其情の中を得るものなり。情淺きに過ぐれば、歌はるるに至らず。深きに過ぐれば、又歌とならず。歌は詞によりて之を述ぶ。詞は情をのするものなり。而して、たゞに述ぶるのみならずして、情に隨

詞

ひて言を程よく整ふる要あり。こゝに調はあり。この情言調の三つ、もと相關係して、離すべからざるものなれども、假にその各についていはむか。歌のもとなりて、最も重んずべきは情なり。而して情に於いては、正しく高く真なるを尙び、賤しく偽れるを斥く。正しく高く真なりとて、儒の正心誠意にもあらず、佛教の悟にもあらず。要するに、人間自然の至情なり。言はよろしくこの情のゆくに任すべし。而して言としてまた斥くべきは、俗言卑言にして、とるべきは雅言なり。雅言の中にも、又美惡、精麁、強柔あり。一に情によりて選ぶべし。要は、俗ならざるにあり。この情と言との相調和するところに調あり。調は情の發動、緩急に相應じ、情言調和の微妙の間に存するが故に、最も悟りがたし。説くべからず。解くべからず。要するに、調は情言を別にして無し。情言をととのふる所にあり。

又彼は、歌風に三大別ありとして、思ふことを一すちに飾らずつくるはずいふを第一とし、思ふことをたゞちに言はず、美はしくあやなし、或は物

歌に三大別あり

歌の四體

にも寄せなどしていふを第二とし、詞趣より思ひ入りたる巧緻の風を第三としたり。而して至純の情と、正雅の言とを貴びし彼は、第二の風を以て理想としたり。これまた、當時の一般の思想と同じ。次に體を論じて、古來和歌に四體ありとしたり。萬葉體、古今體、新古今體、草庵體、これなり。而して彼に於いては、もとより古今正雅の風を重んじ、降つては新古今體までを學ぶべしと云たり。

景樹を評す

又彼は、歌は至情の發表なりと言ふものから、「心誠實なれば、自然に成るものなり」といへる一派の見を誤れりとして、そは習熟の結果さることもあるべけれども、一概にかく言ひ去るは妄言なりとして、歌に學問の必要なるを説き、暗に當時の桂園派を攻撃する意を洩らせり。又景樹の説に就いては、彼が一方に天地の調といひ、一方には、歌を調ふるものなりといへるは、自然と人爲とを混雜して、矛盾せるものなりと言へり。要するに彼は、宣長の説を承けて、桂園派に對しては、寧ろ反對の態度をとれりし學者なり。

水戸派

吉田令世

光圀爲章以來、一種特殊の學風をなし來りし水戸派の國學者に、吉田令世いでたり。令世弘化元年二五は、烈公が公子たりしほどの侍讀にて、弘道館の助教を以て、歌學局の師を兼ね、和漢の學に達せしが、殊に和歌の學に委しかりき。彼の和歌に關する著に、

歴代和歌勅撰考

歴代和歌勅撰考 六卷 天保十五年成

聲文私言 一卷 文政八年成

等あり。勅撰考は、各勅撰集について、精細なる解題を記し、ものなるが、その最後の卷に、和歌師資師傳、與儀秘事、古今傳授、撰和歌所、撰集故實、勅撰盛知衰運等の目を擧げて記せり。その所論簡明的確、一々古書に就きて、和歌の歴史上の事實を明らかにして、要領を得たり。殊に勅撰盛知衰運に於いて、萬葉以來撰集の歴史を概括し、時勢の盛衰と交渉して叙述したるは、最も注意すべき文字なり。要するに、彼は水戸學の主史的學風を以て、和歌の研究にのぞみたるもの、その概括撮要の才は、最も推すべきも

聲文私言
永言鈔

のなり。聲文私言には、萬葉學びに就きて記し、古道の立場より、歌の學ぶべきことを説ける條讀むべし。又彼に、永言鈔の著あり。その計畫は、全部を三つに分ちて、「道の長手」に、和歌はもとより俳諧川柳等、すべてわが國韻文の歴史を述べ、「道の八十限」に、故事故實を記し、「道ゆき人」に、古來歌人の傳を記すにありしが、完成せられず。今殘れるは、道の八十限の卷の一部分（色紙短冊の部）なり。全部、ことに道の長手の作られたらむには、大いに觀るべきものありしならむを、惜しむべし。又この永言鈔のことも、其うちに記せる彼の隨筆、鶉舟のすさみ卷三には、和歌に關するもの多く、和歌史上、參考に資すべきふし、少なからず。歌論としては、時勢と和歌との關係に觸れて、俊成定家の歌風を以て、當時皇威衰へし時勢の風を傳へて弱し、といへる一節、注意すべし。

藤田東湖
東湖歌話

令世とともに、水戸學派に屬する學者にして、また勤王家として有名な藤田東湖、安政二年二五一五五〇に、東湖歌話一卷あり。断片的にして、まとまり

たる學説と稱すべきほどのものは無けれども、皇國の道として和歌を重んじ、新葉集の慷慨激烈の歌風を推奨し、神武の御製を引きて屯田のことにいひ及べるなど、彼の面目を見るべく、多治比鷹主が「唐國に行きたらば、して歸りこむますらたけをに御酒たてまつる」の二句をたへて、「こよなく健き心あり。唐國を物の數とも思はざる風情、いとめでたし」と評せる、又「何事のおはしますかは」の歌に就きて、「歌にもあれ、詩にもあれ、なまじひに其事を並べ連ねむよりは、其心を言葉の外に、殘さむには、まかじ。千本の櫻をも、白雲と見ゆるばかりに一筆にくまどり、黒雲たち重なれる中に、わづかに龍の形をあらはしぬるさまを書きてこそ、限なき風情あるべけれ。然はあれど、心詞もいたらずして、ひたふるに言葉の外に、風情をのこさむとて、世の人に、えとけぬ言葉をいひ出だして、おのれのみ奥ゆかしと思ふは、又片腹痛きわざなるべし。」といへるは、さすがに、その見識のほど見ゆ。

東湖に附記すべきは、水戸學派には屬せざれど、東湖と同じく幕末勤王

伴林光平

家の一人たりし伴林光平とす。凡そ幕末志士には、その慷慨悲憤の心情のほとばしるところ、自ら千古の名吟をなし、卓絶せる歌人少なからざりしが、光平の如きも、またその一人なりき。彼文久四年二五は、大平の門にて、最も和歌に長せし加納諸平安政四年二五一七、文久五年二五は、大平の門にたり。光平に、

垣内七草

垣内七草 一卷 嘉永三年成

の著あり。富士谷成章の七體七百首の例にならひて、春夏秋冬戀旅賀の七題に就いて、「太古風擬紀歌體」、「上古風擬萬葉集風體」、「中古風擬古今集風格」、「近昔風擬新古今集氣韻」、「後世風擬二條家創立爲家卿流風」、「近世堂上方風摸三玉集語格」及び、「當時地下流行風學鮫玉集風致」の七體を詠み試みたり。その自序に於いて論じて曰く、歌には古來各その時勢々々の風あり。吾人は、まづそをよく辨まへざるべからず。而して、「歌は皇國の大道にて、神明に慣ふのわざなれば、この點よりいはゞ、上古淳朴の風儀を主と學びて、後代鄙俗に趣く風を避けざるべからず。まかもまた、歌は人をして感

せしむる道なれば、この點よりしては、吾人はその世々の風格に従はざるべからず。然らずては、人の耳に物遠くして、人を感せしむることなかるべし。要するに、「まづ紀記萬葉の古きあとを温ねて、上古淳朴の風致をよく心得、世々の撰集をも博く見わたして、世の沿革をも辨まへ、さてわが時世の新しき風格を知りて、古意を失はず、習俗に拘まず、すなほに心の底ひを詠み出づべきものなり」と。

上田千風

進國歌説

進國歌説 一卷 安政六年刊

また信濃佐久郡の人上田千風が、漢文もて云るせる、

あり。熱心なる國體思想、國家主義よりして、我が國民たるもの、國歌を詠せざるべからず、との思想を述べしものなり。歌論として特に記すべき點なけれども、これ實に幕末にあたりて、儼然としておこり來りし勤王思想、國家主義に基づけるものとして、注意すべきなり。（千風の名は聞えずといへども、この點に於いて、吾人は之を東湖光平に附記しおく。）

松田直兄

詞の直路

また加茂季應天保十三年二の門下、松田直兄安政元年二五に、

詞の直路 一卷 文政三年成

の著あり。彼はその説眞淵を承けたる跡あるが、まかも、歌の道他なし。人生れて自然の心を平生にいふ如く、手もなく言へらむこそ、直の歌なれとなして、その立場より、平言を歌に譯せる例を擧げ、一步すいみたるたい言うたの思想を述べ、桂園の調への説に對して評するところあり。まづ其説の注意すべきものに就きて、彼の言をきかむに、眞淵の、大和は丈夫ぶり、山城のたをやめぶりといへる心を、更に精しく説きて、萬葉風と古今風との變化を、兩時代帝都の地勢より解かむとせるに、次の如き文あり。

「古事記日本紀なる神武御代より此方の歌ども、體は少しく變りたれど、猶簡古にして、いとく上古風なり。萬葉集の歌ども、仁德皇后、雄略帝などの二三首の御歌は、風體もとより古く、天智の御代より孝謙の御時までの歌ども多かるは、其御代く々にまたがひて、調やうく移りたり。さる中に

も、人麿赤人などの、あやしう勝れたる、東歌などのひなびて強きなど、さまざまながら、總てその御代くの古風なり。古今集は、おのづから意詞ともに和暢やはらぎて、今の平安城風なり。されば、奈良の頃の歌どもなどの交れるは、體ふりてまざるべくもあらず。後撰集は、古今集には後れて撰べるほどまゝ、中々に古き體をむねとまづるよし、昔より言へども、小野宮の大臣、九條の大臣などを始め、其時の風體ほかに出でず。拾遺集は、遺れるを拾ひしこと明らかに、萬葉集の歌百首あまり、本末をいさゝか改かなどして入れられたれど、公任卿、能宣朝臣などをはじめ、今の調なるには似るべくも無し。其餘の集ども、或いめたく、或いはかなく、その姿詞多く様々なれど、すべてその人々の調、その御代くの體備はりたり。古へは古へ、今は今なるべきこと、もとよりなれど、大和國に皇居、まめさせ給へるほどの風體は、かたく、山城國に、大宮うつし、おはしまして、より風調やはらぎ、さて千年に餘れる今の、大御代に至りて、大よそ調の變らざるは、これ地の風なればなりけり。かの人々の調のみか、花鳥の色、音まで、國々の風ありて、かけ

まくも畏こかれど、玉敷の平安城は、山の形さへ長閑に、川の流まで清し。歌の優婉（うへん）きたるぞさることなる。さらば、など山城國は、古へも山城の國ぶりならざるとの論なきにしもあらざめれど、古へとて、其國俗あらざらむや。彼の山川まで風あれども、天の下まろしめす大宮地の都風には、よろづの國もおのづから打靡くめることわりなり。彼の人々の調あれど、時の體を出でざるは此故なり。」

知紀と意誠
との非難

と。以て彼が和歌史上の一見識を見るべし。又彼は、上記の如く、桂園の調べに就きていへるが、彼のその説は、たま／＼桂園派の高弟八田知紀が評する所となりたり。要は、直兄の説の自然説に過ぎて、歌に理想あるを逸したるを、知紀が難せるなり。曰く、
「言葉の直路と云ふ書に、調は、語のひびきなれば、めでたきは、春の百鳥の聲にも勝り、悲しきは、秋風よりも身にまむめれど、萱が軒端の雫に、だに調べありて、おのれと備はれる事も、とよりなるを、調をむねと論らへるあり」云々と言ひて、歌は何でふ事なきものなりといふ事を旨と論らへり。こは

全く歌といふ物を心得てのわざにあらず。如何にとなれば、古今集の序に、今の世の中、色につき、人の心花になりけるより、あだなる歌は、かなきことのみ出来れば云々、とあるを見るべし。かの色につき、人の心花になりたらむ世には、あだなる歌は、かなきことのみ出来むも、もとよりのことなれば、更にもどき云ふべきにあらぬを、歌とのみ思ひてその様知らぬなるべしなど、おとしめ給へるを見れば、紀氏の心にも、たい自然をのみたのみ給へるに、あらず。弊をたむるの既（既に）早もしたに、情を述ぶるのみを歌なりとせむには、五七の調をもまつべからず。平言もて、その心をつぶくとことわりは、たゞにあはれとのみ打歎きても足りぬべきものなるをや」と。また、外に、桂園門下の三宅意誠が、直兄の説を難せし言葉の直路辨（出）あり。その説また、直兄が自然説の弊に陥りしを指摘したり。

物集高世
歌學新論

鈴屋の學統をひきし定村直好に學べる物集高世（明治十六年二に、五四三、四六六）

歌學新論 一卷 元治元年成

近世歌學 第十章 徳川末期の諸歌人

の著あり。その説に曰く、「歌は、情を詠むものにして、理を詠むものにあらず」。歌はまことの情を述べたる感哀の聲にして、理りに拘むべきものならず。然りと云へども、これ心の上のことにして、「詞の上には、その心を慥かに聞きわかれむやうに、必ず理りを極めて詠むべきなり。これにてをば語格等の定まりありて、それをむくべからぬ所なり」。即ち、「心ばへには理りを思ふべからず。詞にはその心の聞えむやうに、理りを正して詠むべし」。而して、排斥すべきは、言語に使はれて、真情を矯められたる歌にして、これ、思ふ心の定まらぬさきに、みだりに心に語の浮ぶもの、即ち妄想の歌といふべし。これ又後世の歌の弊にして、上代の歌に見ざるところ。而して、この真情をうたひて哀感を催さしむるもの、これ一に歌の徳なり。彼曰く、「かの理りを詠める歌は、その心むつかしくて、二三返も打誦して、漸くにその心を思ひ知らるゝが多きを、情を詠める歌は、その趣安らかにて、一返誦しても其おもむき容易く心得られて、やがて感を催すなり」と。その説、大體に於いては、宣長の説の祖述に外ならざれど、その叙述

の簡明にして要領を得たるは、とにかく推すべきものあり。

篤胤の門、稻垣琴也に、

歌の言擧 一卷 明治五年成

あり。紀記萬葉より、近世にいたる歌風の變遷を概論し、さて、その概論の上より、歌はその世々の姿ありて、その世にあれ出でて、その世の姿を免かるゝ事難きてふ事をよく／＼思はずばあるべからず」となし、眞淵一派の擬古風を難じ、萬葉古今の歌風を、丈夫ぶり、手弱女ぶりとして別つをあたらずとし、「抑も歌に、益良雄ぶりといふ振なく、丈夫心といふ心ある事なし。……誰も誰も、うはべにいさぎよく言葉を飾るとも、まことの心の奥の底は、幼くはかなきもの」。而してその自然の情を述ぶるが歌なりとて、宣長の説と同じく説けり。さて斯くの如くして、彼によれば、萬葉をはじめ各時代の歌風によるは、まことの歌の道ならざるなるが、さらばいかにすべきが歌の道なるといはむか。即ち答ふらく、「時にあふとあはざる」との

有様をえらびとりて、古へにも泥ます、後にも片よらず、我とわが心より、なり出でて、古へ今に己れ一人が物なりといふべき程の歌をよみ出でて、こそまことの歌といふべけれ。また「歌よく詠まむとならば、古へのもとの起りをよく見て、世の末の有様をさとり、本末を正して善悪を知り、さて後におのれくが心を心として、言葉は強きをも、たをやかなるをも、艶なるをも、古へのと後のと打ませて、好きたるまゝにえらびとるべし」。又「歌の歌とする一ふしに到りては、古へと後とのけぢめなく、皆おのれくがふしなり」と。

彼また、高世と同じく、大躰に於いて、宣長の説を祖述し、而してなほ、春海らが江戸派の説を承けたることを見るべし。

大倉大三

大庵窓の塵

宣長の弟子鈴木用節の甥に、大倉大三あり。篤學の一奇人にして、その詠歌は、氣概と狂熱とを以て勝れたり。彼は、天を屋とし、地を席とすとの意にて、大庵と號せしが、大庵窓の塵一卷天保八年刊の著あり。この書、彼が自

家の古道説神道説の立場よりして、和歌に言ひ及べるものなるが、歌論としては、例の歌は、かしくも神の道云々の立場より、人情本然の發表として、和歌の尊とぶべきを説きし外、いふに足るものなし。猶この立場よりして、一種の戀愛至上説を述べたり。その説また宣長が物のあはれの思想に負ふところありしや、言を俟たず。

千家尊孫

宣長の學統をうけし千家尊孫明治五年二五に比那能歌語一卷天保十年成あり。主として歌詞の文法を論じたるものなるが、其うち、冒頭の二章に於いて、上代の歌と近世の歌との別を、てにをはの少きと多きとより論じ、又歌躰のかはり來しは、連歌の發生に基すと説ける、やゝ注意すべしとす。

長野美波留

大村光枝に學び、後、橋保己一の門に入りて、萬葉集類句の著をなし、長野美波留に、當時の江戸歌人の作を評せるめさましが、一巻あり。其終りの一節に、「歌つてにをはに拘はらず、心をいひとらむと心得べし」といひ

て所謂文法家の歌のてにをはに拘泥して、歌拙きをいへり。(なほ橋守部が之に對して天保四年に去るせるめざましく評あり)。

中島廣足

中島廣足

中島廣足

西國の歌と東國の歌

大隈言道

千蔭の學統を受けて、語學に造詣深かりし中島廣足文久四年二五に宇奈爲能春佐備一卷あり。初學の爲和歌に就きて記せるものなるが、こは堂上歌學の説になづめる固陋の見解の誤れるを解きしものに過ぎず。又彼の檀園隨筆嘉永四年成のうちにも、歌論散見せり。高調の歌を重んじて、「歌はたいうつはもの大きにして品たかく調といこほらぬこそ歌なれ」といへり。又檀園の下枝嘉永四年成のうちにも、春滿が我が國は西國より開けつれば、西國の歌は優雅にして、之に比すれば、東國の歌はあらびたりとの説古今打聽にを祖述し、上代の西國の歌の用語の優美なることに論じ及べ、るは、注意すべし。

その歌風の清新なる點に於いて、近世歌人中殊に注意すべき大隈言道

慶應四年二五には、歌論の著としては、断片あるに過ぎざれど、その平生の常套語として、門人の間に傳へられたるによれば、彼は常に「歌は大宮人の東帶せる如き歌のみが歌にはあらず」といへりと云ふ。歌學論叢大隈言道の歌參照

井手曙覽

また、彼と同時代にして、宣長の門田中大秀弘化四年二五に學び、萬葉風のうちに、新機軸を出だし、井手曙覽明治元年二五は、その隨筆檀園裡譚の、蘆庵の歌に就いていへるうちに、その懷抱せる意見の一端を洩らせり。即ち、蘆庵が「古へは大根はじかみ菲なすび瓜のたぐひも歌によみけり」といへるに賛して、歌壇の習弊に流れて、狹隘になれるを難じ、「諺にいはいゆる正月詞といふ物のやうに、いつも定まりて、早春には、朝日のどかに霞たなびく。歳暮には、寄する年浪春ぞまたる。花には、雨のめぐみ家づとに折る。月に、隈なき影。雪に、跡つけわぶる、などやうの詞の外には、世に歌詞は無きもの、如くになり、百人が百人、一昨年も去年も今年も同じことをのみ言ひ並ぶることの淺ましきよ。……かく寢言のやうなることのみ詠みふけ

る歌人の多きより、すこしも學才ある人などは、歌をたゞはかなき物に思ひ疎むじ、たけき事とは詩にのみ赴くめり。歌人とあらむ者、いざたなくする目を能く覺まし、此に憤を發し、思を凝らして、よみ口の鋒を銳にし、その事に隨ひ、その物に困り、彼方此方のきらひなく、幽玄、洒落、麗妍、澹泊、殷富、凄涼、勇壯、溫柔、變化自在の臂を張りて、毛唐人の糟粕嘗むる詩人の陣を突き崩し、戎語嘯づりちらす舌引き抜きくれむと、國風の旗さし建て、古言の鼓うち響かせて、後向かじ、背見せじと、進まざらめや、勇まざらめや」と言へり。以て彼が氣概を見るべし。

伊達千廣

また大平の門に出でし伊達千廣明治十年二五は、禪門の居士にして、歌道と禪との一致を説ける人なるが、その著和歌禪話十卷明治九年成隨々草二卷同年には、彼の歌に關する思想見えたり。その説、和歌を以て教化の具となし、修禪の道となし、ことごとく和歌は、争端を導く器にあらず。よく其道をたへなむには、風化を助くる清教なるを、畢竟小器小量の偏執

和歌は修禪の道

よりして、徳を損じ道を破る狹情害人、其咎豈輕からむや。古來よりかゝる様なれば、おのづから、人々歌の妙なる理を覺らず。狂言綺語、一時の遊戯と翫ぶ事とは成り行きけむ。故に今、この敷島の道を扶け起し、爲人の一助とせまく欲す。諸仁者よく助け給はば、多少利益のなからざらむや。和歌の言に察すべし。

福田行誠

元來佛道の工夫は、歌道と自らその趣を同じうせるものあればにや、桑門には、俊秀の作家多かり。而して近世僧侶中第一の歌人たる福田行誠明治廿一年二五四八にいたりては、脱俗高遠の歌風、偶を絶せり。其樹の門人飯野厚比安政五年二五が佛道を問ひしに答へ、歌を厚比に問ひはまつれど、純然たる桂圓の風にはあらず。その和歌に就いての意見に、下の如きものあり。「よく詠みてほめられたくもなきなり。この妄念は、歌よむべき第一の禁忌なり。唯おのが志を正しくすべき爲に詠むが第一の心得なるべし」と思はる。此志は、即ち佛の誠め給ふ所なるが、自ら歌にもこの趣はあるなり。山に

も高き低きあり。川にも深き淺きあり。歌にもよきあしき、淺き深き、あらでやあるべき。よき悪しきは、自らなる勢なり。只よむべき事と思ひ定むるぞよき。古哲とても、千首は千首ながら皆よくもあらず。選べば、必ずよきものあるなり。沙門の歌は、さる執着心を離るゝが、大事なり。執着心を離るれば、歌も自ら解脱するなり」と。さすがに大徳の説なりといふべし。

以上幕末諸歌人の説を通觀し來るに、大體に於いて、特に一學説として擧ぐべきものなしといへども、猶その間に於いて、活氣ある歌といひ、氣概ある歌といひ、歌は平言なりといひ、大宮人の束縛したる如き歌のみ歌ならずといひ、已に多少の新意を求むる思想の鬱勃たるものあるを見るは、蓋し、従來の歌風のやうく型に入らむとせる弊風に對する反抗の聲を傳へたるものならずんばあらず。

吾人はこれを以て、一般歌學史の筆を畢へ、更に轉じて、歌格の研究に就きて述べむとす。

第十一章 歌格の研究の一

の歌格研究 第一期

近世歌學史に於いて、注意すべき一現象は、歌格の研究なり。歌格の研究とは、廣くかつ擴充したる意味に於いては、和歌一般の修辭的研究なるが、その本來の、かつ特殊の意味よりすれば、長歌を中心として、一般和歌の句調、句形等の形式的修辭の研究なり。

元來短歌に對する零碎なる修辭的研究の中世歌學になされしことは、既に吾人の研究し來れる所にて明らかなる如くなれども、近世に於ける歌格の研究は、さる偶感的斷片のものとは面目を異にして、一層學問的なり。而してまた、その研究の生じ來りし動機に至りては、その由來するところ、淺からず。

歌格論の根本義は、古代の長歌を研究して、そのうちに一定の形式を認め、これを以て長歌を作る規矩となすものなるが、斯くの如き研究の由來を考ふれば、近世復古學と、それに伴なへる崇古思想と、それらに基づける

歌格論の 根本義 研究の由來

萬葉學、文法學等の生起發達に伴ひ、又其結果として生じ來れること、疑ふべからず。萬葉學の盛なりし結果は、從來短歌にのみ局踞せりし歌人の眼をして長歌にそゝがしめ、ついでその長歌の研究は、嘆美の情と相伴なひ、實際に長歌制作の要求となるや、その標準、規矩を、一に古代の長歌に求むるにいたり、同じく古學研究の結果として發達せりし文法の研究は、こゝに直接の原因となりて、古代の長歌に就きて、由つて則とるべき格と云ふものを見出だすにいたりしなり。即ち古文、古語の形式の上に、一定の法則を求めし、その同じ方法を、長歌の上に應用し、來れりしなり。

されば、歌格の研究は、近世歌學史に於いて、やゝおくれで發達したり。蓋し、萬葉の註釋的研究一時期に達し、文法語學の結果一段落つきたる後に於いて、即ち歌格の研究の促がされ起るべき條件兼ね備はれるをまちて、起れりしなり。斯くの如くにして、歌格の研究が、獨立せる一研究の形を備へてしは、長流契沖の時代には未だ固より無く、眞淵の時代にもあらはれず、宣長にいたりても未だ無くして、實に宣長が門下に至りて、初まり

歌格の研究
時代おこりし

その以後に發達したるなり。まかもその研究の端緒の、その以前既に眞淵にまで遡りて求めらるゝこと、また自然のこととす。

眞淵は、縣居すさみ草の中に、その歌格に關する意見の端緒とも認むべきものを述べたり。そは、彼は、長歌に段落あることに就きて述べたるなるが、其うちに、對句、隔句等の語を用ひたり。その説極めて粗にして、特にとり出でていふ程のことなけれども、一大先達の言として、單にかくの如き隻語も、また後人の研究を促がしゝものなしとせず。

歌格研究
の端緒
眞淵

宣長

宣長は、彼の隨筆玉勝問の中に、長歌の調につき、萬葉の長歌の五七の調にして、古今以後の長歌の七五なることを注意し、而してその變遷を以て古今の自然の變化と解し、今時のものにとりては、七五の調の快きをいへり。而して彼は、彼の當時の萬葉風學ぶ歌人の作の、なほ七五の調を免かれざるを認めて、なほこれ、七五の調の後世の人におのづからに聞ゆる

が故なりとせり。

詞の玉の緒
玉あられ

以上は、句調の變遷に就きての彼の意見にして、彼には、別に獨立せる歌格研究の著としては無かりしかど、彼の名著として、古文古歌の修辭文法を明らめし詞の玉の緒、玉あられの二書中の所説には、歌格論に關係ある個個の卓見多し。即ち萬葉古今等の修辭の特質を論じて、歌風の變遷を明らかにしたる字あまりの句には、其句のなからに、あいうおの音を含むと説けるなどこれなり。此字餘りの既に就きては、春海が玉綴附論(寛政四年感)に、其説卓見なれども、例外ありて、必ずしもなづむべからず、要は調の善惡にありとせり。而してこの兩著は、學界に大なる影響を與へ、類著相ついで世に出でたるが、次に説くべき小國重年が歌格の研究またこれに促がされて興りしこと、疑ふべからず。

而して元來宣長は、その歌調論にせよ、その修辭論にせよ、未だ明らかに上古の歌に存する歌格てふ觀念を述べて、これに準據して古風の長歌を詠むべしと説くには至らざりしかど、彼以後の學者に於いて、この要求は實現せられ、こゝに獨立せる歌格の研究はおこれりしなり。

獨立せる
歌格研究
の始
小國重年

長歌詞珠
衣

彼の歌格研
究の由來

この要求を以て、歌格の研究に向ひ、獨立せる歌格研究の初めをなしいを小國重年文政二年二四七九歿五四とす。彼は、明和三年、遠江國周智郡宮代村小國神社の社司の家に生れ、寛政元年松阪にいたりて宣長の門に入り、同五年七歳家を嗣ぎ、文政二年世を去れり。彼に、

長歌詞珠衣 六卷

の著あり。享和元年二月、彼が三十六歳の時に、稿成りぬ。彼の此書に於ける研究は、實に吾人が述べ來りし、近世歌格研究の由來を代表せるものにして、その精細緻密なる分類は、後に出でし類著中に於いても、稀に見る所とす。左に彼の説を叙述すべし。

序論中、彼はまづ、彼が歌格研究の由來を述べて曰く、眞淵出でて、萬葉風の長歌よむこと盛になり、假字遣なども定まりしを、猶てにをはのこと、明らかならず、徒らに古言をつゐるのみなりしを、宣長詞の玉緒を著はして、古言の文法を明らかにしたり。まかもなほ、長歌は、その續くるさまに

いろ／＼の綾ありて、詞の續きもおのづから長くしあれば、短歌とは些か違ひありて、おのれよく詠み得たりと思へる人しも、やゝとりはづしては、その定格を、あやまつ類なきにしも、あらねば、おのれいま古へよりの長歌の定格と思へるを、一つ／＼に引き出だして、を明らかにせむとす。

長歌の分類

對句的構成

かくて彼は、まづ長歌を句數によりて分類し、七句より十五句までを小長歌古今六帖に名づ十六句より五十句までを中長歌、五十一句以上を大長歌となし、其一首のうちに就いて、對句的構成の普く存在するを認め、此點を根本として歌格論をなせり。即ち、紀肥萬葉所收の凡ての長歌につきて、一々その對句的構成を明らかにし、對句を分類して、一句對、二句對、連對、長對、三並對等となし、その含める對句の種類、數によりて、長歌を分類し、又對句なきものは、別に之を一例として論じたり。而して又對句の外にも、彼は、重ね詞、序詞、打かへし等の聲調上の修辭にも論じ及びて、その古長歌に用ゐられしさまを示せり。要するに、彼の研究は、彼が長歌の根本の句法と認めしもの（主として對句）により、普く長歌を分類し、その分類の結

果によりて、古代の長歌の定格を明らかにせむと志たるにして、實に、宣長の詞玉緒に試みし文法上の研究と、その趣を同じうせるものなり。重年自らが企圖せし、ついで則とるべき定格を求めむとの目的は、その分類の結果を歸納して、簡明なる、更に根本の格に綜合することの試みられざりし故に、（實際そは又困難なりしならむ）未だ十分に達せられざりしかど、これによりて、長歌の修辭形式等を明らかにしたる功は、大いに認めざるべからず。

彼は、なほ、歌格上より、長歌の變遷、萬葉歌人の歌風等に論じ及べり。變遷に就いては、單に長歌にも、また時代によりて、變遷ありしことをいひ、神代より雄略朝頃までは、其さま大方同じきを、藤原奈良朝の頃より、やゝ移ろひそめて、平安朝初期にいたりて、一きは變りたり。まかも、その定格に至りては、上古と露たがへるふしもなくて、たゞ詞のつゞげと、對句などの花やかになりて、調のかはるのみと云へり。

また、諸歌人に就きては、柿本人麿の歌は、萬葉に數多あれども、對句なき

歌格上より
見たる長歌
の變遷及び
萬葉歌人の
歌風

は一首も無し。殊に對句を多く詠み入れたる歌多し。其中にも、連對句、長對句を交へたる歌、殊に多し。山部赤人は、連對句を好みて詠めり。中にも四句連對句を交へし歌のみ多くて、長對句を詠み入れたる歌と、對句なき歌とは一首も見えず。山上憶良は、對句、連對句、長對句を、一首のうちにも詠み入れ、種々に詠めることを旨とせり。笠金村は、詞を花やかによむをむねとして、對句を詠まず、對句ある歌は稀にして、たゞ二三首のみなり。大伴池主は、二句對句をよみ入れし歌のみにして、長對句、連對句は詠まず。是も、對句なき歌はたゞ一首のみ。大伴坂上郎女は、二句對句をのみ詠みて、長對句を詠まず。連對句を詠み入れし歌も一首にして、對句なき歌殊に多し。大伴家持は、二句對句をのみ詠み入れたり。また對句なき歌も多し。此外の人々の歌は、對句を詠み入れたる歌とも多かるやうなれども、歌數少なければ、其人々のむねと詠みしふし見分ち難し、といひて、萬葉集中主なる歌人の歌風を論じて、その歌格上の特質を明らかにせり。かくの如きは、古來未だかつて何人も爲さざりし所にして、漠然讀過の印象

を記す漫評の類と、選を異にするものあり。

内山眞龍

次に擧ぐべきは、内山眞龍なり。彼又遠江の人にして、元文五年豊田郡大谷村に生れ、寶曆十年、濱松にて眞淵に國學の古意を問ひ、その冬江戸に出でて、縣居の門に入り、文政四年一八一四八十二歳の高齡を保ちて、世を去りぬ。彼は重年に比すれば、二十六年先だちて生れ、重年が生れし六年前に眞淵に入門せり。殊に、天明元年、重年十六歳にて、眞龍に學びし事あり。彼は極めて篤學にして、研究心強く、天明六年出雲風土記の註解を作る爲には、その地理を究むべく、山陰西海を経て、長崎までいたり、その日記に記して、行程七百里、三廻見月圓と言へることなどあり。彼が文化六年起稿し同九年脱稿せる日本紀類聚解十五卷のうちなる

日本紀諸歌

解 日本紀諸歌 二卷

及び、その餘力に成れりとおぼしき

古事記諸歌

註 古事記諸歌 一卷

は、ともに彼をして上古歌謠研究家たる地位を保たしむべき好著なるが、その中に、紀記の長歌を註釋して、字句の解釋の後に、その形を圖解して、序、對句、段落、打かへし等の目を擧げて、注意せり。これ特に單獨なる歌格研究の書とは稱すべからずといへども、又その研究の端緒として、現はれしものといふべし。

重年と眞龍

學歷より見て、眞龍が重年の先輩なること明らかなれば、歌格の研究に於いても、重年また眞龍の影響をうけたらずやとは、何人も當然考ふべき所ながら、(而して、詞珠衣の著作年月明らかならざりしうちは、吾人もまたまが解釋せりしが)事實は然らずして、重年が精密なる研究は、眞龍が粗笨なる考案に先だつこと九年なり。これ吾人が重年を以て、推して歌格研究の祖となす所以なり。

石塚龍麿

重年と同じく鈴屋門にして、同じく遠江の人、石塚龍麿、既に出に、眞葛葉一卷

あり。一般歌格の研究よりは離れて、特に短歌の倒置法に着目し、萬葉古今の短歌に就いて分類し、三四一二五と見る格、以下二十餘種を擧げたり。單に分類に止まるといへども、また歌格研究の氣運をうけて生じたる一結果といふべく、重年の影響をうけしものなること、疑ふべからず。

第十二章 歌格の研究の二

の歌格研究 第二期

文化文政より、天保弘化の頃にかけては、一般文學界の隆盛とともに、國文和歌の社會も、多くの巨匠輩出し、その研究、前時代の根本的研究の後をうけて、複雑に廣くなれる時代なるが、歌格の研究は、重年眞龍に基礎をおかれしもの、この時代に於いて、一層の進歩と擴張とを來せり。

即ち、この時代には、橘守部、近藤芳樹、鹿持雅澄、の三學者を始めとして、伴信友、穂井田忠友、足代弘訓、西田直養、八木美穂、岡部東平等の諸學者、いづれも歌格に關する研究をなし、その結果を公けにしたり。まづ主なる學者、守部、芳樹、雅澄に就いて述べ、次に他に及ばむ。

橘守部

橘守部、嘉永二年二五は、平田篤胤、伴信友、東條義門等と時代を同じうして出でし學者にして、彼の學者としての特長は、その宣長一派の學統以外にたちて、獨特の學説をたてし、點にありとす。彼の學説には、殊更に異を

彼の著

樹てし弊あれども、その古書の註釋に於いても、國語の研究に於いても、特に創見に富めり。彼の學風は、精緻穩健の點に於いては、宣長に一籌を輸すれども、その奇抜の見識に於いては、彼に勝れり。彼が和歌に關する著には、註釋に、神樂入綾卷三、催馬樂入綾卷三あり。ともに、この難解の古謠を註して、斯學に光明を與へたり。稜威言別卷十は、彼が紀記舊事記の古典を概説して、神代古傳の交ふるに、傳説童話雜言を以てしたることを喝破せる彼の名著稜威道別に對して、紀記の歌謠を註せるもの、入綾とともに、古歌研究家の爲に缺くべからざる良著なり。歌話の著には、心の種卷三あり。こは専ら中世歌學の説によりて、單に作歌法を説けるもの、彼の他著に見るが如き、すぐれたる見解なし。而して最後に、彼が歌格の研究に關する著は、數種あり。

歌格に關する著

萬葉摘翠抄 一卷 文政元年成

長歌大意 一卷 天保十一年成

長歌撰格 二卷 文政二年成

近世歌學 第十二章 歌格の研究の二

萬葉緊要 二卷 天保十二年成

短歌撰格 二卷

主著

就中、主なるものを、長歌、短歌の二撰格とす。彼が長歌撰格の著ありし文政二年の交は、重年が詞珠衣を著はし、享和元年を去る十八年なり。素より創見を誇りし彼自らは、その歌格の研究に於いても、決して他の影響を受けしやうのことは、説かざりしかど、その時代より見て、彼が重年の後に出で、その珠衣の研究に、多かれ少なかれ、負ふ所ありしは、蓋し疑ふべからず。

彼の歌格論

二撰格によりて、彼の歌格論を見るに、その研究、一般修辭論に涉りしこと、殊に注意すべき點なるが、まかもその論の中心を爲し、所は、句格、即ち長歌及び短歌の句の續けがらの研究にありしことは、明瞭なりとす。されば彼の説は、専ら句格を説きつゝ、一般修辭論に論じ及び、或は一般修辭論を説きつゝ、句格論に入り、兩者相交りたり。要するに、上古和歌の修辭を、句格論を中心として説きしもの、彼の説なり。

文

彼は、上古和歌の修辭的色彩を總稱して、文といひ、この文てふ語のもとに、くさぐさの歌格を論じたり。まづ便宜の爲、彼が虚語、實語、及び潤色語の説より述べむ。

實語虚語

彼は、言語を實語、虚語に分ちたり。實語とは、時候、處位、事藝、及び物形を言ひ表はす有形無形の名詞なり。これに添へて、これらの實句の上に、潤色勢威をそふる語あり。以上の品類に洩れたる語を、虚語とす。即ち、動詞形容詞等、用言の類ひなり。かく分類し來りて、彼はこゝに上古の和歌の特質として、第一に、實句的といふことを挙げたり。實句的とは、古歌は後の歌に比して、實語多く、虚句少なしといふことなり。而して、同じくこの點よりして、古歌修辭の特質として、下の四つを挙げたり。即ち、第一に、實語を連用して文辭の修飾とする、連實、次の三つは、實語的の潤色、勢威、語にして、即ち第二の光彩、第三の數量、第四の方邊、これなり。この四つに就きて、彼の説明するところを挙げむ。

古歌は實句的

連實

「連實とは、天某國某神某、日某などいふたぐひをはじめ、春山、秋山、朝川、夕

光彩

數量

方邊

虚語實語の
關係上に存
する格

川、初瀬、風熊、野船、有馬、菅笠、難波、女などやうに、一句の中に、實物の異類を連用せるをいふ。次に、光彩とは、白某、赤某、玉某、大某、豐某などいふたぐひを初め、世の遠人、國の長人、遠御代、長秋、新室、利心、雄健び、鳴鏑、常宮、眞名子、最手、秀國などのたぐひ、何によらず、稱辭、飾言を添へて、美麗しくも、嚴かにも、雄々しくもいふたぐひを云ふ。次に、數量とは、一もと、管、二瀬、三重の帶、四方の御門、五伴の緒などやうに、一より十、百より千萬までの詞、また七車、八重、棚雲、百枝、槻、五百霧、千重波、千名の五百名などやうに、後世の人ならば、只虚句して、いくへ、いくら、あまた、かすくなどいふべき所をば、それ／＼の數の語もて強く雅びにいへるたぐひを云ふ。次に、方邊とは、恒に、山邊、海邊などいへる邊のたぐひのみにあらず、たとへば、雷の上、河かみ、上つ瀬、中つ瀬、下つ瀬、いつ櫃がもと、荒山中、高山の末、短山の末、岩根、木根、おく床、底つ岩根、そきへの極、そこひのうら、片淵、かげとも、そとも、日のたて、日のよ、このたぐひをはじめとして、すべて、上下左右、縦横、自他にわたる詞どもを云ふ。

第二に、この虚語實語の地位の關係よりして、上古の歌の句格の特質を

上實

説き、上實てふことを説きたり。曰く、「古への歌は實句上にありて、多くは上二句、中二句の間に据ゑたり。後世の歌は、上を虚句にうち出で、實句を下に引きさげたるぞ多かる。其さまたとへば、

古歌には、

さいなみの國つみ神のうらさびて荒れたる都見れば悲しも

後代新古今の歌には、

洩らさばや思ふ心をさてのみへえぞやましろのゐでのえがらみ

實句どめ

の如し」と。此點よりして、彼は實句どめの格に論じ及びて、古歌には實句どめ極めて少なく、古今集以後漸う増し、新古今にいたりて殊に多くなれることを統計的に論じたり。而して、その少數なる萬葉をはじめ、三代集頃までの實句どめは、自らその格ありて、返し詞の場合、嘆息の下、合する言の下、指定むる言の下、問ひ聞く言の下なる場合、の五格に殆ど限られたるに、新古今の實句どめに至りては、全く下實の句法によるものなり。

以上は、虚語實語の關係に基づくものなるが、第二に、語脈上の説あり。

語脈上の説

古歌は語脈
順直なり
修句

この點に於いて、彼は、語意の斷續と、句々の斷續とが相かなひ、句々の中間にて意味切る、やうのことなく、また、主語、客語、修飾語、説明語の位置關係、正順にして顛倒せざる、ことを以て、稱して、語脈の順直となし、これを上古和歌の特質としたり。こゝに附して述ぶべきは、彼の修句、即ちいひかけ説なり。彼によれば、言ひかけは、素より後代に盛になりしものなれど、萬葉にも全く無しとはあらず。されど皆上句にのみありて、下句中にかけたるは、一首も無し。こはもと、序辭の續けなしの轉じたる故なり。そも、枕詞延びて序辭となり、序辭轉じて修句といはれるなり。修句の下句にあるは、後世の風にて、正格にあらずとなり。

これまでは、おしなべて上代の和歌に就きての句格論なるが、これより一步すすんで、彼の句格論の本論に入り、長歌短歌のそれ々に就いて述べむ。

彼の句格論の根本思想として注意すべきものは、歌は、本來うたふものにして、古代の歌は、實に歌ひしものなりとの思想これなり。歌ふものな

句格論の
根本思想

歌の根本は
二句なり

るが故に、其間に、一定の節奏あり。句の配置あり。これ即ち歌格の根本にてはあるなり。而してこゝより推して、歌の起源を、二句相整ふる所にありとなし、最も單純なる歌は、二句の歌なり。歌といへば、必ず二句以上なるを要し、一句にては歌ならずとせり。而して彼は、歌の歌たるところは、長歌にありとして、長歌本位説をたてたり。元來、歌格の研究が、長歌をもととせること、前章にも述べし如くなるが、彼の如く、歌は歌ふものなりとの立場にたちて之を説きしは、未だ無かりき。

長歌の格

四種

彼が長歌の歌格として挙げし所は、長歌一編の體制を通じて存する修辭的形式にして、彼は之を句法十三となして述べたり。そは四種に分ち得。第一には、對句、及びその種類にして、これに屬するものは、彼の所謂疊句、聯疊、隔疊、變疊、對句、隔對、變對の七。第二には、招應、喚響、首尾、及び調段。而して第三には、譬喩、序辭なり。第二は、一編の構成に關し、第三は内容的修辭の領分に入れり。第一の疊句、對句より説明すべし。彼は、疊句と對句とを區別し、疊句に就いて曰く、「疊句といふは、同語を重ねて調べたるを

疊句對句

招應
譬喻

云ふ。又同じ事を、少しづつ詞をかへて云へること、常多し。世に之を對句と覺えたる人もあれど、この歌なるは、猶皆疊句の例にして、對句にはあらず。漢國の詩文辭に、殊更に物二つを取合せて、必ずしも反對していへる類とは同じからず」と。漢文の對句と區別したるは、彼の卓見なり。「聯疊とは、疊句をもて章段なしたるを云ふ。たゞ疊句の多きをいふにはあらず。隔疊とは、句を隔て、重ねたるを云ふ。次に、變疊とは、或は半句と一句とを重ね、或は一句と一句半とを重ねて、上を合せ下を活かし續けたる類」。而して彼が別に對句といふは、即ち詩句のその如く、他物を取り合せて、一對となせるなるが、上代の歌には、漢詩に於ける如く、殊更に儲け出でて對をなすやうの事なし。されば、要するに、之また疊句の例なりとなすが彼の考なり。隔對變對なほ疊句の場合の如し。第二の招應とは、彼事を招き出でむとして、まづ此事をいひ、此事より、即て彼事に相應しゆく所のあるをいふ」。喚響、首尾及び調段、いづれも普通いふところに同じ。調段は、切れたるところにて、重年も既にいへり。第三の譬喻といひ、序辭といふ、ま

歌格上より
見たる時代
作者観

た説明するまでもなし。以上の十三の句法が備はりて、一編の制作に、自ら一定の形式を爲せるを、上代の歌の句格と爲す。而してこれら句法の使用時代、作者によりて、自ら變遷特色あり。これらの各句法をあまねく活用して、まかもその間にくづれたる態なきを歌格の根本とし、而してその歌格の根本は、紀記より、萬葉初期の時代に存し、その以後、後世に至りてますますくづれたり。同じ萬葉集中にても、句格の正しく妙なるは、人麿、赤人の二人にして、憶良は、詞づかひは一ふし雄々しく聞えたるもあれど、句格にとりては、稍淡めきて下りたるが多し。例へば、長きつゝいさの中に、變轉せる所もなく、只二句づつの疊對のみ並べたる、少しうるさく飽きたき心地す。又、家持は、家集を傳へて、歌の多かればこそあれ、すべて風調はいたく荒びて下れるが多かり」と。而して、實に、長歌のみや、びは、紀記に、玄くべきものぞなき。その勝れたるに至りては、二聖といへども、遙に及ばず」といへり。(かくて彼は、その長歌撰格の下巻に、契沖眞淵をはじめ、縣門諸家の長歌をとり出でて、それを批評し、その多くが、詞のみ古風にして、句格に

於いてその正格を傳へたるなきを難じたり。以上を彼の長歌歌格論とす。

片歌、旋頭歌、混本歌

長歌以外に於いては、彼は、片歌、旋頭歌、短歌の諸體に就きて述べしが、主として論せしは、勿論短歌なり。(片歌に就きては、彼は、其うたふべき歌にはあらで、たゞ物事を問ひ聞く時々唱へし歌なる事を言ひ、旋頭歌に就きては、片歌を二首並べたるものといひ、混本歌は、旋頭歌の一名に過ぎざる事をいひたり。)さて短歌の句格に就きては、彼は、同じく歌の根本は二句にありとの思想にたちて、短歌の句、絶、即ち句切に就いて論じたり。元來彼によれば、短歌本來の句格は、五七、五七七と續けつゝも、其間に際だちて意味切るゝ事なく、一篇の上を滞りなく引つゞけたるにあれども、そが意味よりして、一首の中に切るゝ時は、こゝに所謂句切を生ずるなり。而して、さる句切の點より見て、こゝに短歌句格の正變あり。まづその正格とすべきは、二句連續の根本義に従ひて、第一に四句切、第二に二句切、これなり。而して、これに直絶、倒絶の二あり。言葉は絶て、意の下につゞきた

短歌

句切

正格

直絶倒絶

るを直絶といひ、言葉も心も共に絶て、下より上へ句の顛倒せるを倒絶といふ。二句絶には直絶多く、四句絶には倒絶多し。

二句絶直絶の例は、

わがほりし小島は見せつゝ
こ深きあこねの浦の玉ぞ拾はぬ
四句倒絶の例は、

古へに戀ふらむ鳥は杜宇けだしや
鳴きし我が戀ふること

の如し。これらを正格とし、彼は、その統計を紀記萬葉に就いてなしぬ。次に變格として、三句切、一句切を説きたり。その變格たる所以は、蓋し五七二句連續の和歌の根本義に反すればなり。而してこれらの變格に就きて、その萬葉までは殆ど無く、古今集以後に行はれ來りしこと——一句切にいたりては、殊に新古今集に多し——を、一々統計的に論證したり。その説、確實なる根據に基づきて、漠然たる空論にあらず。實に、短歌句格變遷の上に光明を興へたるものにして、未だ彼以前の學者の試みざりし所なり。

變格

彼が句格論の主意

以上の彼の句格論の結論を爲せるものとして、彼が句格論の主意を述べざるべからず。彼によれば、これらの根據よりして、古歌本來の句格こそ、やがて和歌の正格にして、その正格は、言語の變遷、好尚の變遷、歌はるべき思想の變遷にもかかはらず、嚴然として守らるべきもの、なほ文法の法則の如し。作歌に従ふもの、よく此點に注意して、句格を誤るべからずとなすにあり。この崇古主義は、蓋し歌格論者一般の取る所なり。そは猶つぎ／＼に論じゆくに従ひて、明瞭なるべし。

五十嵐篤好
短歌撰格の
評

富士谷門下の五十嵐篤好に就いては、已に述べし所なるが、彼の湯津、爪、櫛中に、守部の短歌撰格に對する批評あり。そは、當時未だ梓行せられざりし同書の要領を擧げて、短評をものせるなるが、その評は、「本書中、猶いかにぞや思はるゝ所々なきにしもあらず。そは別に論らひ置きたり。今こゝに擧げたるは、いとめでたしと思ふ説のみなり」とにて、大體彼の説を布衍し、祖述したるものなるが、其うち彼の創見とすべきは、その五七調、七五調

詞と聲とを
分つ

に關する意見なり。こは、彼の他の著なる初學三訓にも委しく説きたるが、一見識として、注意すべきものなれば、こゝに紹介し置くべし。

彼は、歌調を、單に五七とか七五とか、説き去らずして、詞と聲とを分ちて、七五を以て人間自然の聲の調とし、五七を、長歌本來の詞の調とし、初め五にていひおこして、五七五と續きて聲きれ、そを七五にて承け、相連續して、「聲の斷るゝ所は詞にて續き、詞の斷るゝ所は聲にて續き、連綿として絶ざる」ものとなす。彼は、この立場よりして、或ものが、長歌の調を五七に拘みて詠むをば、「打きくに何となくきゝよからず」となし、或ものが、近體の七五七五と續きたるこそ、今時の人の息遣ひに協ひたる自然の事なれとなす。共にこれ、古人は五七五七とよみあげしとなせるものにて、古人今人息遣ひ違へりとせるもの、謬見といふべし。息遣ひは古今不易にして、そは即ち七五なり。五七は詞の調をいふなりとせり。而して、實例にあたりて、まづ上代歌の根元に溯り、神武帝の御製について、(彼は神代の歌はとらず)その七五の息遣ひなるをいひ、又は、古歌の五七に續けなしたる初句五字

の、いづれも本文にかゝはらざる、枕詞の初をなせる詞にて、本文を言ひ出
 だす爲の序なるものなり。而してこれ元來、人の言語の聲調が、七五なる
 を、特に歌に調へなす爲に、五言の序を添へて、いひ出だし、ものなりと。
 これ彼が説なり。その當否は別として、とにかく注意に價す。但しこの
 説は、彼の記す所によれば、雀部手末が、彼に先立ちて、その萌芽を説き出で
 したもの、如し。こは初學三
 訓に出づ

その外、彼が撰格の評中には、枕詞の用法を論じて、修句との別を説ける
 如き、注意すべき修辭説もあれど、こゝには略す。猶篤好の著雉岡隨筆に、歌
 學、既ありといへど、未だ見
 得ず。

篤胤守部等と同時代に屬し、篤胤と同じく宣長歿後の門人たりし一代
 の學者、伴信友弘化三年二五
 ○六歿七四また、その名著假字本末に於いて、歌格論史上
 決して逸すべからざる創見を發表せり。

伴信友

假字本末

三卷 嘉永三年刊

五七、七五
變遷の由來

は、その名の示す如く、専ら、草假字片假字の起原に就いて、委しく考へし
 ものなるが、うちに、伊呂波歌、今様歌に就いて論じ、五七の調に代りて、七五
 の調の生じ來し、次第を説けり。

即ち、彼によれば、伊呂波歌は、空海が作にして、これ實に今様歌の祖とし
 て、明らかに七五調のはじめと認むべきもの。而して、當時に於いて、斯く
 の如き今様歌一體の新歌調を作りなし、由來は、基づく所、當時一般に流
 行せし漢讚、及びその漢讚の本をなせる梵讚の句調にあり。梵讚とは、例
 へば、大日經なる四智梵讚に、

梵讚

唵オム縛バク日ジ羅ラ薩サ恒コト縛バク七シ 蘇ス藥ヤク羅ラ賀カ五イ 縛バク日ジ羅ラ々々恒コト嚩フ囉ラ 摩マ視シ恒コト覽ラン五イ 縛バク日ジ

漢讚

とあるが如きにて、こを漢譯せる金剛頂略出金剛經の、
 金剛薩唾コウゴウサツダ音オン七シ攝セツ受ジュ故コ音オン五イ 得トク意イ无ム上ジョウ音オン七シ 金剛寶コウゴウホウ音オン五イ 金剛言コウゴウゴン音オン七シ 歌カ詠エイ故コ音オン五イ 願ガン
 成セイ金剛コウゴウ音オン七シ 承ジョウ仕シ業ゴフ音オン五イ

の如きが、漢讚なり。これらの句調に准らへて作られしが、即ち和讚な

信友と忠友

るいろは歌なり。而して、これ實に七五調の歌の端なり。されば、わが國上代の歌の、五七の調に代りて、七五調の生じ來し由來は、實にこの梵讚漢讚の句調に歸すべきものとなる。これ、句調の變遷問題に對する彼の説の歸趨とす。彼を先輩として親交ありし穂井田忠友^{出後}が、これを當時流行の唐樂の調に歸して論せる説と共に、彼の卓見として、歌格論上特筆すべきものなるが、もとより學説として、彼が説の、忠友の説の粗なるに比して、一層根本的に一層大なる價值あるや、言を俟たざる所なり。但し、信友もまた、唐樂、越天樂につきて説けるが、彼は、忠友の如く、その影響によりて今様の歌體の生じたりとせすして、上述の如く、その起源は之を梵讚漢讚の影響に歸して説き、さて又、今様歌も、後世になりては、漢樂の越天樂など、に合せて歌ふこととなれるは、又、うつろへるなり」と説けり。これ彼の説が、忠友の説に比して、一層根本的なるところなり。

信友には、外に、隨筆、比古婆衣の中に、迦俱樂考、齊明紀童謠推釋をはじめ、考證に關する、注意すべき研究多し。

近藤芳樹

古風三體考

歌格の二系

守部が摘翠抄を脱稿せし文政元年の後十七年にして、天保六年に、近藤芳樹^{明治十三年二月}は、古風三體考を著したり。これ芳樹が、未だ田中芳樹といひし三十五歳の時の著なり。

古風三體考 一卷

は、その名の如く、長歌、短歌、旋頭歌の三體に就きて、古への正格を明らかにしたるもの、その各々につきて、語義句法を論じたるなるが、まづ短歌に就いては、彼は、短歌反歌同義説^{反は短の草體を}を説き、長歌に就いては、古來の長歌短歌の説の妄を破し、旋頭歌に就いては、守部と同じく、旋頭歌、混本歌同一説を述べたり。

而して、彼の歌格の根本思想に至りては、短歌、長歌の系統と、片歌、旋頭歌の系統とをたて、論じたり。片歌、旋頭歌に就いては、五七七の片歌體を二つ並べたるが、旋頭歌にして、主として問答體なりと説き、後代に生ぜし五七五七七、その他の歌體は、旋頭歌の正格にあらずとしたり。短歌長

短歌長歌一體

歌の格の論に、彼の論の要領あり。即ち、彼によれば、また守部と同じく、五七の二句連續を以て、歌格の根本となすものにて、此點より、短歌の句法は、根本に於いて、長歌の句法と同じく、短歌は長歌の短きもの、長歌は短歌の長きもの、いづれも五七二句を連續せしめて、七の句にとゞむる格なりとし、即ち短歌長歌一體、説を唱へたり。此點よりして、彼は、五七調の正格なることを主張し、濱成式その他の説に論じ及びて、短歌の上句下句説の誤謬を述べ（彼は、宣長も、未だ此點につきては、正當の見解を抱かず、上句下句説を抱きしと云たれど、こは宣長の言を曲解せるものなり。）そが後世七五調に變遷せし次第にも論じ及びて、種々の注意すべき卓見を——未だ十分に徹底しては論せざりしかど——述べたり。即ち、彼によれば、五七調が七五調になりたるは、玉勝間にもいひし如く、うちいふにも、歌ふにも、七五と續くるが、たよりよかりしより、自然の勢にてなれるなるが、歴史上に、この變遷を明らかに證明するものは、神樂歌なり。神樂歌が、一首を本末にわけ、て歌ひしは、やがてこれなり。まかも、こは既に萬葉時代にもその傾向見

五七が七五山なりし理

長歌の結句

えて、當時三句以上をさして、頭句と言ひ、四句以下をさして、尾句とも末句とも云ふ思想、現はれ來れり。（卷八なる、大伴家持と尼との連歌の例、神樂歌の中には、五七五七七の短歌の、初め五七五を本としてうたひ、以下を末とすれど、さりとて、末の方七言よりは、歌ひ出ださで、なほ第三句五言を打かへし、頭につけて、七五ならぬやうに歌ひなせる、さすがに上古の餘波を失はず、まさに五七より七五に變する過渡を示すものあり。而して彼は、又句格上、枕詞の意義に就きて、もし五七五七と展轉ゆくうちに、七五になさで、かなはざる句出來たる時は、七五の頭に發語を置き、句を改むるなり」と言へり。從來未だ何人も説かざりし所にて、卓見とすべし。最後に彼の、又長歌の結句に就きては、終を五七七と結めたるが、正調なれども、變格として、古來、五七七七、また五三七、また五三五五、また五七三六七等にとぢめたるがあるよしをいひ、こもまた、長歌の變調として、一格と見なすべきも、決してある學者の好みなすが如く、脱字として、まひて五七のとぢめになはすべきにあらずとし、萬葉集中における、かゝる變調の歌の數を

(總數二百六十首中二十三首)擧げたり。

要するに、彼の歌格論の根本は、五七調を主として、七五調への變遷を説くにあり。もとより彼の説は、既に守部も委しく論じたる所なるが、特に此點をとり出でて精論せしは、彼をはじめとす。

なほ芳樹には、

寄居歌談

寄居歌談 五卷 天保十三年後成

あり。和歌に關する隨筆にして、考證、逸話、當時の歌人の批評などを記し、以て彼の學殖の凡ならざるを見るべく、また當時の歌壇の好史料とすべきなるが、其うち、歌論として注意すべきものには、彼が古今序の事わざ繁きものなればの句を解して、歌は、人事人情の波瀾曲折の中には、じめて生ずるものなりと説ける、(こは、宣長の物のあはれの既をうけたり)同じく歌は、喜怒哀樂の聲なりとし、まかもその情、ほどを越えたるは、えせ歌になりて、中々に卑しく拙なく聞ゆるもの」といへる、歌を知らずば物いふことなかれと言へる、今様の起原を論じて、いろは歌に及べる、好といふことを

論じて、定家家隆の歌を批評せる、「景のいひやすく、情のべがたし」といひ、「情をむねとするが歌の本なれば」とて、叙景より叙情を重んじ、この立場より、人應定家をば、赤人家隆よりも重んじたる、「歌よむに道を學ぶと風を學ぶとのけぢめ」を述べ、學ぶべきは道にして、風にあらずとなし、桂園派の歌風の同型に陥りて、何らの生面なきを難じたるなど、注意すべし。

穂井田忠友

芳樹に附して述ぶべきは、彼の古風三體考の跋文をもせし穂井田忠友及び西原晁樹の説とす。

忠友 ○弘化四年二五、はじめ篤胤の門に入り、後歌を景樹に學びたり。

観古雜帖、埋麝發香等の著者にして、最も考古學にくはしかりき。

彼の跋文に記せるところは、五七の調が、平安朝に至りて、七五の調に變じ來れる由來を、唐樂流行の風潮に歸して、説かむとし、七五調は越天樂の調なりといへるものにして、その説、單に暗示を與へしに止まれりといへども、博學なる彼の説として、見識凡を抜けるもの。惜しむらくは、完全せ

古風三體考跋

西原晁樹

歌がたり

る一部の書を見ざることなり。

西原晁樹安政六年二五は、柳川の學者にして、和漢の學に達し、歌格の研究にも志を寄せしが、たまく古風三體考を讀みて刺戟せらるゝところありて、歌がたり一卷を著せり。

彼はこの書を三つに分ち、上編に短歌の正體、中編に同變體、下編に長歌、祝詞、壽詞等に就きて論じたり。その説の根本は、五七の調を正體、七五を變體とし、打かへし、序歌等を變體の一體として數へ、その用例を述べ、短歌をもととして、旋頭歌、長歌にわたりて論じ、それを美須麻流の玉の象を圖きて解釋せり。又特に對句の用例に就きて述べたり。上來の諸家が研究のあとを叙し來りて之を見れば、特に創見なけれども、その紀記萬葉、神樂、催馬樂等に溯りて、証歌を引用し來ることの精しき、對句の用法をひとり長短歌に限らず、祝詞、壽詞より、平家物語、論語等にも及ぼしたる見識など、稱すべきものあり。

鹿持雅澄

芳樹の三體考の成りし年天保六年に草しはじめ、忠友がかの跋を物せしと同年天保八年に、鹿持雅澄は、永言格の稿を成しをへたりき。

雅澄安政五年二五は、萬葉集古義の著者にして、契沖以來の萬葉學の大成家なり。彼には、古義をその主著として、なほ語學語釋等に關する數多の著書あるが、その和歌に關するものには、紀記萬葉時代の和歌の他の古書に出でしものを輯録せる南京遺響卷三は、文政四年に、また古今集序に關する閨夜の礫卷二、月夜の燭卷一等は、天保十一年に著はされたり。

永言格

永言格 三卷

は、その萬葉研究の餘になりし著にして、彼が精細なる學風を以て、紀記萬葉の長歌の歌格を論せしものなり。

まづその總論、凡例に就きて見るに、彼が長歌を本位とせる考、藤原朝及びその以前に長歌の準據をおきて、雅びやかにして、調高く、勢ありて、詞つよく、幼なきが如くにして、ことの有様をよくいひうつし、はかなく聞えて物のあはれをよく言ひ盡くしたるは、古へ人の歌なり」とて、専ら自然、單、直

なる古長歌の美をたへたる思想、而してそれらの長歌に存する「句の整への定まり」を明らかにせむとしたる主旨、いづれも守部その他の説と根本を同じうす。

雙句

他句及び其

彼はまづ、重年が對句、守部が疊句と同じく、彼の名づけて雙句といふものよりはじめ、これに二句づつ雙べいふをはじめ、四句、六句、八句、十句、二十八句の雙句あり、括句(即ち句を三重に括りいへるもの、重年の三並對句に同じ)、獨句(一編雙句なくて整へたる)、短句(五言位を三言四言にいへる、七言位を三言四言五言六言等にいへる)、長句(五言位を六言七言に、七言位を八言九言にいへる)結尾(一編の結尾を、五言七言の句にて結めたる、同じく七言の句を三つ重ねて結めたる)、體格(七句、九句、十一句等、奇數を一般の格とし、八句、十句、十二句等、偶數を特別の例としたり)、發端(端に言を設けてたとへを取りたる、たとへを取りながら其譬へたる物を主とする)、裝飾(こは譬とは別に、譬の場合は言を除きては意味通じぬを、こは假に省き除く時は、却りて意を其き易くて、よみ味る時は詞のあやきえて開劣りせらるゝもの。而してその端文に、二句より十三句に至る

語勢

諸句の例あり。疊句(章中に、五言七言各同言の句を重ねるもの)、補語(章中に假に詞を加へて意得るもの、言を略ける如く聞えながら、略けるにはあらで言外に意を含ませたる)、ばの言を補へて聞くべきもの、照略(言を照して略けるもの)、整齊(言を設けて句を齊しく整へたるもの)、反覆(上にいへることを打かへして再び下にいへるもの、即ち打かへしに同じ)、倒語(語を修辭上轉倒したるもの、句を數多入れかへて意得るもの)、贅句(短歌に七言一句をそへたるもの、佛足石體に同じ)、六句(雙頭歌の間答と、旋頭歌の濫觴たるもの)、語勢(起ると居る、下を引立て上を承接ぐ、挑げたつる勢等、句々の語勢上の接續を脱けるもの)、等、各次に就きて、一々實例を挙げ、長歌の句格、及び修辭上の特色を説明したり。その分類煩鎖にして、簡明を缺くものありといへども、從來未だ注意せざりし點を解き明らかしもの多く、殊に、最後の語勢は體格とともに、彼が創見と稱すべきものあれば、簡單に説明せむに、こは長歌の句々の脈絡の間に、語勢的關係あることに着目して説けるにて、古來普通の歌調の思想より一步ふみこみて、長歌の節奏に就きていひ及べるもの。これに、起居、引承、

起居

挑げたつる勢の三つあり。

起居とは、長歌の全篇を通じて、五言に起りて、七言に居る語勢もて貫けることを云へるもの。彼は更に此うちに、居及び小居の別をなして、其間の關係を明らかにせり。例へば、

天地起の 別れ小居し時よ起 神さびて 高く小居尊とき起 駿河起なる 富士小居の
 高嶺起を 天起の原 ぶり小居さけ見れば起 渡る日起の 影も小居隠ろひ起 照る
 月の 光居も見えず起 白雲起も い行き居はかり起 時起じくぞ 雪居は降
 りける起」 語り起つぎ いひ居つぎ行かむ起」 富士の高嶺は起」

この句勢、奈良朝以後に、七言に起り五言に居るに至れり。

引承とは、起居をなせる五七の二句が一つとなりて、他の五七の二句と、互に相引き相承くる句勢上の關係をなせるをいふ。五七の句が、起居相俟ちて一聯をなし、各聯引承して全編を成す、この句勢上の脈絡は、上代の長歌の特色なり。例へば、

安見二句下ヲ引立ツし、わが大君 高光二句上ヲ承接クる日のみ子の引 馬なめて御狩た、せる

引承

挑げたつる勢

若菰承をかりぢの 小野引に 志引、こそい這ひをろがめ 鶉承こそい這
 ひもとほれ引 志引、じものい這ひをろがみ 鶉承なすい這ひもとほり引
 畏引こみと仕へまつりて 久方承の天見る如く引 まる鏡引仰ぎて見れど
 春草承のいや珍らしき我が大君かも引」

この句勢、後世格の亂れたる長歌には無くなりしなり。

挑げたつる勢とは、長歌の編中、上述の起居引承の句勢を續け來て、ある所に至りて、五言の句に始らく勢を止めて、さて更に勢を強めて、七言にひ出づる格にして、引の勢にある五言を抑へて、承の勢にある次の句を挑げたつるもの。例へば、

かけまくもゆゝしきかも 言はまくもあやに畏承こき……渡會の齋
 の宮よ 神風にいふきまどはし 天雲を目の目も見せず 常暗に
 おほひ給ひて 定めてし、瑞穂の國を 神ながら太しきいます 安
 見し、吾大王の 天の下まをし給へば 萬代に然しもあらむと
 木綿花の榮ゆる時に……

即ち、掛けまくも以下起居相つゞけ來りしを、さだめてしの五言句にて一度抑へて、瑞穂の國をと挑げたてしなり。この例、上古の歌には多くある所にして、起居引承のうちにおいて、變化あらしめ、單調を破る一の格なり。これ古今以後にいたれば、一度五言にて抑ふる時は、其あとが七言に起り、五言に居る勢となりて、即ち七五調となるに至る。例へば、

……寒く日毎になりゆけば 玉の緒とけてこきちらし 霞亂れて霜氷り……

の如し。

彼の説は、守部の如く秩序的ならずといへども、守部に比して、一層精しく、その研究一層確實なり。守部の如く、長歌を通ずる型をたて、それを以て凡てを説明せむとせずといへども、彼が如く獨斷の弊に陥ることなく、よく實例につきて、長歌修辭の各種の場合を、確實に證明したり。なほ上代和歌一般の修辭論に就きては、古義の總論中にも委しく論じたりき。又彼は、永言格の終に、山柿論の一章をおきて、歌格上より、人麿赤人を論

山柿論

じたり。これ彼以前の學者も試みたる所なるが、彼またこゝにこの兩歌聖を比較して、人麿が絶妙の手腕の赤人が専ら平明を生命とせるにまされることを注意せり。

彼の歌論
古學大意
古今集序存疑

修辭の美を重んず

彼雅澄は、斯くの如く歌格論者として、歌學史上あるべき學者なるが、彼が斯くの如き上代歌の嘆美者研究家として、その一般和歌に對して、懷抱せし考は如何といふに、それは彼が他の著述なる、古學大意、一卷、一名本保、十一、古今集序を評釋せし、古今集序存疑、一卷、一名間夜、天保十二年成、に記されたり。即ち、彼また古學者一流の思想として、古道的見地より和歌を看、古代の思想の純粹を傳へたるといふ點よりして、古歌を尊崇し嘆美したり。まかしてその嘆美と尊崇とは、歌格論者たる彼として、古歌、修辭の美に對する、尊崇、嘆美となり、續いて古歌に修辭の美を認むるより、やがて和歌に修辭の美の重んずべきをいひ、そのも、歌は心に思ふことを見るもの聞くものにつけていひのべ出だすのみの業と、昔より今に至るまで歌學者の常論とすることなれども、然らず、古學となし、これ、歌の主本にあらず、歌は言

を、美、麗、し、く、す、る、を、主、本、と、す。心、に、思、ふ、こ、と、を、言、ひ、出、だ、す、は、末、な、れ、ば、そ、れ、
 に、つ、ぐ、べ、し。古今集序存疑又、すべて歌は、神にまをすのさるものにて、人にきかす
 るにも、その對の人の、あはれと感じ思はむことをむねとつとむるもの
 て、常の言葉をのべ永めて、美はしく飾るを專要とす。古學大意とて、修辭の重
 んすべきことを説けり。蓋し歌格論者の説としては、理りなり。なほ古
 今集序存疑には、上古の長歌の對句を、唐土の文章の四六の體の影響なり
 と、なす説を、漢文渡來以前の長歌に已に對句ありし事實より否定せり。

彼の歌話

又、その歌話の一節に、

「歌よまむと思は、々、奈良以往の人々に交り居る心もちならでは、いかに
 志を高く持つといふとも、詮なかるべし。たとひ世に用ゐられ、人に知られ
 むことを好むとも、婦人小兒にめで喜ばれて、なむぞ腹の居ることのあら
 む。又おとし謗られても、なむぞ腹たつことのあらむ。これによりて、某は、常
 に、昨日は家持卿、憶良大夫などと手を携へて山に登り、今日は金村蟲麿な
 どと臂を交へて川道遙し、また朝には、藤原卿、橘御等の前に出でて物語を

承り、夕べには、柿本山部の朝臣等の門に入りて歌の添削を乞ひなどぞす
 なる。此心もちを暫しも離れては、いかでか歌といふばかりの歌をば詠み
 得べき。其暇には、畏くも皇神のいつくしき道を尊信して、遂にはその道
 の思ふまゝに行はれむ時を待ちをる心もちなり。」

同じく、彼が歌に、貧窮を歎き病難を悲しめるもの多きを人のなじり問
 ひしに答へて、

「某いかでか貧窮を欲はむ。いかでか病難を好まむ。されどそれのみに屈
 まりくじけて、二六時中歎き沈みをらむは、痴人の至といひつべし。某は貧
 賤病苦の身にせまりて堪へがたき時には、歌にのべうたひて、ある時、な
 にかしの卿に示し、ある時、なにかしの大夫に語りつゝ、互に笑ひ興じて
 心をのぶ。これに過ぎたる樂やはあるべき。そも、そこは歌よむことは、
 富貴にあまりてのうへの翫とのみ思へるにや。他くまで食ひ暖に着て、さ
 て後に花鳥風月に對してよむものなりと心得、たとひ家貧しく身賤しく
 とも、心は富貴の人の位に居ずしては、歌はよまれぬものぞと思ふは、いた

く大本たがふことにて、そは罪なくして配所の月を見むことを願へると
ひとしく、いみじきひが心得なり。」

といへる、共に彼の人格平生の心構へのあらはれし言といふべし。

天保時代に屬して、歌格論上おもなるものは、既に述べたるが、なほ同時
代の學者にして、歌格に關する著をなし、もの、二三あり。

第一に擧ぐべきは、秋山光彪既出の門人にして、篤胤、信友、忠友等と交はり
し小倉藩の西田直養元治二年二五
二五歿七三の

西田直養

萬葉集長歌
格

萬葉集長歌格 一卷 天保九年成

なり。その説精しくは傳はらざれども、總論によりて見るに、彼は歌格
を、長歌の起結の語勢によりて分ち、輕起穩結、輕起巧結、重起穩結、重起巧結、
序起穩結、序起巧結、承初結末の七に分け、集中を見わたすに、十に七八は、重
起穩結、輕起穩結の二つなりとなし、又聯對即ち對句を説き、これに、二句聯、
四句聯、八句聯、反覆聯あることをいひ、これを詩の律體に比して、共に似た

れど、又詩と異なるは、長歌の聯句は、始終連續せず、二句聯、又は四句聯、八句
聯などを處々におき、彼の反覆聯もて、打かへし、て、其間ごとにつたひ
の句をいれまじへたるなり。さて聯句の玄ひて無きもあれど、此聯句なき
は、無下に拙なし。面白き歌には、必ず聯句多く、かの長短はさらなり、反覆聯
などにてあやなせるなり」となしたり。結句に就きては、五七七と、とちむ
ること定格なれど、又いろ／＼あり。こは古風三體考にゆづる」といへり。
彼は格調に就きて、「かく格調のこと、おのづから定まりあればとて、唯あな
がちにこれになづむべからず。たとへば、初を輕くいひおこせば、必ず末を
穩に結ぶべし。又初を重くいひ起せば、必ず末を巧に結ぶべし」といふには
あらず。こは、其よみ出づる長歌の語勢によりて變化自由なるべし」といへ
るは、徒らに古風に拘むものと、見識を異にせるを見るべし。而して彼の
隨筆、彼舍漫筆、及び當世妙々奇話には、守部は彼の説に影響せられしよし
をいへるが、こは俄に信すべからざれども、とにかく彼又一見識ありし學
者なりしなるべし。(彼が萬葉集中の聯句を盡くぬき出でて分類せる聯句抄

ありといへど、未だ見ず。

岡部東平

歌體緊要考

次に同時代に屬して、宣長の學風を慕ひし岡部東平安政三年二
五一六歿あり。彼は直養、隆正、大橋長廣、城戸千栢、鳴川集の編者長澤伴雄等と交はりて、京師に學問上の社を結び、共に嚶々筆語を著し、が、彼に歌體緊要考一卷天保十一年成紀記歌通解六卷、萬葉長歌解十五卷、萬葉旋頭歌解一卷等の著あり。うち、歌體緊要考のみ傳はり、他は堅室著書一覽とて、彼の門人が解題の書によりて知らる。それらを通じて考ふれば、彼また古歌の歌格につきて研究する所あり。五七の正調にして、七五の變調なることをはじめ、長歌の格調に、言ひ興す體(ある事物をいひおこして、情を述ぶるもの)、比喩の體(物によそへてのぶるもの)、言ひ賦ぶる體(直情をさながらに述ぶるもの)の三つあることこは萬葉長歌解に出づといふなどを考へたり。而して緊要考は、冠辭、名所體、留言、繁、遠語、疎語、窮語の七條につきて、作歌の用意を述べたり。其うち、芳樹と同じく、調の上より枕詞の用途を説きたるをはじめ、體留のよか

らざるを説けるなど、歌格に關したる意見も交れ、ども、多く注意するほどのものならず。因に云ふ、彼は學風に於いては宣長を尊とび、守部に對しては、いたく攻撃する態度に出でず。

足代弘訓

春庭、久老、大平等に學びし碩學、足代、弘訓安政三年二
一六歿七三が、萬葉に關する類纂の著數種のうちに、萬葉釋例一卷あり。長歌に、句を省く格、言を省きて意を含むる例、句を入れ替へて歌をさく例、以下三則を擧げて、類例を示したり。

なほ彼の、歌辭類聚六十八卷、萬葉集類語九十五卷は、類纂の書にして、便り多き書なり。

八木美穂

又遠江横須賀の八木、美穂に、長歌私編三卷弘化四年成あり。萬葉集中の長歌二百廿六篇を、籠毛與之伴(八十四首)、御執之伴(六首)、山越風之伴(六十九首)、角障經之伴(六十七首)の四類型によりて分類せるものなり。

第十三章 歌格の研究の三

守部雅澄、芳樹等の天保時代を過ぎて、嘉永安政以後、明治初年に至る間は、歌格研究の第三期とも稱すべく、この間に注意すべきは、草鹿砥宣隆と野之口隆正との旋頭歌に關する研究、及び六人部是香の長歌玉琴の著とす。それに前後して、他の數名の學者の著書出でたり。

まづ宣隆、及び隆正に就きて叙べむ。

草鹿砥宣隆

草鹿砥宣隆、明治二年二五は、三河寶飯郡砥鹿神社の社司にて、天保五年

篤胤の門に入れり。彼の歌格に關する著は、萬葉の序歌を輯めて分類しそを五十音に排列せる萬葉集序歌抄一卷、萬葉の長歌の對句を集めたる長歌對句類集一卷等の類纂の書をはじめ、天門抄及び旋頭歌抄あり。

天門抄

天門抄一卷は、上世の歌を主として、段落の切り方より分類せるものにて、その目に、三つに斷れたる格、中間にて斷れたるが末の短き格、中間にて斷れたるが末の長き格、中間にて斷れたるが其末短歌の句法にあへる格

等あり。中に著者の見識として注意すべきは、片歌と短歌とを續けたる格(仁徳記なる、みもろの、其たかきなる、大ぬこがはら、大ぬこがはらにある、肝むかふ心をだにか相思はすあらむ)短歌と片歌とを續けたる格(仁徳記なる、や

たの一本管は子持たす立ちか荒れなむあたら菅原言をこそ菅原といはめあたらすがし女)の二格の存在を特に擧げたることなり。又彼は問答てふことを注意し、問答の格、片歌の問答、短歌の問片歌の答、片歌の問短歌の答等の格を擧げたり。(此書は、同じく平田門にして、宣隆の指導を受けし森田光尋が、嘉永五年九月の訂正にかゝる)

旋頭歌抄

旋頭歌抄一卷(はじめ旋頭歌四體と名づけて、嘉永元年十一月稿成りしを、八

木美穗の指示によりて、翌二年八月訂正す)は、旋頭歌の格を論せしものにて、彼は旋頭歌は、本來片歌を繰返したるものなりとなし、其形を以て旋頭歌の正體、他を變體とし、一方よりわけて、上れる世のふり、問答のふり、中つ世のふり、後世のふりとなし、そを更に結句のちぢめ方によりて分けたり。而して彼が所謂純然たる正體に屬せしむべきものは、此うち第一の上れ

る世のふりにて、そが中に、本も末も用語もてとぢめしと、本も末も體語もてとぢめしと、序歌の體との三つのわかちありといへり。

野之口隆正

野之口隆正明治四年二五〇、村田春門天保七年二四〇に從ひ、又、篤胤の門に入れり。彼は神道國典に邃く、西洋の理學を研究し、梵書をも涉獵せし學者なり。

六句歌體辨

六句歌體辨 一卷

は、彼が安政四年九月、宣隆の家を訪ひて、その旋頭歌四體を讀み、それに對して自説を述べしもの。彼自らの言ふ所によれば、彼には、之に先だちて詠歌格調辨稿未定といふ著あり。この六句歌體辨の説はそれに基づきしものと見ゆ。彼は、宣隆の説は、六句の歌は皆旋頭歌と思ひて説き、誤に陥れるものとし、更に精しく六句體の歌に就きて究め、旋頭歌體、混本體の意義を明らかにし、佛足石體、六句小長歌體等に就きても述べしものなり。その説、徒らに旋頭歌の名になづまず、六句體の一躰に總括して論じたる

六句體

混本歌

見識の稱すべきをはじめ、傾聴すべきもの多し。

元來、混本歌てふものに就きては、古今集真字序に其名見えしのみにて、その體さだかならず。爲に、或は四句の一體をこれに充つる等の附會の説も爲されしが、近世諸學者の間には、これ旋頭歌の同名にして、別體あるにあらずとなす説、殆ど定説となれり。宣長も、守部もはた芳樹も、是香もいづれも玄か論せりき。然るに、隆正は、此點に就きて自説を提出し、まづ混本歌と旋頭歌とを區別して論じたり。

彼によれば、混本歌とは六句の歌にして、五句の短歌體に、一句を混へたるものとす。即ち、初句混本仲哀記なる、いざあき、振熊が、痛手負はずば、鳴鳥の、淡海の海に、かづきせなわの如く、五句短歌體の上に一句を混へたる、末句混本清寧記なる、大きみの、みこの柴垣、やふじまり、しまりもとほし、きれん柴垣、やけむ柴垣の如し、佛足石體これに屬す。腰句混本拾遺集なる、梓弓、思はずにして、古へを、さもれたく、引とめてぞ、ふすべかりける。千載集なる、東路の、八重の霞を、分け來ても、君にあはれば、猶隔てた

小長歌體

兩頭一脚

一頭兩脚

旋頭歌

る 心地こそすれ。また別に一體、風俗歌なる、常陸には 田をこそ作れ あたご
ころ かぬとや君が 山をこえ あま夜來ませるの如し等これなり。而し
てこれらの混本歌の意義は、句を混へて餘情を見する點にあり。

六句體の第二種に數ふべきものは、五七、五七、五七の小長歌體即ち、長歌
の短き體これなり。たとへば、景行記なる、大和は國のまほらは た、
なつく青垣山 こもれる大和しうるはし、の體なり。なほこれに、兩頭一
脚の體と、一頭兩脚の體とあり。 兩頭一脚とは、

久方の天かなはた
め鳥がおるかなはた
一頭兩脚とは、

はやぶさわけの みおすひがね

道にあふや尾代の子
天にこそ聴えずあらめ
國にのきこえてな

の如し。

さて第三種に、旋頭歌あり。等しく五七七、五七七の反覆ながら、これに

旋頭復言體

旋頭三句禁止

種々の別あり。旋頭復言、旋頭三句禁止、旋頭三句乞願、旋頭三句發題、旋頭
本末體これなり。まづ旋頭復言體とは、

やたの 一本管は 一人をりとも

大君し よしときささば 一人をりとも

即ち、五七七にて題をあらはし、五七にて情を述べ、復言の七にて結びた
るもの、この格古歌に多し。なほ同格にして、

から國を いかになふことぞ めづらこ來る
むかさくる いきのわたりを めづらこ來る

の如く、始めの五七に情を述べ、後の五七に題をあらはしたるあり。前
者を發題陳情復言格、後者を陳情發題復言格といふ。

旋頭三句禁止とは、

佐保川の 岸のつかさの くぬぎな蒔りそ
ありつゝも 春し來らば 立ち隠るがね

の如く、禁止の言葉を三句におきて、意味をおさへ、さて下の三句に其情

をあらはすものにて、これまた多く見る格なり。これに又、

山代の くせの社の 草なたをりそ

己が時 たち榮ゆとも 草なたをりそ

の如く、前の復言の格をも兼ねたるあり。

旋頭三句乞願とは、

青みづら よさみの原に 人もあらぬかも

いははしの 近江あがたの 物がたりせむ

の如く、三の句に乞ひ願ふ意をいへる一格。

旋頭三句發題とは、

もゝしきの 大宮人の 踏みし跡どころ

沖つ波 來よらざりせば うせざらましを

の如く、三の句に題をあらはし、下の五七七にて思を述べ、景をうつしたるなり。

旋頭本末體とは、

旋頭本末體

旋頭三句發

願

彼の他の著

白雪の とこしく冬は 過ぎにけらしも
春霞 たなびく野邊の うぐひす鳴くも
の如く、五七七 五七七と並べたるをいふ。

これ、彼が六句歌説の大體なり。混本歌の説は、俄に信すべからずとするも、彼が特に六句體の一體をとり出でて試みし精細なる研究は、創見に富みて、注意すべきものあり。

隆正が和歌に關する著は、件の六句歌體辨を始め、歌日記、歌學入門、言葉の正道、わか草等あり。歌學入門一卷は、歌は心と詞と調と、この三つあひてなるものなり」と言ひおこし、てにをはの用法を主として、一二作歌の心得に説き及べる小著なり。歌日記一卷保五年の著なりは、廣く和歌に關する隨筆といふべきものにして、やまと歌、自警、六義、眞字序以下三十七則にわたりにて、考證語義用意などを、簡單に記せり。言葉の正道一卷天保七年刊は、文法の書なるが、うちに歌道の一章あり。「其歌をきけば、其景眼前にあらはれ、其歌をみれば、其情みる人の心に徹するを妙とす。調を高く、言を正

しく情を真にするを、歌の三事とす。魂のいらぬ歌のかひなし」と説けり。

隆正と同時代に、清水濱臣に學び、かの小群書類従とも稱すべき

水野侯の丹鶴叢書の編輯に與かりし、山田常典文久三年二五、二三、五、六に、

千木の片そぎ四卷 嘉永七年成

の著あり。こは短歌の省略法に就きて述べしものにして、言の省かれたるくさぐさ。二重にいふべきことをかたへに譲りたる。まのあたりの事にあるは、本歌に譲りてことそぎたる。いひ捨て、ことを残したる。ことの添はりたる。二すぢのことを一つに結べる。ことを下上にいへる。中しに置けることの上と下とはたらきたる。初句にいへることの一首のこゝろに及ぼされたる。の九章に分ち、一々古歌の例を引き、解釋を施こしたり。末にまた、員外として、序歌に就きて記せり。

隆正が國學を京攝の間に唱道せし頃、彼と交はり、芳樹とも親しかりし

山田常典

短歌の省略法

六人部是香

彼の傳

學者六人部是香あり。彼またこの時代にその著を公けにして、實に重年以來の歌格研究の大家たる地位を作り爲せり。

是香文久三年二五、二三、五、八は、篤舎と號し、山城乙訓郡向日神社の社司なり。江戸に出でて篤胤の門に入りしが、大に重んぜられて、自らも平田派關西の棟梁を以て任じたり。晩年職を長男是房に譲り、一翁と號し、京阪に出でて神習舎を興し、門人を教へ、又向日町にては家塾をも開けり。

和歌に關する著

是香が學問の専門は神道にありて、神道に關する著いと多し。彼は蘭學の影響をもうけ、進取的の考を有せし神學者にして、舊時代末期の思想家として、注意すべき人なり。彼の和歌に關する著は、その著述目錄中に詠歌本論、上古歌詠要解、拙古長歌集、萬葉集要解、同別釋、同發言考、同作者傳等あれど傳はらず。(そが中には、腹稿の香もありしなるべけれど、詠歌本論、拙古長歌集の如きは、全く脱稿せしもの、如きを惜しむべし。)吾人が見るを得しは、古今集撰輯考一卷嘉永四年成、古今集假字序眞字序論一卷嘉永四年成、訂正古今集序一卷安政四年成、神於呂之神歌考一卷安政四年成、及びその歌格の著たる、長

歌玉琴一卷萬延二年成なり。古今集に關するものは、いづれも標題の示すが如き考證の著にして、第一は古今集の撰ばれし時代を論じ、第二は中古以來論題となりし假字眞字二體の序の關係に解決を提出し、第三は彼が自己の見解によりて古今序を訂正せるものなり。その考證に推論に、説の當否は別として、精細緻密稱すべきものあり。歌學論叢、歌學者とし、ての六人部是香參照

彼の

長歌玉琴

長歌玉琴 一卷

に見えたる歌格論に就いては、まさに從來研究の結果を大成せる觀あるものにして、諸家の説を集合して更に創見あり。歌格研究史上、ことに注意すべきものたり。

歌格の意義

その説の要領は、總論に於いて、長歌の變遷より論じて、歌格の意義に及びり。彼が歌格てふ語にて意味するところは、また彼の諸先輩の説と甚しく異なる事なし。たゞ彼に注意すべきは、彼が歌格てふものを辭より全然離して考へ、歌格に於いては、あくまで崇古的なるに拘はらず、辭に於

いては、全然新古を問はずして、

「其古格に依りて賦まこと整ふる時は、却りて詞は後世の詞をもて賦まこと成すとも、其格調古格にかなふ時は、其調べ艶麗しく、體裁風致も古へのまゝなれば、則ち古風の歌とこそ云ふべけれ。凡て詞は代々に移轉る物にて、古言にては、委しく濃に云ひ得らるゝ事も、其辭後世には、用ゐずなりて、絶たるが如く成れるが故に、後の辭にては、云ひ得難く、又後の辭は、委しく濃にして、古言をもては、云ひ述べ難き事ども、多く、又其賦まこと出づべき事の趣にも、古言をもて云ひ述べざれば、應かなはざると、後の辭をもて作り連續る方勝れるとの差別あり。或は古言をもて云ひ述ぶる中に、紀記萬葉などには漏たる辭ながら、其言の本義を糺明たすときは、古言に混淆まじへ賦まことむべき辭もあり。又後の辭をもて作り連續る中にも、古言をもて云はざれば、應かなはざる辭もあり。さるところ、くゞにいたりては、新古の辭互に入混ても用ゆべし。いかほど古風に眞似まにたりとも、今世に作出たる歌は、今世の歌なる事は、云ふも更なるうへ、其一首の魂は、歌毎に新ならでは、協あははぬ事なるを、其詠出る事物より

人事世態の上など、總て何事も、古代とは變化轉換せる事のみ多かれば、それに就きて其筋の辭もまた多く増益せる事なれば、今世にしては古言のみをもて賦調へむとするは偏僻にて、却りて古風にも協はざるなり。されば辭の新古には深く拘り泥むべきにあらず。

といへり。(而してまた彼は、この點よりして、當時の古風家の歌人が、徒らに古言を用ゐ、古風を得たりとし、又宣長が古風新調とわかち詠みし風を、歌格上より無意義なりとせり。)さて長歌の變遷に就きては、彼はまづ天平以前の上古を以て、長歌最も榮え、歌としいへば長歌を意味せし時代にて、又當時の長歌こそ正格を存したるを、天平の朝、金村笠磨等出づるに及びて古格を失ひ、對句に拘はらず、上古以來の辭の文も前後の照應などもやゝ減したり。されど猶、その句調と轉義などの古格の趣は存れりしを、續後紀嘉祥二年の興福寺僧の長歌に到り、二變して、句調も轉義判辭などの古格も失はれたり。これを長歌衰頽の始として、古今集以後にいたりて、貫之をはじめ當時の名匠ら、長歌に達せざりし爲、短歌のみ行はれ來

長歌の變遷

り、これとともに五七の調さへ變じて七五となり、こゝに於いて全く句格やぶれ、長歌の辭の文も前後の照應などもある事なく、唯事の様を七五に調へ成すのみ歌の趣にて、文辭とさしも異別ならで、たゞ事の趣を長々しく云ひ連ねたるのみなれば、見るにも倦み、聞くにも飽きて、いとうるさく言痛き物とぞ成りける。是ぞ長歌の衰へて、普く人の作らず成ぬる基本にはありける」となし、この調の變化は、諷經の句調の歌に移りしものとせり。まかして其後益々衰へしを、近世にいたり、古學おこるとともに再びおこりしが、古歌の句格に至りては、未だ十分に明らめられず。こゝに於いてよく言辭以外に存する古歌の格調を明らめむとするもの、これ彼が本旨なりとす。

五格

かくて句格論に入りて、彼はまづ古長歌の句法に、序辭、發起、述義、判辭、結階の五つあることを説けり。これ即ち彼の所謂五格にして、詩の起承轉合より思ひ得しものと覺し。

また彼は、或は表出の方法より見て、事物の起原に溯りて叙し下す(入磨

表出の方法

首尾照應

段落

對句

對句の種類

の作に多くみゆと、目前の事物を直叙するとあり。前者に就きては、冗長に流れざる用意必要なり。後者には、目前の事物をまづ言ひて、それに就きて我が懷を述ぶるものと、その物を設け出でて詠める、即ち譬喩的なるものありとし、或は長歌には首尾の照應あり、その方法種々あれども、おもなるものは、先づ詠み出でたる起句の辭の上を、結句に到りて立還り其辭をもて結ぶもの、義をもて言外に結びて照應せるもの、又は、對句をもて起して、對句にて結びて照應せるもの、等あり。又一章の段落に就いて、段落の有無、數等に、種々の格ありと説けるが、彼の歌格論の主要なる點は、前述せし五格にして、この五格の備はれるを以て、長歌一篇の常格とせり。而してこの常格を經として、之が緯たるものは對句とす。對句は歌格上最も重んずべきものにて、長歌は之を以てその義を深め、その趣を幽艶ならしむ。而して彼は對句を、次の如く分類せり。即ち短對、常對、長對、隔對、三連對、義對、反對、組織對の八種とす。彼がこの分類は、精細なれど、些か混雜せる所あり。彼の意味をとりて考ふれば、對句は、三つの標準より分類せ

對句の長短もしくは數よりの分類

内容上の分類

らる。第一には對せらるべき句の長短、若しくは數より、第二には對句の内容より、第三には對句の層、若しくは段よりとす。第一のものは、殆どすべての句格研究家によりて爲されし所にて、之によれば、短對（イ立ちて居ての如き五言短對、ロ家を名をももの如き七言短對、ハ家のらへ名のらされの如き五七二句の短對）、常對（五七二句の對にて、最も普通のもの。又此中に、事の次第を言ひ述ぶる順次を對句に取れる、即ち常對の連續と見べき順次對といふものあり）、長對（四句を主として六句、八句、長きは十句づつに至る對句なり）、三連對（三句對したるなり）の四とす。第二の内容上よりの分類は、他の學者は餘り試みざりし所。彼は三を挙げたり。即ち義對（風吹けば白波騒ぎ、鹽干れば玉藻煎りつゝの如く、意味の對せるもの）、反對（もみづなばとりてぞふねぶ、背きをばおきてぞ歎く、の如く、意味の反對せるを對せるもの）、組織對（燃ゆる火を雪して消ち、降る雪を火して消ちつゝの如く、兩方の句を互に入れかへて對するもの）とす。元來これらの内容上の意味を特にもちし對句は、對句のうちの寧ろ特別の種類にて、一般の對句は唯調子の似し

隔對及び重對

句を重ねるを主として、意味の對といふ事は、さばかり重んぜず。まかして第三は、隔對及び重隔對と呼べるものにて、對句を二段若しくは二段以上重ねたるもの。これはむしろ重對と名づくべし。彼はこの對句の段と數とを混同せりしもの、ことけれど、後にはこれを區別して論ず。即ち常對の更に複雑なるものなり。而してこの隔對は、内容上には多く普通の對句にして、義對以下の三種の對は、多く、常對、長短對などの中にありて、この隔對中には稀なり。さて隔對の例を擧ぐれば、

二段に重ねし例、

□天地と

長く
久しく

□萬代に

こは、二段にて、對句の數二つ。

□纏向の日代の宮は

朝日の日照る宮

夕日の日がける宮

竹の根の根足る宮

木の根の根ばふ宮

□八百土よしいきつき宮

こは、二段にて、對句の數三つ。(彼の云ふ所によれば、前のより一段多く數ふべきなるが、こは段は前と同じく數に於いて多しと考ふべしと思ふ。)之に對して、更に段の多きは、彼が所謂重隔對なり。例へば、

イ鶯の來啼く春へは

ハ巖には山下光り

トニ錦なす花咲ををり

ロ小男鹿の妻呼ぶ秋は

チホ天ざらひ時雨をいたみ

へさにづらふ紅葉散りつゝ

對句運用の妙

こは三段重對の例なり。即ちイロの對一段。ハニ及びホへの對二つにて一段。最後にトチが又一段の對を爲せり。合せて三段なり。更に四段の重對(彼が所謂二段の隔對)もあり。これを一線中に二つ對したるもあり。而して之らの重對は又三連對の間にもあり。次に彼はこの對句の機轉といふことに重きをおきて對句運用の妙の歌格上最も大切なるを特に言へり。即ち曰く「對句に依て一首の義を深め、言外の餘情をも發する事なれば、古き歌どもは對句を以て事の次第を序でつれば、對句を置くには、前後の機会を能く考へて、その機会を失ふべからず。此機轉に依りて歌の巧拙は分るゝものなり」と。次に又彼は、轉義、判辭といふ事を特に重く論せり。彼は之を以て長歌一篇の意味の變化の活用を掌り、全體の體裁をひきまむる用を爲すものとせり。轉義は以て義を深め、判辭は以て上よりの義を轉じて、首尾を抱合せしむる要をなす。轉義の例は、

霞立つ長き春日も 晩れにけるたづきも知らず 村肝の心を痛みぬえこ鳥うらなげをれば

轉義判辭

「玉櫛かけの宜しき 遠つ神わが大君の いでましの山越の風の 獨居る吾衣手に 朝夕に還らひぬれば」

丈夫と思へる我も 草枕旅にしあれば 思ひやるたづきを知らに 網の浦の海士少女らが 焼く鹽の思ひぞもゆる わが下心

の中の玉櫛以下十句の如きこれなり。起句より連續し來れる意を、此句より轉じて、更に他事を作り出でたるもの、されば「うらなげをれば」より「丈夫と」に係けても、其意は通れど、この轉義あることは、その切迫せる鬱悶の情を表はす上に、大いなる力あり。判辭とは先に述べし五格の一つにて、序、發起、述義に述べ來りし意を判斷して、最後の整結に續くる用をなし、自ら一編の眼目なり。例へば、

まなてるつくまさぬかた

「息長のをちの小菅

「編まなくにい刈りもち來

「敷かなくにい刈りもち來て

◎唯におきて吾を偲ばす

〔息長のをちの小菅〕

の「唯におきて吾を偲ばす」の句の如き、これなり。前四句の意を承けて、
そを判断し、結末の句へ渡す用を爲せり。この轉義と言ひ、判辭といひ、漢
詩の起承轉合の轉句より思ひ得しものならむが、長歌歌格の妙を説明し
て適切なるものといふべし。而して彼は、最後に、これらの修辭法により
て、長歌の體裁には八種ありとなし、まづ、定格五格の備はれるを始めとし、
對句に起り對句に結ぶ格、對句に起り對句ならで結ぶ格、序辭と結辭とを
もて首尾を整へ中間を對句のみをもて調ふる格、二段に分れし格、初に疑
を設け終に之を釋く問答體、對句を多く用ゐる發語のみにて一編を連ぬ
る格、等を擧げたり。

中村知至

次に、天保以後、隆正是香の著に前後して出でし歌格論に就いて述べむ。
まづ中村知至の

體裁八種

長歌規則

長歌規則 五卷

嘉永二年成
安政二年刊

飾詞

あり。知至は、出羽庄内なる白井固の門人にして、下野鬼怒川に移り住
めり。彼の他の著なる古今遠鏡補正に、守部が序を書ける事より察する
も、彼が守部の影響を受けしこと、疑ふべからず。その歌格説また、大體、守
部に似たり。彼は長歌の詞を飾詞とたい言とに大別し、飾詞の中に、冠辭、
序辭、對句、地名、打かへしの五を數へ、またその對句を、普通の對句、冠辭對、同
一對、地名對、序辭對と分てり。其説總じて、簡單に要を得たれど、別に創見
は無し。されど、歌體を論じて「五七七」の三句の結語を歌體の根本として
説き、

結句より見
たる歌體

「歌は五七を一段として、一調に詠吟するを、其下に右の五七七の結語を
續くれば、常によむ三十一字の歌となる。是にまた、五七を加ふれば、七句の
歌となる。かく七句となりては、六帖にはゆる小長歌ともいふべく、さて
長歌となりては、必ず對句をもはらとすればにや、此七句は對句の下、結語
の五七七を置けり。さる故にや、對興りにたゞ一首見えたるのみにて、たゞ

におこれる歌なし。右の七句に又一段を加へて、九句の長歌となり、又加へて十一句となり、遂に四五十句より、百餘句に至る。長短定まれる事なし。唯句數に依りて、對句の置所おのづからによりしき所あるなり。」

「前にもいふ如く、五七の下、結語を置く、是を短歌とし、此結語のみ重ねて謠ふを旋頭歌といひ、又結語のみなるを片歌とぞいふ。この結語、上古は唯七言二句のみなるもあれど、淨御原の頃より、大方は五七七にして、山柿兩大人に至りては、七七のものなければ、今にさる七七のみの例の古歌を學ぶに、結語は五七七になすべきなり。」

といひしは、一種の解釋といふべし。

また彼は、同書に、圖式を用ゐて長歌の句形を示したるが、こは眞龍既に試み、守部またなし、ところなるが、彼のは、兩者に比して一層成功し、よく長歌一編の構成を、一目瞭然たらしめ得たり。

井上淑蔭

なほ學統を別にして、江戸の歌人井上文雄、既の門なる井上淑蔭の著に、

歌格新論

歌格諺話

兼句

歌格新論前編 一卷 (慶應二年成)

歌格諺話 一卷 (慶應三年成)

の二書あり。共に、和歌に於ける修辭、殊に主として兼句(言ひかけ)の妙用を説けり。彼は諺話に於いて、専ら宣長が私淑言の説を引きて論評を加へ、宣長が歌の句形(七言五言)と、あやとを混同せるを難じ、歌の妙を、あやにありとし、其あやのおもなるものは、言ひかけの句法にありと云たり。而して言ひかけの本義は、もとより義理にあらずして、聲調語意の修飾にありとなし、この立場より、諸學者の假字、たがひを論じて、往々古歌の言ひかけの用法を難せむとするを、言ひかけの妙用を知らざる無用の詮義なりと攻撃したり。云かして更に、「あやに三等の別あり。一つには心のあや、二つには詞のあや、三つには聲のあや」となし、此三つ具はりたるが歌の最上なりとなし、遂に進んで一般の譬喩法を説けり。兼句といひ、あやといふ、要するに譬喩法の謂なりしなり。その所論古歌俗謠に涉りて、的確。殊に兼句に假字遣を問はざる見識は、他の兼句論中、一頭地を抜けり。

師岡正胤

また幕末に出でて、勤王の志あつく、有志の士と共に足利三代の木首を
勿ねし師岡正胤明治三十二年は、篤胤の門流なり。彼は上田藩に幽閉
せられし六年間に、萬葉集を愛讀し、萬葉櫓乃撰葉、一卷を著せり。この書
は、紀記萬葉中の長歌を取出でて、句格上の注意を書き添へしもの。對句
章段等を挙げたるが、別に新説なし。

村山守雄

神風の伊勢の海

神風の伊勢の海 五卷

明治になりてより著はされし歌格に關するもののおもなる書は、伊勢
田丸の人にて大阪に住みし村山守雄明治廿三年の
なり。この書は、神代の歌はいづれも信じ難しとし、神武の御製中に、長歌
の根本の格存せりと説けり。その一種の思想より、和歌の始めを神武帝
にありと云たる説は、素より學問上根據あるものとは言ひ難けれど、その
神代歌を疑ひし説は、注意すべきものあり。(素より此點につきては、前にし

格則八箇條

めうたをう

述べ、かつ守雄自らも本書に挙げし如く、守部のわざなき説を始め、久老の八雲神
詠を、服部中府の沼河比賣の歌を疑へる等あれど、彼が所謂格則八箇條とし
て説けるところ、序句、對句、首尾等、別に前人以外新しき見識なけれど、彼は
めうたをうたの別ちをなして、句數の偶數なるを前者とし、奇數なるを後
者とせり。

權田直助

長歌學柱

未成句既成

神風伊勢の海は、明治十三年に出版せられしが、之にや、おくれで、平田
門なる權田直助明治二十年の長歌學柱一卷一名長歌品定。著はされた
り。此書は、僅に緒言のみ見るを得しが、著者は五言と七言とを二句と見
ず、五七連續を長歌の一句と見なし、五七の各を未成句と呼び、之に對して、
二句連續せるを既成句と爲せり。又長歌に起格、進格、成格、收格の四あり
て、その起格を、又、冠辭起格、序言起格、疊句起格、體言起格とせり。この四格
の分ち、春夏秋冬によそへしものにて、明らかに漢詩の起承轉結より考
へ得しもの。而して是香の説より、系統を引けるものとおぼし。

橋本直香

又、守部門に出でて、上野歌解萬葉私抄等の著ある橋本直香明治二十四年、二五、四九に

旋頭歌解

旋頭歌解 三卷 明治五年成

諸句格

あり。こは、紀記萬葉古今より、旋頭歌をとり出でて註解せしなるが、さすがに師の學風をうけて、その説のこゝかしこに、平凡ならぬふし見ゆ。この書に見えたる彼の歌格論は、上代には長短歌旋頭歌以外に、三句格、四句格、五句格（短歌とは別じ）、六句格、八句格（それらの句の字數は、五七と調へらむの目を舉げ、紀記よりそれに當る歌を挙げたり。總じて彼は、その師とともに、上代の歌の諸ひ物としての面白みといふことに着目せしにて、彼がかゝる諸々の格に注意せしも、その故なり。これ他の學者の多く看過せしところなり。

高須葛根

其他、遠江の人にて、中山美石、石川依平の門に入りし高須葛根明治廿五年、二五、五に、歌格分類抄二卷あり。こは前に述べし八木美穂の長歌私編の體

歌格論の結

裁にならひて、紀記の長短歌を分類せるものなり。

歌格研究の生じ來し動機と、その研究の成績の概要とは、上來述べ來りしが如し。之を概観するに、上代の歌風にならばむとの實際上の目的より促がされて、上代の和歌に對する形式的研究となり、上代の和歌の修辭的性質を明らかに去たるものなるが、その成績、勿論未だ完全なるを得ざりしといへども、多くはこれ質實なる學問的研究にして、大なる功績として認むべきものなくんばあらず。殊にその含めりし歌調の變遷論、歌體の構成發達等の論にいたりては、永く後代の學者を益するものあること、疑ふべからず。吾人は、歌格論者一派の研究を以て、近世歌學史上特筆すべき一現象として、推奨するに躊躇せざるなり。

結論

前述せし所を以て、吾人は、緒論にいはゆる「歌論を中心として、和歌一般に關する研究の變遷發達」を論述し、日本歌學史の綱要を叙し畢りたり。ここに擱筆せむとするにのぞみ、些か所感を述べて、此論を結ばむとす。

從來の歌論の批評

まづ吾人が研究の主題たる歌論の思想に就いて之を觀察し來るに、從來の研究が（殊に中世歌學に於いて）學問的ならざる蕪雜のものを含めるのみならず、その學問的思想といへども、多くは、偶感的、斷片的にして、未だ一個の學問をなすにいたらざることを看たり。玄かもそれらの思想たる、いづれも諸歌人が苦心の間に感得したる經驗の結果にして、その間には、多くの教訓眞理を含みて、捨てがたきものあり。而して、殊に近世にいたりては、例へば、宣長、蘆庵、景樹、御杖、その他、歌格研究家の説の如く、注意すべき學說尠からず。かつ遠く中世の初めより近代にいたる學說の變遷は、自ら一脈の連絡發展をなして、一般文學史と交渉影響して、吾人の爲

に興味ふかき一現象を提供せり。まかれども、以上の歴史的意義を別に
して、従来の歌學の成し、所は、素より未だ不完全なるものあるを見る。
その一々に就いて評せむことは、必要なかるべけれども、之を概観するに、
その所論の據るところが、單に和歌、殊に概ね短歌の一小範圍に限られて、
その眼孔ひろく一般の詩歌に及ばず。随つて、かゝる狹隘なる見地より
立論し來ることとて、或は和歌の原理を説きても、單にまごころといひ、眞
情といふにといまり、更にその以上に及ばずして、古今集序以來、多くの發
達を示さざる憾あるが如き現象を呈せり。これ全く、こゝに基せるなり。
然りといへども、こは従来の歌學者に之を責むべきことにあらざれば、別
とするも、和歌の一途に於いていはむも、第一に、その考慮専ら古歌に限ら
れ、自己が作歌の生きたる經驗に考ふるところ、少なきを始めとし、その古
歌の研究さへ、部分的にして、全般にわたらず。随つて部分的知識をもと
として立てたる所論とて、多くは深く和歌の本質に達せず、廣く和歌一般
に涉るを得ざる缺點あり。例へば、或ものは、ひとへに萬葉を祖述すれば、

其他の古今新古今に及ばず。或ものは、古今を専らとすれば、他を排し、ま
た或ものは、新古今に執して他を斥く。随つてそれらの好むところに拘
みてたてたる所論、自ら偏狹にして完全ならざるものあり。即ち眞淵一
派が眞情の思想は、以て萬葉古今を説明せむにふさはしからむも、新古
今には允當ならず。在滿が詞花言葉の思想は、新古今には當らむも、以て
萬葉古今を律しがたき等これなり。而して、第二には、其それらの古歌
に對する研究も、概ね極めて概括的にして、遂からず。ともすれば皮相の
觀察に陥るものあり。或は萬葉古今新古今等を論じて、たゞ漠然と論
じ去りて、その各集に就きて、或は深く作者各自の特色にもとるせる個人
的歌風を説くにいたらず。或は、ある題目に對する特殊的研究を爲す
に至らず。随つて、古來の和歌を解すること、精到を缺き、十分ならざる憾
あり。この二つの缺點は、従来の學者が、和歌に對して了解會得するところ
の不完全なりしことを示すものにして、さる不完全なる了解會得に基
づける古來の歌論の、未だ完たからざりしことは、言ふを俟たざるところ

なり。而してこれを一括し來れば、未だ和歌に對する基礎的研究十分ならずといふに歸し得べし。

この和歌に對する基礎的研究、これこそは、將來の歌學の爲に、最も必要なるところなれ。和歌の爲に完全なる歌學をものせむとせば、この基礎的研究に端を發せざるべからず。以下この點に關して吾人の考ふる所を概説せむ。

まづ吾人が説かざるべからざるは、和歌に對する理解てふことなり。すべての和歌を研究する人にとりて、まづ必要なるはこれなり。理解すとは、單に文字の意味を知るのみならず、諸時代諸作家の歌に就きて、その情趣その精神を、公平にかつ同情ふかく會得することなり。これなくば、和歌に關する完全なる研究は到底なすべからず。而してかの「歌は知ることの難きなり」といへるごとく、こは容易なるが如くにして、難事たり。字句の解釋に専らなれば、和歌の眞趣を逸す。まかして趣味は個人によりて異なり。故に、洽くかつ深く了解せむこと難くして、ともすれば偏狹

和歌に對する基礎的研究の必要

和歌に對する理解

に陥りやすし。まかしてかゝる完き了解を得む爲には、一つには和歌に對する智識ひろかるべく、一つには自ら少なくとも作者の心中を想像し得る程度まで詠歌の修養あるべし。自ら詠まざるものは、作者に對する同情少なく、その智識ある時代、ある作者に限られたるものは、おのづから偏頗となり、共に和歌を完全に了解すること難し。

これを根本的の條件として、次に必要なは、歴史的研究なり。これ從來未だ開拓せられざりし和歌の學問に就いて、先づ初めに來るべきものなり。而してそのまた基礎として、古來の和歌を改選して、諸撰集諸家集中の作を選抄し、縮撮するの必要あり。而してその標準は、一つには時代的、二つには題目的等あり。前者は、各撰集各家集相錯綜して含むところを、時代の前後によりて整齊し、縮撮することにして、後者は、同じくそれらを、それ／＼特殊の題目によりて、分類選抜することなり。これらを根據として、まづ和歌一般の變遷發達を論せし歴史研究せられざるべからず。そは一般の國文學史、一般の人文史と相交渉して、歌風歌體の變遷發達を

歴史的研究

古歌の改選

和歌史

歌學史

明らかにし、兼ねて國民趣味の推移に及ばざるべからず。而してこれに對して、古來の諸作家諸學者が和歌に就いて懷抱せし意見、和歌に就いて研究せしところの變遷發達を、研究せざるべからず。後者は歌學史の務にして、即ち吾人がこゝに企てしところのものなり。

特殊的研究

また、以上の研究の特殊の方面として、一時代、一撰集、一作家を中心とせし特別の研究なかるべからず。即ち、ある時代、ある歌風、ある作家の特質傾向を精しく明らかに、一般的研究以外、微細にわたりて、種々の問題を論ずる必要あり。まづ時代にていはば、藤原奈良朝、文治元久年間、文運復興以降等。撰集にていはば、萬葉、古今、新古今、新業等。作者にていはば、人麿、憶良、西行、定家、景樹、言道等。歌學にていはば、中世の六條家二條家の家學、近代の眞淵、宣長、蘆庵、景樹、御杖、守部など、殊に興味ある問題なるべく、また古來の和歌に、歌はれし、主なる特殊の題目に就いて研究し、各時代、各作家の自然人世に對する趣味、思想の變遷等を考ふるも、必要なるべし。

歌學の將來

歌學のもとより以上に盡さず。否、他に、むしろその主要の部分として、

和歌の理論を説く歌論の方面あり。即ち本書に述べし古人が歌學の研究を大成し、その他の歴史的研究を基礎とし、之かして自己の經驗、自己の考案を以て、之を組織したる一系の歌論の建設せられざるべからざるべしと、これなり。而して、これ最も多く、今後の研究に俟つべきものなり。

日本歌學史終

人名索引

縣居	縣居翁	赤人山部	顯家藤原	顯輔藤原	顯季藤原	顯季の弟	顯季の室	顯忠仲田	秋成上田	顯仲源	顯仲の弟	顯廣藤原	顯賴葉室	曙野井手	晁樹西原
四五	四五	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七	五七
敦隆藤原	敦隆の女	篤胤平田	厚比飯野	春滿荷田	厚見王	敦光藤原	篤好五十嵐	阿佛尼	安嘉門院四條	綾足建部	斐成小林	有家藤原	有國浦井	有年花井	有信植松
四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三	四三
有房千種	在滿荷田	幽齋細川	悠然公	遊翁海野	以敬齋	池主大伴	功垂相川	石川耶女	一翁六人部	一糸和尙	一條太閤	和泉式部	稻廣信田		
二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六	二六		

人名索引

長流, 下河邊	三三三, 三三三, 三三三, 三三三	宜隆, 草鹿砥	五三三, 五三三	則榮	三三三, 三三三
魚貫, 神山	三三三	宜胤, 藤原	二六	典仁, 親王	三三三
魚彦, 伊能	三三三	信友, 伴	四八, 五三, 五三, 五三	範政, 今川	一三九, 一三九
直兄, 松田	一七, 四八, 一四七	信長, 織田	一三〇	梅月堂	三三三, 三三三
直養, 西田	四八, 四八, 五〇, 一三三	信成, 加藤	三三	白圭, 大管	三三三, 三三三
直弼, 井伊	三三	信美, 荷田	二六	白樂天	三三三, 三三三
直助, 榎田	三三	範氏, 今川	一三〇	花園院	三三三, 三三三
直秀, 松木	三三	範兼, 藤原	四〇, 四一	濱臣, 清水	三三三, 三三三
直好, 熊谷	三三, 三三, 三三, 三三	範兼, 藤原	三三	濱成, 藤原	三三三, 三三三
直好, 定村	三三, 三三, 三三, 三三	範子	三三	濱雄, 藤原	三三三, 三三三
南郭, 服部	三三, 三三, 三三, 三三	範永, 藤原	三三	磐齋, 加藤	三三三, 三三三
南嶺, 子	三三, 三三, 三三, 三三	教長, 藤原	三三	春門, 村田	三三三, 三三三
業平, 在原	一七, 七, 六	宜長, 本居	三三	春郷, 村田	三三三, 三三三
仁德, 皇后	三三			春庭, 本居	三三三, 三三三
額田王	三三			晴信, 武田	三三三, 三三三
能因	三三			東平, 岡部	三三三, 三三三
信實, 藤原	三三, 三三, 三三			春正, 山本	三三三, 三三三
				春海, 村田	三三三, 三三三

春村, 黒川	三三三	弘賢, 日野	一三三, 一三三	遍照	三三三, 三三三
春雄, 小野	一〇五	廣足, 中島	四〇, 四七	辨入道	一一一
彦磨, 齋藤	三三	廣伴, 小栗	三三	保己, 一橋	三三三, 三三三
日頃, 正廣	一六	弘訓, 足代	四八, 五三	卜山, 烏丸	三三三, 三三三
久老, 荒木田	三三, 三三, 三三, 三三	廣通, 中原	三三, 三三	法成寺(道長)	三三, 三三
土満, 栗田	三三	廣道, 萩原	三三	法性寺(忠通)	三三, 三三
秀樹, 桂	三三	風觀齋	三三		
額則, 伊能	三三	風竹亭	三三		
秀忠, 徳川	三三	布淑, 小川	三三		
秀吉, 豊臣	三三	富士谷	三三		
秀能, 藤原	三三	富士谷父子	三三		
人麿, 柿本	三三, 三三, 三三, 三三	伏見院	三三, 三三, 三三, 三三		
人麿, 赤人	三三, 三三, 三三, 三三	藤孝, 細川	三三, 三三, 三三, 三三		
		太氏, 座田	三三, 三三, 三三, 三三		
		文雄, 井上	三三, 三三, 三三, 三三		
		文貞公	三三, 三三, 三三, 三三		
		冬嗣, 藤原	三三, 三三, 三三, 三三		
日野	三三	平安逸人糟粕子	三三		
日野家	三三				
平田	三三				

家長日記	三〇四	歌と禪	四九一四二四四五七	歌枕(公任)	三
今鏡	三〇	歌と禪趣味	一九三三三三三三三三三三	歌枕(能因)	三
今四行	三三	歌と治道	三二	歌枕名寄	一〇
今人慶	三三	歌と天台の佛法	二〇二六八二六	歌よむ心ば	三
今様歌	三三	歌と佛教	二〇二六八二六	歌論義	三
今やう姿	三三	歌と佛理	二〇二六八二六	打聞	三
伊呂波歌	三三	歌日記	二〇二六八二六	打かへし	三
う	三三	寄歌述懐百首	二〇二六八二六	雨中吟	三
有心	三三	歌の大旨	二〇二六八二六	宇奈爲能春佐備	三
有心體	三三	歌の旨舉	二〇二六八二六	初の菜	三
歌合	三三	歌のしらべの事	二〇二六八二六	初山踏	三
歌合目録	三三	歌のしらべ	二〇二六八二六	鶴舟のすさみ	三
歌がたり(春海)	三三	歌の委古今を論ふ詞	二〇二六八二六	え	三
歌がたり(鬼樹)	三三	歌の風體	二〇二六八二六	詠歌一體	三
歌語斥非	三三	鶴本末	二〇二六八二六	詠歌格調辨	三
歌城歌集	三三	歌は知る事の難きなり	二〇二六八二六	詠歌開書	三
歌口傳心持	三三	歌はよむ事の難きにあらず	二〇二六八二六	詠歌金玉論	三
歌詞	三三	歌は効なけれ	二〇二六八二六	詠歌聲調極秘之傳	三
歌と詩	三三	歌枕	二〇二六八二六	詠歌大綱	三
歌と神道	三三		二〇二六八二六		三

詠歌大綱註	三三九	翁草	三三九	歌格諺語	三三九
詠歌大綱辨	三三九	大庵窓の塵	三三九	歌學索引	三三九
詠歌大本秘訣	三三九	大歌	三三九	歌學三制	三三九
詠歌之大事七箇條	三三九	大澤隨筆	三三九	歌學新語	三三九
詠歌本論	三三九	大長歌	三三九	歌學新論	三三九
永久百首	三三九	大わさ	三三九	歌學初制	三三九
榮花物語	三三九	大わさ開書	三三九	歌學正音	三三九
永旨格	三三九	大わさ評判	三三九	歌學大成	三三九
永旨鈔	三三九	大わさ評判辨	三三九	歌學提要	三三九
妖艶の體	三三九	大わさ辨	三三九	歌學入門	三三九
悦目抄	三三九	音韻	三三九	歌學二制	三三九
悦目抄考證	三三九	か	三三九	歌學分類抄	三三九
江戸派	三三九	歌意考	三三九	歌學編風體の卷	三三九
延慶兩卿訴陳狀	三三九	江記	三三九	歌學論	三三九
縁語	三三九	考證類纂	三三九	垣内七草	三三九
縁の詞	三三九	上野歌解	三三九	柿木影供記	三三九
お	三三九	寄居歌談	三三九	歌經標式	三三九
老のくりこ	三三九	河海抄	三三九	歌經標式古寫本	三三九
老のすさみ	三三九	歌學方	三三九	樂曲考	三三九
鷗集集	三三九	歌學局	三三九	隔句	三三九
				隱題	三三九

樂章類語抄	三六八	雅情俗情	四〇一	活川雅俗風調の辨	四〇一
神樂入統	五〇六、五〇七、五〇八	歌辭類聚	三三三	桂の落葉	四〇六
迦俱樂考	五〇九	歌仙落書	一〇三	假字本末	四〇三
神樂催馬樂	一五三、一五四、一五五、一五六	風のしがらみ	三三	河社	二四九、二五〇
神樂催馬樂燈	四八四、四八五	雅俗再辨	三三〇	歌標	四〇一
神樂催馬樂燈大旨	四八四、四八五	雅俗辨のこたへ	三三〇	神於呂之神歌考	四〇一
歌會	三三三、三三六、三三九、三四〇	歌體緊要考	三三〇	上句下旬	四〇六
懸詞	一八〇	歌體約言	三三〇	感應	四〇〇
雅言俗言	四〇四	かた糸	三三〇	神明憑談(かむがかり)	四〇七、四〇八
歌源論	二七三、二七五、二七六、二七七	歌道御答書	三三〇	神風の伊勢の海	四〇八、四〇九
蜻蛉日記	二七三、二七五、二七六、二七七	歌道根元問答	三三〇	鍾狂人評	四〇七
重刊詞	二〇	歌道大意	三三〇	漢詩の影響	三三〇、三三二、三三三、三三四
家集の序	八八、三九〇、四〇二	歌道簡守	三三〇	感通	四〇二
家集辨	二〇	歌道天地解	三三〇	開田耕筆	四〇八、四〇九
歌集類語	三六	歌道秘藏錄	三三〇	漢文學の影響	七〇、七二、七三、七四、七五
楳園隨筆	三六	歌道秘事十五箇條	三三〇	彌辭談	四〇七
楳園下枝	三六	歌道非唯抄	三三〇	鴨川集	四〇七
雅情	三三	片歌	三三〇	鴨縣主家傳	四〇七
雅情説	三三	荷田家	三三〇	賀茂翁家集	三三〇
		堅室著書一覽	三三〇	賀茂翁遺草	三三〇

烏丸家	一八一	氣概ある歌	四〇四、四〇五、四〇六	近葉菅根集	三六八				
かりねのすまみ	一八一	紀記	三三八、三三九、三四〇、三四一、三四二、三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九、三三〇、三五五、三五六、三五七、三五八、三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六四、三六五、三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇、三七一、三七二、三七三、三七四、三七五、三七六、三七七、三七八、三七九、三八〇、三八一、三八二、三八三、三八四、三八五、三八六、三八七、三八八、三八九、三九〇、三九一、三九二、三九三、三九四、三九五、三九六、三九七、三九八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇二、四〇三、四〇四、四〇五、四〇六、四〇七、四〇八、四〇九、四一〇、四一一、四一二、四一三、四一四、四一五、四一六、四一七、四一八、四一九、四二〇、四二一、四二二、四二三、四二四、四二五、四二六、四二七、四二八、四二九、四三〇、四三一、四三二、四三三、四三四、四三五、四三六、四三七、四三八、四三九、四四〇、四四一、四四二、四四三、四四四、四四五、四四六、四四七、四四八、四四九、四五〇、四五一、四五二、四五三、四五四、四五五、四五六、四五七、四五八、五五九、五六〇、五六一、五六二、五六三、五六四、五六五、五六六、五六七、五六八、五六九、五七〇、五七一、五七二、五七三、五七四、五七五、五七六、五七七、五七八、五七九、五八〇、五八一、五八二、五八三、五八四、五八五、五八六、五八七、五八八、五八九、五九〇、五九一、五九二、五九三、五九四、五九五、五九六、五九七、五九八、五九九、六〇〇、六〇一、六〇二、六〇三、六〇四、六〇五、六〇六、六〇七、六〇八、六〇九、六一〇、六一一、六一二、六一三、六一四、六一五、六一六、六一七、六一八、六一九、六二〇、六二一、六二二、六二三、六二四、六二五、六二六、六二七、六二八、六二九、六三〇、六三一、六三二、六三三、六三四、六三五、六三六、六三七、六三八、六三九、六四〇、六四一、六四二、六四三、六四四、六四五、六四六、六四七、六四八、六四九、六五〇、六五一、六五二、六五三、六五四、六五五、六五六、六五七、六五八、六五九、六六〇、六六一、六六二、六六三、六六四、六六五、六六六、六六七、六六八、六六九、六七〇、六七一、六七二、六七三、六七四、六七五、六七六、六七七、六七八、六七九、六八〇、六八一、六八二、六八三、六八四、六八五、六八六、六八七、六八八、六八九、六九〇、六九一、六九二、六九三、六九四、六九五、六九六、六九七、六九八、六九九、七〇〇、七〇一、七〇二、七〇三、七〇四、七〇五、七〇六、七〇七、七〇八、七〇九、七一〇、七一三、七一四、七一五、七一六、七一七、七一八、七一九、七二〇、七二一、七二二、七二三、七二四、七二五、七二六、七二七、七二八、七二九、七三〇、七三一、七三二、七三三、七三四、七三五、七三六、七三七、七三八、七三九、七四〇、七四一、七四二、七四三、七四四、七四五、七四六、七四七、七四八、七四九、七五〇、七五一、七五二、七五三、七五四、七五五、七五六、七五七、七五八、七五九、七六〇、七六一、七六二、七六三、七六四、七六五、七六六、七六七、七六八、七六九、七七〇、七七一、七七二、七七三、七七四、七七五、七七六、七七七、七七八、七七九、七八〇、七八一、七八二、七八三、七八四、七八五、七八六、七八七、七八八、七八九、七九〇、七九一、七九二、七九三、七九四、七九五、七九六、七九七、七九八、七九九、八〇〇、八〇一、八〇二、八〇三、八〇四、八〇五、八〇六、八〇七、八〇八、八〇九、八一〇、八一三、八一四、八一五、八一六、八一七、八一八、八一九、八二〇、八二一、八二二、八二三、八二四、八二五、八二六、八二七、八二八、八二九、八三〇、八三一、八三二、八三三、八三四、八三五、八三六、八三七、八三八、八三九、八四〇、八四一、八四二、八四三、八四四、八四五、八四六、八四七、八四八、八四九、八五〇、八五一、八五二、八五三、八五四、八五五、八五六、八五七、八五八、八五九、八六〇、八六一、八六二、八六三、八六四、八六五、八六六、八六七、八六八、八六九、八七〇、八七一、八七二、八七三、八七四、八七五、八七六、八七七、八七八、八七九、八八〇、八八一、八八二、八八三、八八四、八八五、八八六、八八七、八八八、八八九、八九〇、八九一、八九二、八九三、八九四、八九五、八九六、八九七、八九八、八九九、九〇〇、九〇一、九〇二、九〇三、九〇四、九〇五、九〇六、九〇七、九〇八、九〇九、九一〇、九一三、九一四、九一五、九一六、九一七、九一八、九一九、九二〇、九二一、九二二、九二三、九二四、九二五、九二六、九二七、九二八、九二九、九三〇、九三一、九三二、九三三、九三四、九三五、九三六、九三七、九三八、九三九、九四〇、九四一、九四二、九四三、九四四、九四五、九四六、九四七、九四八、九四九、九五〇、九五三、九五四、九五五、九五六、九五七、九五八、九五九、九六〇、九六一、九六二、九六三、九六四、九六五、九六六、九六七、九六八、九六九、九七〇、九七一、九七二、九七三、九七四、九七五、九七六、九七七、九七八、九七九、九八〇、九八一、九八二、九八三、九八四、九八五、九八六、九八七、九八八、九八九、九九〇、九九一、九九二、九九三、九九四、九九五、九九六、九九七、九九八、九九九、一〇〇〇	紀記	三三八、三三九、三四〇、三四一、三四二、三四三、三四四、三四五、三四六、三四七、三四八、三四九、三三〇、三五五、三五六、三五七、三五八、三五九、三六〇、三六一、三六二、三六三、三六四、三六五、三六六、三六七、三六八、三六九、三七〇、三七一、三七二、三七三、三七四、三七五、三七六、三七七、三七八、三七九、三八〇、三八一、三八二、三八三、三八四、三八五、三八六、三八七、三八八、三八九、三九〇、三九一、三九二、三九三、三九四、三九五、三九六、三九七、三九八、三九九、四〇〇、四〇一、四〇二、四〇三、四〇四、四〇五、四〇六、四〇七、四〇八、四〇九、四一〇、四一一、四一二、四一三、四一四、四一五、四一六、四一七、四一八、四一九、四二〇、四二一、四二二、四二三、四二四、四二五、四二六、四二七、四二八、四二九、四三〇、四三一、四三二、四三三、四三四、四三五、四三六、四三七、四三八、四三九、四四〇、四四一、四四二、四四三、四四四、四四五、四四六、四四七、四四八、四四九、四五〇、四五三、四五四、四五五、四五六、四五七、四五八、五五九、五六〇、五六一、五六二、五六三、五六四、五六五、五六六、五六七、五六八、五六九、五七〇、五七一、五七二、五七三、五七四、五七五、五七六、五七七、五七八、五七九、五八〇、五八一、五八二、五八三、五八四、五八五、五八六、五八七、五八八、五八九、五九〇、五九一、五九二、五九三、五九四、五九五、五九六、五九七、五九八、五九九、六〇〇、六〇一、六〇二、六〇三、六〇四、六〇五、六〇六、六〇七、六〇八、六〇九、六一〇、六一三、六一四、六一五、六一六、六一七、六一八、六一九、六二〇、六二一、六二二、六二三、六二四、六二五、六二六、六二七、六二八、六二九、六三〇、六三一、六三二、六三三、六三四、六三五、六三六、六三七、六三八、六三九、六四〇、六四一、六四二、六四三、六四四、六四五、六四六、六四七、六四八、六四九、六五〇、六五一、六五二、六五三、六五四、六五五、六五六、六五七、六五八、六五九、六六〇、六六一、六六二、六六三、六六四、六六五、六六六、六六七、六六八、六六九、六七〇、六七三、六七四、六七五、六七六、六七七、六七八、六七九、六八〇、六八一、六八二、六八三、六八四、六八五、六八六、六八七、六八八、六八九、六九〇、六九一、六九二、六九三、六九四、六九五、六九六、六九七、六九八、六九九、七〇〇、七〇三、七〇四、七〇五、七〇六、七〇七、七〇八、七〇九、七一〇、七一三、七一四、七一五、七一六、七一七、七一八、七一九、七二〇、七二一、七二二、七二三、七二四、七二五、七二六、七二七、七二八、七二九、七三〇、七三一、七三二、七三三、七三四、七三五、七三六、七三七、七三八、七三九、七四〇、七四一、七四二、七四三、七四四、七四五、七四六、七四七、七四八、七四九、七五〇、七五三、七五四、七五五、七五六、七五七、七五八、七五九、七六〇、七六一、七六二、七六三、七六四、七六五、七六六、七六七、七六八、七六九、七七〇、七七三、七七四、七七五、七七六、七七七、七八〇、七八一、七八二、七八三、七八四、七八五、七八六、七八七、七八八、七八九、七九〇、七九一、七九二、七九三、七九四、七九五、七九六、七九七、七九八、七九九、八〇〇、八〇三、八〇四、八〇五、八〇六、八〇七、八〇八、八〇九、八一〇、八一三、八一四、八一五、八一六、八一七、八一八、八一九、八二〇、八二一、八二二、八二三、八二四、八二五、八二六、八二七、八二八、八二九、八三〇、八三一、八三二、八三三、八三四、八三五、八三六、八三七、八三八、八三九、八四〇、八四一、八四二、八四三、八四四、八四五、八四六、八四七、八四八、八四九、八五〇、八五三、八五四、八五五、八五六、八五七、八五八、八五九、八六〇、八六一、八六二、八六三、八六四、八六五、八六六、八六七、八六八、八六九、八七〇、八七三、八七四、八七五、八七六、八七七、八七八、八七九、八八〇、八八一、八八二、八八三、八八四、八八五、八八六、八八七、八八八、八八九、八九〇、八九一、八九二、八九三、八九四、八九五、八九六、八九七、八九八、八九九、九〇〇、九〇三、九〇四、九〇五、九〇六、九〇七、九〇八、九〇九、九一〇、九一三、九一四、九一五、九一六、九一七、九一八、九一九、九二〇、九二一、九二二、九二三、九二四、九二五、九二六、九二七、九二八、九二九、九三〇、九三一、九三二、九三三、九三四、九三五、九三六、九三七、九三八、九三九、九四〇、九四一、九四二、九四三、九四四、九四五、九四六、九四七、九四八、九四九、九五〇、九五三、九五四、九五五、九五六、九五七、九五八、九五九、九六〇、九六一、九六二、九六三、九六四、九六五、九六六、九六七、九六八、九六九、九七〇、九七三、九七四、九七五、九七六、九七七、九七八、九七九、九八〇、九八一、九八二、九八三、九八四、九八五、九八六、九八七、九八八、九八九、九九〇、九九三、九九四、九九五、九九六、九九七、九九八、九九九、一〇〇〇	近葉菅根集	三六八	金枕集	一〇一
歌林苑	三三	紀記の歌	三三一	琴後集	一〇一				
歌林雜話集	三三	紀記の歌	三三一	金砂	一〇一				
歌林撰抄	三三	紀記の歌	三三一	近體	一〇一				
歌林良材集	三三	紀記の歌	三三一	近代古體論	一〇一				
嘉録木	三三	紀記の歌	三三一	近代秀歌	一〇一				
會式	三三	紀記の歌	三三一	公任卿抄	一〇一				
廻文	三三	紀記の歌	三三一	禁中方御條目十七箇條	一〇一				
世資	三三	紀記の歌	三三一	近來風體抄	一〇一				
管見問答	三三	紀記の歌	三三一	狂歌	一〇一				
寛弘	三三	紀記の歌	三三一	京都歌界	一〇一				
觀古雜帖	三三	紀記の歌	三三一	京都派	一〇一				
玩辭象	三三	紀記の歌	三三一	玉葉集	一〇一				
寛文五年の宣言書	三三	紀記の歌	三三一	玉葉風雅	一〇一				
寛平以往	三三	紀記の歌	三三一	虚語實語	一〇一				
寛平延喜	三三	紀記の歌	三三一	虚字	一〇一				
歌苑連署事書	三三	紀記の歌	三三一	清輔雜談抄	一〇一				
き	三三	紀記の歌	三三一	清行式	一〇一				
九州道の記	三三	紀記の歌	三三一	舉白集	一〇一				
氣概	三三	紀記の歌	三三一	淨御原宮	一〇一				

古今選	三〇	國歌八論評及斥非評の評	二七六、二九二	五七調	七五、五三、三三、七
古今體	四六	國歌八論餘旨	二七五、二七六、二八二、二八三	後拾遺集	五〇、〇〇、〇〇、〇〇、〇〇、〇〇、〇〇、〇〇、〇〇、〇〇
古今傳授	六二、一〇二、一〇六、一〇七、一〇八、一〇九	國歌八論餘旨拾遺	二七五、二八五、三〇五	後拾遺集の撰者	三〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇
古今風	三三、三三、三三	國歌或問	三〇〇	後拾遺抄註	三
古今餘材抄	二九、三五、三六、三六、三六、三六	國詩	二六	後拾遺問答	一〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇
古今六義諸説	三三、三五、三六、三六、三六、三六	國史古歌集	三〇	越部禪尼消息	三
古今類句	一七、三三	國事八論	二八、三〇	腰折	二
古今和歌六帖	三九、四〇、四一、四二、四三、四四	國歌專門講々	一	後撰集	一〇、三〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇、一〇
國歌臆説	二八、二九、三〇、三〇、三〇、三〇	湖月抄	三三	後撰集の撰者	三〇
國歌臆説序	二七	五言七言	三三	後撰集の評	三
國學	二六	古言清濁考	三三	後撰集の撰者	三
國學校創造啓文	二六	古語深秘抄	三三	後撰集標註	三
國雅管窺	二六	古今著聞集	三三	五體	三
國歌八論	二六	心の種(廣道)	三三	古點	三
國歌八論	二六	心の種(守部)	三三	音盤	三
國歌八論斥非	二七、二八、二八	古事記	三三	音盤	三
國歌八論斥非再評	二七、二八、二八	古事記燈	三三	調の大綱	三
國歌八論斥非並駁	二七、二八、二八	古事記燈大旨	三三	調の道路	三
國歌八論評	二七、二八、二八	古事記諸歌註	三三	音葉の直路	三
國歌八論評及斥非評	二七、二八、二八	古事記傳	三三	音葉の直路辨	三

音葉の正道	三三	古來風體抄	七五、五三、三三、七	作文大體	一〇
詞不可出三代集	一〇、一三	古老諸談	一六	作例初學考	一〇、一〇
詞よせの書	四、四七	才覺	三〇、一〇、一三、一〇、一〇	さくぐり	一〇、一〇
後鳥羽院口傳	三	西公談抄	三	笹舎漫筆	一〇、一〇
小長歌	四、四七	龍馬樂	四、四七	さくめこと	一〇、一〇
小長歌體	四、四七	龍馬樂入綾	四、四七	さま	一〇、一〇
子に與ふる文	三三	龍馬樂入綾	四、四七	三箇大事	一〇、一〇
戀歌	三三	再奉答金吾君書	二六、二六、二六、二六	三義	一〇、一〇
木挽歌	三三	齊明紀童論推釋	三三	三義之大事	一〇、一〇
古風	三三	草庵集	三三	三玉集	一〇、一〇
古風近世風	三三	草庵體	三三	三句切	一〇、一〇
古風近體	三三	早雲寺殿廿一箇條	三三	三山歌の脱	一〇、一〇
古風後世風	三三	草根集	三三	三十六人歌合	一〇、一〇
古風三體老	三三	草根集の序	三三	三十六人歌仙傳	一〇、一〇
古風新調	三三	相對無對	三三	山柿之門	一〇、一〇
古風小言	三三	相對	三三	山柿論	一〇、一〇
古萬葉集	三三	桑門集	三三	三聖	一〇、一〇
金剛經	三三	草野集	三三	三體五品	一〇、一〇
混本歌	三三	界傳授	三三	三代集	一〇、一〇
		雜木末	三三		
		作歌故實	三三		

三代集風	秀歌	調花集	三〇
三條四家	秀歌大體	調花集の註	三〇
三條四寶澄卿附書	秀歌之體大略	調花集の撰者	三〇
三島之火事	秀歌之大略	調花集の評	三〇
三部抄	秀句	成章打聞	三〇
三部抄増註	秀句帶	成章家集	三〇
三部抄傳授	聚玉集	自説歌	三〇
散木奔歌集	秋風抄	師承戴恩	三〇
散木集註	袖中抄	師承傳授	三〇
山水髓厨	似雲述懷百首	師説自見集	三〇
三木の秘傳	詩學	私撰	三〇
交々草子	詩學の影響	自然眞實	三〇
亮々遺稿	四家式	自然眞情	三〇
小夜の寐覺	私記	自然眞情説	三〇
猿樂	時宜	自然單直	三〇
し	色葉和雜抄	順集	三〇
字あまり	四句切	下町歌	三〇
字あまりの句	四句絶	七五調	三〇
詩歌論	調花香葉	七百番歌合	三〇
秀葉和歌集			三〇

實意	芝山家	新古今集眞字序	四〇
實意實景	詩品	新古今主義	四〇
實句どめ	集外歌仙考	新古今時代	四〇
實景	集外歌仙考	新古今増抄	四〇
實字	十五番歌合	新古今體	四〇
實情實感	詩賦の影響	新古今の撰	四〇
實情實景	紫文要領	新古今の撰者	四〇
實法	拾遺古今	新古今風	四〇
十訓抄	拾遺草	新古今らるかづら	四〇
十體(定家)	拾遺集の評	進國歌説	四〇
耳底記	拾遺抄註	新後撰集	四〇
四條大納言問答	清水谷家	新耳底記	四〇
次點	新葉集	新拾遺集	四〇
四天王(南北朝)	新器測量法	新情	四〇
四天王(平安)	心敬法印庭訓	眞情自然	四〇
詩と歌	親句疎句	眞情説	四〇
科野の家づと	信支家法	眞情説自然説	四〇
信濃波録	新古今集	新千載集	四〇
他種		新撰字鏡	四〇
詩の病			四〇
詩法			四〇

新撰髓腦	三三,三六,二二	正治二年歌合	四	織錦會隨筆	三六
新撰萬葉集序	三三,三七	正徹物語	一〇,一三,二二	續後紀	三六
新撰則詠集	四	正風	一六	序辭	四四,四六,四五
新撰六帖	六	正風體抄	一七,二四	附撰集の評	五
新撰和歌	一三,三〇	淨瑠璃抄	五	調の歌(景樹)	一七,二〇,三三,三四,三五,三六,三三
深窓秘抄	二七	釋日本紀	三三	調の歌(高倫)	一七,二〇,三三,三四,三五,三六,三三
新撰古今集	一五,一六,一四,一七	釋萬葉集	二二	調の直路	三五,三六,三七,三八,三九
神代	四四	寂蓮と顯昭	一〇	調の歌(直路)	三五,三六,三七,三八,三九
神代歌	三七,三九,四〇,四一	春葉集序	三	調の歌(高倫)	三五,三六,三七,三八,三九
神道説	四九,五〇	俊秘抄	七	調の直路	三五,三六,三七,三八,三九
神道和歌之秘訣	三三	俊基長明の一派	一	調林采葉抄	三五,三六,三七,三八,三九
新勅撰集	六六,一〇,一四,一五,一六,三三	序	一	調林問答	三五,三六,三七,三八,三九
新勅撰主義	三三,三〇,三六	水元和歌式	三七,四〇,四六	調林問答	三五,三六,三七,三八,三九
新勅撰の撰者	一	松門和歌談	五	四六文の影櫻	三五,三六,三七,三八,三九
新點	一二,一五,一六	準二條家	一七,二六	崇古派	三五,三六,三七,三八,三九
神武記	三	序歌	三	數奇	三五,三六,三七,三八,三九
新類題和歌集	二〇	初學考鑑	五,六	資慶卿口授	三五,三六,三七,三八,三九
下冷泉家	一七	初學和歌抄	四	鈴屋門	三五,三六,三七,三八,三九
上古歌謠要解	三三	序句	一		
正治奏狀	四六	諸國歌枕	三		

鈴屋門下	四四,三五	聲調	三三	千載集の評	二八,三三,三五
相撰立	五	清寧記	三七	撰集	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
駿騷雜話	二九,三〇	聲文私言	四九,五〇	撰集故實	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
水蛙眼目	一〇	請露玉話	三三	撰集の來歴	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
隨所師説	三四,三五,三六,三七	逍遙院殿記	一八	千五百番歌合	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
髓腦	三〇,三二	樵夫問答	二四	撰萬葉集時代條々	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
季經定家の争	源	抄物	三三,三四,三五,三六,三三	川柳	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
末分梅	一六	撫古長歌集	三	撰和歌所	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
せ		碩鼠抄等	三	宗匠家御教訓	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
井蛙抄	三三,三〇,一八,三三,二〇	席話抄	一〇,三六,三〇	奏覽狀	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
清巖茶話	一〇	世説	一	續歌仙落書	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
制禁の詞	一六	世説新語	一〇	續古今集撰者	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
背花丹葉抄	二八	世尊寺流	六	續古今集	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
勢語臆斷	三元	雪玉集	一六,二〇	續群書類從	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
省察工夫	二〇	旋頭歌	一〇,四九,五〇,五二,五三,五四	續拾遺集	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
制詞	一四,一五,一五,二五,三九,三六,二	旋頭歌解	二六,三七,三八,四六,五〇	續後撰集	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
制詞説	六,三五,二〇,元	旋頭歌四體	五〇	續後撰の難	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
制詞難	三三,三〇	旋頭歌抄	五,五三	續花集	一〇,一七,二七,三〇,三四,三五
誠實	三〇	仙覺抄	三,五,五三		
誠實自然	三六	千載集	二,三,五,六,五三,五〇,一〇,一二,一四		

續拾遺集	三三	大日本史	三七	丹鶴叢書	四二〇、四二〇
續千載集	三〇	泰平年表	三三	短歌撰格	四二〇、四二〇
續類題和歌集	三〇	大嘗會便蒙	三二	短歌と片歌	四二〇
俗言	四〇	内裏進上之一卷	三三	探題	四二〇
曾丹集	三〇	唐樂	三三	贈大小心録	四二〇
曾丹集摘草	三〇	倒語	三三	段落	四二〇
袖の鏡	三六	堂上家	三三	龍の公美賀茂の真淵とひ	四二〇
七		堂上歌學	三三	こたへ	四二〇
題詠	一七、一〇一、一〇二、一〇三	堂上歌人	三三	答龍公美書	四二〇
題詠	一〇〇	堂上派	三三	爲氏對爲相	四二〇
戴恩記	一〇〇	當世妙々奇話	三三	爲兼一派	四二〇
大學	一〇〇	常流	三三	爲兼卿和歌抄	四二〇
大學詠歌	一〇〇	たゞ言	三三	爲世對爲兼	四二〇
大學寺派	一〇〇	たゞこと歌	三三	爲世爲兼の争	四二〇
大學辨	一〇〇	玉あられ	三三	爲世の門流	四二〇
醍醐雜抄	一〇〇	玉あられ附論	三三	田安家	四二〇
大成武鑑	一〇〇	玉勝間	三三	達磨宗	四二〇
大日經	一〇〇	玉の小櫛	三三	達磨風	四二〇
				たなやめ風	四二〇
				たなやめぶり	四二〇

ち

維岡隨筆	五三	長歌の變遷	四三、四三	月夜の燭	五一
ちかどなり	五三	聽玉集	三三	菟波波集	五一
千木の片そぎ	五三	定爲法印申文	二二	筑波問答	一八
竹園抄	一一〇	仲哀記	五七	土金傳	二二
地下	一一〇	中右記	四	土御門天皇に奉る文	六〇
地下風	一一〇	中古歌仙傳	元	都通傳	二五
持明院派	一〇九	勅撰	三三、四〇、四一、四二、四三、四四、四五、四六、四七、四八、四九、五〇、五一、五二、五三、五四、五五、五六、五七、五八、五九、六〇、六一、六二、六三、六四、六五、六六、六七、六八、六九、七〇、七一、七二、七三、七四、七五、七六、七七、七八、七九、八〇、八一、八二、八三、八四、八五、八六、八七、八八、八九、九〇、九一、九二、九三、九四、九五、九六、九七、九八、九九、一〇〇	經信卿母集	二五
貞應本	一〇九	勅撰盛知衰運	四九	徒然草	一〇
長高體	八三	女子の歌	一〇九	て	
長歌規則	五三、五五〇	千代の古道	三九、五九	定家假字遣	三八
長歌撰格	四九、四九〇、四九七	摩ひぢ	三三	定家卿消息	六
長歌大意	八八	對句	四九、四八二、四八三、四八四、四八五、四八六、四八七、四八八、四八九、四九〇、四九一、四九二、四九三、四九四、四九五、四九六、四九七、四九八、四九九、五〇〇、五〇一、五〇二、五〇三、五〇四、五〇五、五〇六、五〇七、五〇八、五〇九、五一〇、五一〇	定家卿和歌式	六
長歌短歌古今相違之事	三三、三五	對句說	一〇	訂正古今集序	一四八
長歌短歌說	三三、三一	對語	一〇	貞徳翁筆記	三三
長歌短歌旋頭歌	三三、七〇、四八、五〇、五二	通俗辨	一〇	貞門風	三三
長歌對句類集	五五〇	撞賢木	四三	調段	四二
				朝敵辨	四二
				朝野群載	四二
				摘英集	四二
				摘要冠辭考	四二